

川柳塔

平成七年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷八一四号



日川協加盟

No. 814

三月号

第19回 全日本川柳長野大会

とき 6月11日(日) 午前9時半開場

ところ 長野県松本文化会館(松本市水波)

宿題 第一部(事前投句・5月10日締切)

「群」 西山 金悦選

「刻む」 矢島 破酔選

「順番」 吉岡 茂緒選

各題2句・無記名、封筒に住所・氏名を明記し、出句料1000円(定額小為替・現金書留)を同封して左記へ

出句先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11

ステップイン南森町702号

全日本川柳協会大会係

宿題 第二部(当日出句・午前11時半締切)

「政治」 田中正坊選

「掌(てのひら)」 木野 由紀子選

「歩く」 須田 尚美選

「充電」 今川 乱魚選

会費 3500円(昼食・記念品代共)

観光 6月10日(土) 3500円

前夜祭 同 午後6時 5000円

宿泊 浅間温泉ウエストンホテル

申込先 〒384 小諸市小諸郵便局私書箱26号

全日本川柳長野大会事務局

第10回国民文化祭・とちぎ95(文芸)

川柳 作品募集要項

詩歌の香りを 栃木から

応募受付 平成七年四月一日(土)～六月三十日(金)(当日消印有効)

期間 但し海外からの投稿作品は、必ず応募期間内に着くようにしてください。

応募作品 宿題(事前投句) 一人各題二句詠 (未発表作品に限る)

応募料 宿題(当日句) 一人につき、高街 森 学 校 女 流

応募方法 栃木県実行委員会作成の募集要項を御覧のうえ、所定の応募用紙を使用して御応募ください。

応募先 ③三三〇 栃木県宇都宮市本町九一四 県庁南第二別館内

選者 (1)第一次選者 (五〇音順) 去来川巨城・橋高 薫風・鈴木柳太郎

(2)第二次選者 (五〇音順) 田頭 良子・錦 俊坊・西村 在我

(当日句) 横地 霧静 野谷 竹路・吉岡 龍城

賞 (2)第二次選者 磯野いさむ・川俣喜彦・仲川たけし・尾藤三柳・八木千代

賞 文部大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・栃木県知事賞

発表 栃木県教育委員会教育長賞・宇都宮市長賞

発表 宇都宮市教育委員会教育長賞・他

発表 川柳大会(入選発表・講演会・選評)

発表 平成七年十月二十九日(日) 十時～十六時

発表 栃木会館小ホール

発表 宇都宮市本町二二一

問い合わせ 入選作品は作品集として刊行し、応募者全員に無料配付します。

主 催 ③三三〇 栃木県宇都宮市本町九一四 県庁南第二別館内

主 催 文化庁 栃木県 栃木県教育委員会 宇都宮市 第10回国民文化祭栃木県実行委員会

御見舞

謹んで阪神大震災により被災された方々に心よりお見舞申し上げます。

川柳塔社

一月十七日午前五時四十六分、あかつきの夢を破った上下動につぐ水平動の一分半の震度7の激震は、時がたつにつれてあのユニークな神戸市を中心に西宮、芦屋、尼崎と近隣の都市を総なめにした惨状は、テレビ・新聞の報道により目を覆う許りとなりました。

友人、知己、親戚を阪神間に持つ我々は、安否を気遣って電話してもかからず、

行くに交通マヒということで、あの悪夢の日から十日経った今日まだ判然としな一方のあるのは、誠に残念であります。とりわけ神戸に拠点をもっておられる、ふあうすと社並びに時の川柳社の同人・誌友の方達の安否如何許りと推察する時、胸の痛むのを憶えます。

仄聞するところによれば、ふ社の主幹静港子さんはご無事でしたが、お家は半壊で近くの学校に避難しておられるとのこと。ふ社の事務所はビルの中にあつたため、書類は残っているということですが、巨城会長は明石に住んでおられるので御無事、好啓さんは肺炎で入院中でご無事。一方、時の川柳社の主幹はご無事でありますが、印刷所が全壊のため、二月号は発刊が大幅に遅れるとのこと、こちら様も同人が神戸在住の方が多いので連絡が

とれないそつで、両社の方々の御安全をお祈り申し上げます。

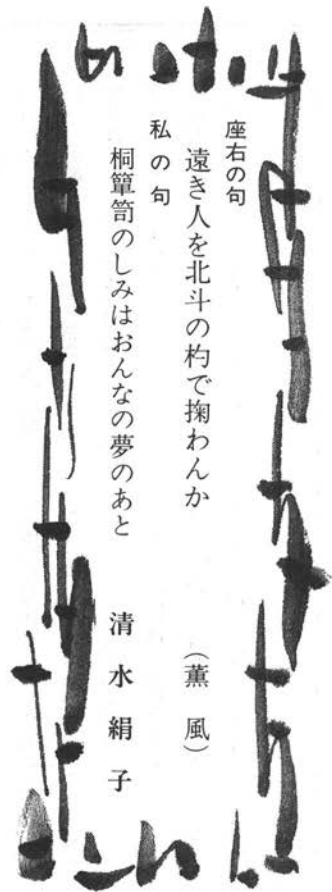
一方、当社は、諷云児さんが一月二十日と二十二日と二回に亘って詳細なお知らせを下さいました。まだ連絡不能の方が数名おられます。心配なことです。

あんな大きい地震でしたから、どちら様も大なり小なりのご被害があつたと思いますが、心をとり直して復興に力を入れましょう。

先ずは取急ぎお見舞まで。

昔から「地震、雷、火事、女房（平成元年から）」と言っただけあつて、なるほど地震の恐ろしさをしみじみと分かりました。関西は地震に対して無防備だったことが、この悲惨事を大きくしたのと思います。心してこそ。

西尾 栗



座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薫風)

私の句

桐箆笥のしみはおんなの夢のあと

清水絹子

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 御見舞

この不思議なもの

西尾 栄 (1)

川柳塔 (同人吟)

八木千代 (2)

自選集

橘高薫風選 (4)

川柳の群像 川村伊知呂

東野大八 (46)

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (二十五丁)

(48)

水煙抄

高杉鬼遊選 (52)

秀句鑑賞 「同人吟」

安藤寿美子 (50)

水煙抄

小野克枝 (75)

渺湖抄

小出智子選 (76)

大空のころ (51)

橘高薫風 (79)

この不思議なもの

八木千代

大相撲初場所 東西の新横綱が意地と誇りをかけて競い合っています。日毎の好取組にも目が離せません。野球では近鉄の野茂投手が大リーグに挑戦するそうだし、新聞の第一面には、国民不在のままに相も変わらず、離合集散をくりかえす政界。「天声人語」のいろは加留多から拝借すると、「論より数」「花よりポスト」「企みは道連れ」「老いては子分が従わず」「夢よもう一度」などなど。まあ、騒々しいこと、にぎにぎしいこと、これが毎日まいにちです。その上にエリツイン大統領の荒々しい政策、ロシア軍は停戦発表と攻撃の繰り返し。そのロシアに多大な援助を約束させられたのは「盗っ人に追い銭」ではないかと我が家でも新作かるたはまじって。

それにつれて私まで「ああじゃ、ゴッじゃ」と結構息巻いて仲間に入っているのですが、実は心の中は別の悩みが渦巻いているのです。曰く、投句の締め切り、選句の締め切り、地域住民としての義務その他、私事のあまりにも詰まりすぎた日限りの、また時間厳守の約束ごと、胃の底にはいつもさざ波が絶える事はなく後悔の連続、おまけに能率の悪いこととつたありません。いつもそうならいっそ

茴香の花

鳩

一路集「句う」

「柔らかい」

初歩教室「雪」

各地柳壇（佳句地十選／西原颯子）

新年おめでとう会

堀口堯人さんの句碑拝観記

二月本社句会

柳界展望

三月各地句会案内

■編集後記

西出楓楽選……（80）

石倉美佐子選……（82）

石尾かつ乃選……（82）

福本英子選……（83）

吉岡美房……（84）

東野大八……（99）

……（98）

……（100）

……（106）

……（107）

……（108）

正坊・みつ子・楓楽……

座右の句

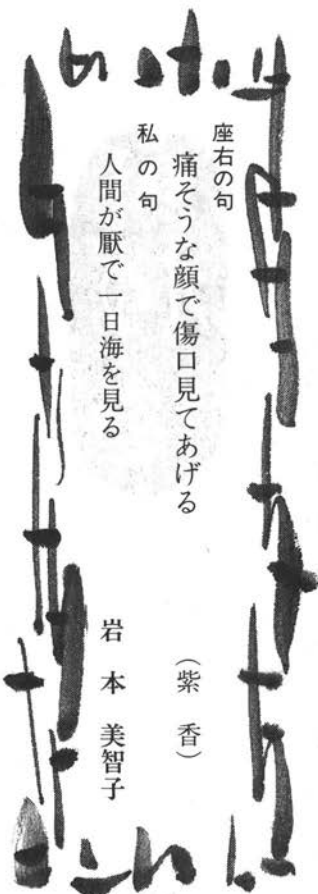
痛そうな顔で傷口見てあげる

私の句

人間が厭で一日海を見る

（紫香）

岩本美智子



早めに断わればいいものを、それさえ時期を逸してしまふという曖昧な対応には我ながら情けなくります。「ねばならぬ」仕事と、「たい」事が山積しているというのに、目の前の出来事に振り回されるというよりも、好んで逃避しているのが真実でしょう。

ほとほと自分に愛想が尽きて懺悔さんげに打ちひしがれている時、思いもかけぬ現象が起きます。人生、捨てたものではありません。そのことに気付いたのは、ごくごく最近のことですが、それは猛然と机に向かいたくなくなるのです。逃げていた問題に取り組まねばと思ふのです。結果は別といたします。もともと私ごとき、実力以上のものが書けることは望めないのですから。

とにかく誰かに背を押されるように義務感でも苦痛でもなくて、手を取られるみたいにむしろいそいそ加減に、いつのまにか締切りの結果をかううじて越えているのです。そして真夜中のひとりだけの乾杯。また明日からは次の関所が待ち構えているなど露思いもせず、他愛なく枕に首を預けるといふ始末です。つらつら思いますれば、私という途方もない怠け者に「締め切り」のある仕組みは大きな神さまのみ恵みに違いなく、その「締め切り」なるもののお蔭でどうにか列に従って行けるのかとこの頃では思ふのです。

境界をくぐり抜けても風野原

千代



橘 高 薫 風 選

羽曳野市 吉 川 寿 美

子に斬られ妻に斬られて無位無冠

耳も眼も殺いで師走をやり過し

幾ばくの余命を思ふ木守柿

持ち時間いっぱいあつた頃の虹

縄尻を妻が握っていて平和

輪の中で笑いおくられていて独り

鳥取県 江 原 とみお

猪の牙にしめ縄張っておく

福はどうやら鈍行でくるらしい

結論はどうあれ旨いものを食う

別れ時 月やわらかな貌で出た

ごゆっくりを鵜呑みにしてはいけません

自己批判ですかそれとも愚痴ですか

竹原市 小 島 蘭 幸

猪の眼よ十八歳の僕がいる

哀しみがはじまる 一本の煙草

煙草を一本下さい とても眠いのです

簡単なことではなくて父を継ぐ

受験生今日もピアノを弾いている

野良猫に名前を付けている妻よ

青森県 田 中 叶

のど飴をくれた時から好きになる

人妻を乗せウインカーみぎひだり

不景気な世だ中年の野球拳

礼服のままのパチンコよく入る

除雪車が行くモーターの並ぶ道

マネキンのかお生意気なまま二月

米子市 新 正 子

タンポポの笑顔で春の幕が開く

峠から亡父のころが見えて来る

お静かに未来が乳を飲んでいて

五時半に必ず吠える嫌な犬
太陽も月も映せる水たまり
本当の川だめだかが泳いでる

高槻市 川島 諷云児

飽食に慣れて感謝のない世相
反省のたびに零れる砂時計

浮世とや男女の猿芝居

生きるとは悲しいことよ紙おしめ

貧すれば鈍する父が憎めない

順風満帆 泥舟だとは気づかない

唐津市 仁部 四郎

あれはあれこれはこれとて嘘まみれ

上役のジョーク屋台で裁かれる

バス動くガイド セリフを思い出す

一点を見つめて神を売りに来る

常識の門で男が踏むたら

さばさばとした人柄で前頭

西宮市 菊池 トミエ

母は待つ黒い電話のある家で

風の恩 夢はたびたび破れたが

とんねるを出るとふる里風の駅

石仏は寂風だけの通る道

平凡な人生だった 古鏡

少年に駆込み寺があればよい

雪曼陀羅 五欲を包む袈裟となる

地蔵さま和顔愛語の花を抱き

わたしからわたしが消えたデスマスク

八十年残りの顔の泣き笑い

銭勘定ちつとも合わぬひとりもの

弘前市 高瀬 霜石

過去はもう振り返らない豆の蔓

焼香の指から洩れるつむじ風

宝石は嫌いと妻が言ってくれ

躓いて大人になってゆくのだらう

ひとりの死ひとつのドラマはじまりぬ

黒石市 相馬 一花

子供より犬の嫉が得意です

金の無いデンデンムシは角出さぬ

二時間で二合酌むなら良いお酒

働いたふりして暮らす二号様

盃に唇寄せる酒二段

五所川原市 斉藤 効

震度六こけしが転ぶなお転ぶ

断水三日 水神様に縋る

いじめっ子はひとりもない雪合戦

少年よ覇者の涙を見てごらん

昔名医の廃屋あり吹雪ます

雑踏の中は時計も早送り
ひとり夜の酒は毛ガニとともにいる
りんどでも持って行こうか母の顔
初場所がいつのまにやら始まつて
東京はふる里思ひ出す所

弘前市 浅田隆樹

孫二十 坂本冬美型美人

和歌山市 桜井千秀

夕ガ緩めイザコザ避けて夫婦なり
立ち止まったらあかん後ろが押してくる
切羽詰って立てためくじらだったのに
甲高い声を元氣と褒めないで

堺市 桑原道夫

鯛を睨む男ありけり水族館

初笑い家族の温き取り戻す

和歌山市 垂井千寿子

癒えし父に銀白色の悩みあり
兄の腹は芋虫よりも無防備な
少年のように道の雪汚れゆく
旅人にあらずとも川流れ出す

人生の岐路を背負った重い絵馬
四面楚歌だけど野山に春生まる
快くなつて癌だったのを自慢する
初曆みな美しい日にしたい

鳥取県 新家完司

寝屋川市 岸野あやめ

消えそうないのち家族で取り囲む
寝不足が続いて犬と喧嘩する
理屈ばかり言つて売れない絵描きさん
竹筒に小銭を貯めて人嫌い

僕の好きなおかずいっぱい誕生日

和歌山市 牛尾緑良

青空の広さを知った迷い以後

背伸びせぬくらしの中の筑前煮

和歌山市 西山幸

まだ汗をかく明日がある五十の背
人間と人間の差にある笑顔

時々天に昇つて身を清め

一本で酔う酒とても足りぬ酒

磨き込んだ鍋にこころが映るなり
ありがたく一人の部屋に薄日射す
やじろべえに微震が続く冬の夜
にがい一日あまい一日 珈琲飲む

尼崎市 田中 薫

黒板の文字は消えている遠い昨日
魚たちの眠り 記憶を脱落させて

海鳴りの朝な夕なに魂振れる

ここはこの世かしみじみ水が喉を越す

虚構の海に漂う古ばけた机

大阪市 清水 絹子

お見舞いに行くに夫婦の口合わせ

中座へ行く朝の鏡の光りおり

人形になれずひと言嫁姑

コンニチワ言え母さんの背にかくれ

四季報をつんで炬燵の時代劇

松山市 宮尾 みのり

料理する男で離婚歴も持ち

石をもて追われた土地へ文学碑

譲れないものは譲れずきた月日

孫自慢 老いに加速がつきはじめ

しばらくは息子を嫁に貸しておく

出雲市 岸 桂子

臆病で軽石一つ移せない

母の手にある傷跡はわたしだらう

容赦なく貧乏ゆすりばかりする

一本杉が枯れてバランス崩れだす

どうしても初心に戻れないにぎり

出雲市 久谷 まこと

木々芽立つ人の力は無にひとし

もうすでに決まっていそう絵馬の数

合掌の手からもれてる欲一つ

不本意な誓いに倣うのも処世

結局は一人芝居の幕下ろす

出雲市 竹治 ちかし

来る試練 亡父の叱咤と受けとめる

作品を壊して守る銘一つ

ちよつと親思ってくれただけで良し

祝う日の酒は注いだり注がれたり

娘の切った髪に気付かぬ父で居る

出雲市 吉岡 きみえ

たわいない話ふたりの冬ごもり

ネジ巻いて巻いてわが家の古時計

足袋の穴 素性あかさぬままにいる

若さから夢をみている木の葉舟

遠耳のふたりになって珍プレー

島根県 堀江 芳子

帯しめて皇后さまのようバッグ

意見吐くときは年齢忘れてた

ほつとして夫をくるんだバスタオル

うがいごろごろ亡父がいて亡母がいて

慰めの言葉わがことだと気付く

島根県 小砂白汀

あゝ父子 斗酒なお辞さぬとこまで父子
凍る夜 銀河流るる切なさよ

握手してきた掌だ余人にふれさせぬ
なるほどと思うところにあるポスト
混然とオーケストラは酔うており

島根県 榊原秀子

お正月 無事に迎えたお正月
手のひらに転がす五色豆と京
好きだから好きでさしてゐる男傘
雪舞いをじつと見てゐる寒くない
水仙が咲いた春の音など聞きましょう

島根県 松本文子

どのように生きてても影は淋しがる
達筆できたのは選挙後援会
焼かれても熱くはないよ雪女
ありがとうそしてみんなはちりぢりに
亡夫がしたように息子が餅を搗く

松江市 柳楽鶴丸

満足して入れる壺をつくっておく
日本人の胃袋 世界の植民地
初対面と思えぬ趣味のあたたかさ
枯れた松 松喰虫のせいにする
女が強くなって楽になりました

北九州市 梅田宣司
相談もなく老人に組み込まれ
我輩がライバルだったとは愉快

大鳥居昔の道はこんな幅
歩ばかりの遊び仲間は騙せない
七十路火中の栗をなお拾う

松原市 小池しげお

これまでになれた最初の恋敵
嵯峨菊を咲かし乱心悔いてゐる
わだかまり消えず葉ばたん植替える
裏話チョット嗤ってよろしいか
妻よりも先に死んでもいいように

藤井寺市 吉岡美房

裸木となつて安心した銀杏
初夢に俺の知らない俺を見る
上段の構えで凍りつく寒さ
回れ右すれば会いたい人ばかり
寄せ鍋のある風景で仲がよい

松原市 玉置重人

ほどほどに暮らして足るを知つてます
事なかれ主義が又する先送り
妻病んでリズムが狂うヤジロベエ
又ケンカしようよ点滴の妻よ
煙草吸うあまりに細き女の子

富田林市 池 森 子

しみじみと緑をこぼす我が暦
食べ頃は熟知グルメな狩人よ
逆風のスタートだった柿の種
スタートは刃物のような切れ味で
愛されて夢風船は一〇〇個ほど

羽曳野市 田 中 透 太

大それた野心は持たぬ秋刀魚焼く
矢印の通りに行くともとの道
いつまでも錯覚でよい老眼鏡
まだ札をいうのは早い茶を入れる
そんなはずではない壺が割れている

岸和田市 高須賀 金 太

魂の光り輝く多喜二の忌
蓄ですはるか彼方を見えています
ぶちあたる度に分厚くなる壁だ
純粹な男はへそをよく曲げる
落ちつきが無くなっていた天保山

豊中市 田 中 正 坊

誠実という生涯もさびしけれ
寒の月 愚直に生きるほかはなし
仏壇のリンをひさしくたたかない
シャンデリア卒寿につどう孫曾孫
仲よきは美しきかな娘の一家

箕面市 岩 津 ようじ

偉い人をばろくそにいう偉い人
病人へ病人が書く見舞状
リストラがまだ追ってくる二度の職
平成の猪らしく可愛い目
よくよくのこと御仏にすがる鬼

守口市 森 川 まさお

ゆたかなる海の初日をひとり占め
大海原 不意に故人を思い出す
初夢も見ず愚かなるひとり旅
幾山河つめたい両手をポケットに
山は枯木 一基はギリシタンの墓

寝屋川市 江 口 度

学校の日の丸 元氣とりもどす
新春のドアゆっくり開く除夜の鐘
寝たきりの祖母へふすまを開けておく
妻の聞く前にうまいと言うておく
モンローのスカート思うシクラメン

寝屋川市 堀 江 光 子

小さい手の介添えもして初詣
仲間待つ新酒と古いぶどう酒と
大舞台照りかがやいて三番叟
本棚の隅にボトルのある書斎
齢をとる楽しさもあり福寿草

吹田市 瀬戸 まさよ

未来過去駆けぬけました風邪の熱
ベランダに四季の風恋う花がいる
あいまいで世界の風に揺れる国
ポケットに小銭得した気分です
鬼平が好き悪人を容赦せず

岡山県 荻野 鮫虎狼

元氣かと息子と一升瓶が来た
海外の旅 見送ってから昼寝
三ヶ日済んだ巡査の永い風呂
共白髪 無言で動く十二月
丑年のくせに牡丹鍋が好き

岡山県 矢内 寿恵子

目を閉じる逢いたい人に逢うために
早口に慣れる酸素の足らぬ街
募金箱やさしい音で落ちている
束の間の秋から長い冬の景
家系少し変える美人を探してる

唐津市 久保 正 剣

切り捨てた尻尾探しに戻る街
影法師此処から先は内緒だぞ
助成金欲しくて集う池の鯉
今までもこれからもないホームラン
エマニエルと浮遊している森の中

唐津市 山口 高明

背徳の炎へおんな身を投げる
吹込んだ毒がそろそろ回る頃
期待した物をつけずに三人目
天井の染みがあいつの貌になり
ビードロの魅惑におとこ五十年

宇都市 平田 実男

車椅子スキップしたい日もあろう
ミサイルの世に外濠を大事がり
損得で動き細って行く絆
一回の酒 十回の茶に勝る

鳥取市 武田 帆 雀

ドリンクを飲んで原稿息を足す
出不精の妻 捻れコンニャクを巻く
筋だけは通して来たと威張るなり
マネキンの裸 紳士と淑女です
百霊の声高鳴って酔い切れず

米子市 川上 より子

早春賦 父は八度の年男
愛しきものの加護へ柏手きっちり
羊水に近い温度へ湯浴みさす
大樺伐って家族がひとり減り
遅い賀状にお逢いしたいと記されても

米子市 菅井 とも子

祖父譲りの額だ何かしでかしそう

三人の中に居るので気を許す

ゆるやかな坂だ三年待つてみる

三番ホーム故郷に向った汽車が待つ

永らえて上官殿で来る手紙

鳥取県 石谷 美恵子

自問自答しながら餅を丸くもむ

翔ぶつもり逆立ちだつてまだでさる

笛吹くか踊るか返事急かされる

子に貰うものは苦のたね笑い種子

頼りない翼大きなことを言う

鳥取県 土橋 はるお

新しい隣が出来ぬ一軒屋

寄付帳に爺さんの顔父の顔

祈祷する神主さんは同級生

毛糸の玉がトイレについて来る

二次会に可能なほどは有る財布

鳥取県 土橋 螢

風花が光つて春を待つところ

生涯にもう二度とない春よ春

新しい手袋はめて無をつかむ

私の噂している喫茶店

人妻と仲よし悪いことですか

鳥取県 鈴木 公弘

これからをしみじみ思ふ初明り

煩惱の腹八分ほど屠蘇を酌む

七人に負けぬ破魔矢を買つてくる

初風呂に浮いた笑顔を忘れまい

窓際の仕事始めに雪が降る

尼崎市 春城 武庫坊

昭和史の悔いが今なおつきまとう

昭和史に続きの道がけわしくて

戦場で拾った命五十年

も一人の僕と話すが妥協せず

一日がとつても早く粉雪舞う

尼崎市 春城 年代

さみしがりの絆どこまで引きずつて

深呼吸 心許せぬ町に住み

冬の底 夫は友の弔いに

三叉路に立つて昔の匂なし

本棚からあしたの本を選び出す

西宮市 門谷 たず子

エプロンで包めるほどの愛でよし

やんわりと自己主張する黄水仙

花びら餅とおうすで孫もかしこまり

どの石も光って見える孫の数

日向ぼこ鬼も気弱になつてきた

西宮市 林 はつ 絵

会社での顔は知らぬが母は母
子に習うこと多くなり老いてゆく
欲しい頃娘が出すお茶のみどり色
露天風呂 童話の星になつてくる
これだけは果そう山へ行くまでに

西宮市 奥 田 みつ子

子は鏡 私の短所よく見える
春風に畑打つ人もまた詩人
翔びたがる窓にバサツと屋根の雪
月煌々 故里のない身をかこつ
寒風にさらす救いなき愚かさ

西宮市 西 口 いわゑ

打つ人の気概で鐘も音を出す
海月の骨抜いてみるのもおもしろい
美容院自分だんだん淡くなる
地の果てに落ちた夕日は誰のもの
月冴えて一入寒い別れなり

西宮市 亀 岡 哲 子

エプロンをはずししみじみ論す母
おめでとう日の出拝める子の新居
電池入れ替えにふるさとの時計屋
請求書2Bで書く八百屋さん
黒い記憶 火はあかあかと燃えていた

川西市 氏 林 洋 敏

正月に家族の絆太くする
正月の海を見たくて遠出する
別姓も良いなと娘には言うておく
包丁を研いで心を鎮めてる
お隣もお向いさんも駐車場

川西市 松 本 ただし

捻子巻いてみても遅れる鳩時計
寒椿ボトリひとつの喪が明ける
ピリオドをしっかりと打てたら萬歳だ
マジックの種は尽きないゼニ儲け
戦後まだ終らぬ闇の雪おんな

宝塚市 中 田 純 次

孔孟の教え汲んではこぼしてる
輪の中でいつも亡き娘と生きてきた
遺言もプランのうちにに入れておく
疑えば握手をしても笑えない
過ぎ去れば他愛なきことばかりなり

米子市 林 荒 介

拭き上げて眼鏡を今日の陽に晒す
瘦身の骨を刻んで来た時計
白線も白を通すは難しい
輪の中でも内緒が喉元にある
硝子戸を横切る朝昼晩の音

米子市 野坂 なみ

神さまも鬼の掟が崩せない
子の海の灯台守で終りたい
鈴を振りながらその山越すだろう
招かれて私の椅子が見当らぬ
身のうちの鬼は死ぬまで出てゆかぬ

米子市 寺 沢 みど里

越えてきた波が額に現われた
棚も老いて軽い荷物に切りかえる
手帳から見ればわたしは頼りない
廃船のへさを沖へ向け直す
目標の椅子がそっぽを向かぬよう

大阪市 河 井 庸 佑

不平不満言わぬ気持を汲む上司
雑用と軽く考えたは不覚
同じ山登り体力確かめる
他人を知り自分を知ってここは退く
発想を一新 生きる道拓く

大阪市 西 出 楓 楽

なまくらになった刀は隠しとく
昼の月言いたいことがきつとある
三ページ辺でリタイアする大江
嫁姑同じはかりに乗れません
つまりきはたぶん考え過ぎのせい

岸和田市 原 さよ子

じいちゃんの着物が似合う祝い膳
いやな事去年へ捨てた初日の出
本代の無心は祖父をよろこばせ
流行へちよっぴり邪魔な皮下脂肪
好きな事出来る私が輝いて

岸和田市 古 野 ひ で

風邪こじれ神妙になる冬ごもり
旅帰りひとりぼっちへ仏間の灯
やるせなくなつかし亡母の袋帯
年男 今年の風を信じきり
即興の句に私がありありと

河内長野市 井 上 喜 醉

なにもかも忘れて飲める友と酔い
死後の夢見る程ひまでない私
空っぽの水ガメ ストレスだけ溜まり
仲間割れするなら傷の浅いうち
一本の時計の針で夫婦坂

八尾市 宮 西 弥 生

百歳まで生きてはならぬ預金帳
人間が好き土が好き詩をよむ
まだ八十まだ九十と上り坂
これからを生きる器を焼いている
これからもひとり芝居のドラマ書く

八尾市 片上英一

安眠をやぶられ豆腐すくわれる

息ぬきはゲーム カラオケ 屋台村

駅弁の広告旨し八尾西武

奈良漬は伊勢海老と言うが如しか

山小舎の灯よ青春はこだませり

熊本市 永田俊子

言いわけをにこにこ聞いて信じない

リゾート化をお地蔵さんと嘆き合う

思ひ出は碎けて散るよ池の月

シルバー席に座って欄外かと思ふ

戻り橋 女の乳房が張ってくる

竹原市 時広一路

万歩計 相も変らず土手の道

がたがたとすまいよ潮は引いている

寒空におつちよこちよいの花芽吹く

半分は当った手相じつと見る

素晴らしい夕陽 写真は止めてくれ

広島県 藤解静風

不惜身命 肩の力を抜きなはれ

友の計や一日胸に風が鳴る

格別の寒さ去年もそう言った

川柳がボクを見ている怖い目で

輪廻転生 少年たちの遺書にない

竹原市 森井菁居

いじめられても盆栽に口が無し

子に夢を託しすぎると打つちやられ

未熟者同士の内は馬が合う

あつけない命に気づく身内の計

雑音がない山峡の春が好き

広島県 田村新造

置き捨てにするのに戦友は掌を合わせ（奥安嶺逃亡記）

戦友捨てて興安嶺に秋の風

上弦の月がわびしい野を逃げる

郭公の声で破れた昼の夢

猫柳に隠れてマーチョやりすごし

弘前市 小寺花峯

左遷地は敗北と言う北にあり

トイレから覗いた喪服の後を追う

しばれる日 子らの帰りが遅すぎて

口紅を引く娘が家を出ると言う

カスターネットのリズムに合わぬわだかまり

弘前市 中山雅城

村おこし石の地蔵も動き出す

初雪に子供の口は天を向く

雪解けて春のビー玉顔を出す

よく見ればガラスの玉も光る春

雪国は木の根っこから春になる

八戸市 島田昭治

当然のことをしてゐるに褒める人

義理欠いてもう心根が痛まない

双六で上がった人の棺を持ち

千円を届け馬鹿だと雀ども

悲しみが天に届いて雨となる

十和田市 阿部進

耳揃えボンと納める保釈金

現代っ子 師にも親にも口つぐむ

青春を楽しんでいる里の祖母

世話好きな嫁で我が家の宝です

倅せは自然に抱かれ生きる日々

東京都 山口新子

三十年目にて届かぬ父の年賀状

古手紙父をこの日に帰したい

駆け込んでツンと鼻かむ冬の駅

葉ぼたんの規則正しい息づかい

足の甲 八方美人でいた三十路

町田市 竹内紫鍔

風の子どころかファミコンの子ら

ワープロも乗せ年末の旅

政治しか語らぬ理科のクラス会

欠席の返事と缶ビールがふえた

O B会 握手最多は喜寿のころ

横浜市 菱田満秋

敗戦のつけに時効はないらしい

脅かされ銀行ひとの金を出し

塾へやるのを教育と心得る

よちよちを腰を浮かせて眺めてる

よそへ出たゴキブリ見ないふりをする

富山市 舟渡杏花

心経のリズムに酔うてる はらぎようてい

地球儀にふれる硝煙匂い出す

よく耐えた握りこぶしだ湧く拍手

笑い皺今生き生きとひかり増す

美しいことば使って蓋をする

唐津市 浜本ちよ

寡婦となり安らぎと空虚昨日今日

ほんとうに大切な物は何だろう

炎えるもの何にも無いが川柳があり

悲しみの深さ涙も出てこない

あれこれと資格を取って親不孝

香川県 川崎ひかり

限界を知ってる腰の万歩計

うれしくて下戸の私が二日酔い

これしきの酒に酔うとは歳かいな

ぶさいくな顔と今更言われても

共稼ぎだんだん秘密多くなる

香川県 永峰 伽名子

二進も三進もゆかぬに恩師の訃
斯かる今 二本の足でボツボツと
冬眠からやつと芽ぶいて句や詩が
古巣の友はなつかしありがたし
税務署は昔むかしへさかのぼり

香川県 池内 かおり

傷口を広げただけの電話口
職退いた夫が情けに脆くなり
二日酔いするほど飲めぬお小遣い
解らない程度に酔っている違反
ときどきは何しに來たか解らない

松山市 白石 春 嶺

巻き戻す悪夢祈りの五十年
価格破壊 既に父権の小さい影
七人の敵を味方にする笑顔
貸している方から先にする会釈
人間としては駄目だが金があり

今治市 越智 一 水

仏の灯守りご飯がおいしいよ
子の嫁にお早うさんと先に言う
生き生きと生きよう年は考えず
庭石に鳥糞おとし実をおとし
日の匂い土の香匂い春の唄

今治市 矢野 佳 雲

仔牛誕生 少年拳握りしめ
目上から借るのはソロバンでも同じ
人類愛の中の一人に妻がいる
小芋つるり邪険な箸につかまらぬ
まん中へ子がくいついた串団子

岡山市 川端 柳 子

南天の紅がたわわに幸希う
激突を避けていのししいま昼寝
だるま片目でいくとせここに座れとや
ご近所へお年賀の声ポチが鳴く
すて置けぬものあり心の垢拭う

倉敷市 小野 克 枝

錆びた釘一本を抱き神を抱き
忘れない記憶の中の小さい駅
斜め向くくせと闘う車椅子
偽りは書けぬカルテよ鬼となれ
羨望の的にされてる瘦せている

岡山県 山本 玉 恵

縦糸をまたより直し逢うてます
ペンを置くあらかしこ花の彩
ワープロで時々謀叛ころもみる
もう少し上手な嘘を言つてほし
本心をつつみ橋まで来てしまふ

竹原市 石原淑子

お白酒 老母の手製の木目込雛よ

だからこそ笑顔を作る姫鏡

チューリップ待ちきれないで買って来る

このつかり漬け物石の愛想う

鰯食べ豆まく国のいとおかし

美禰市 安平次 弘道

脱線の数には触れぬ縄電車

世渡りのうまさ酔えない酒に酔い

二次会で刺された釘が疼きだす

物分かりが良すぎて鬼になり切れず

倦怠期互いに探すキーワード

下関市 石川侃流洞

どう見ても妻が先だと思わない

見本ほど開いて桜酔いたがる

いい返事ばかり選挙に出る気だな

香車猛進 敵の悲鳴が心地よい

一度に二人 我が家の春へこのとり

鳥取市 両川洋々

一期一会次は奈落で出逢おうか

十字架の真つ正面で嘘を吐く

方円の水です君とでも添える

波の私語僕の秘密をあばくなよ

これ酒よ俺の無念が解るかい

鳥取市 美田旋風

葉またひとつ増やして生かされる

子が喋る嘘に相槌打ってやる

選挙戦かかる電話はギャルの声

猪をなだめて春の夢を追う

新春の大地へ一歩初詣

鳥取市 春木圭一郎

世間には内緒の金を持っている

鬼もいるだからこの世は面白い

二次会の途中そわそわする二人

いのししが多くてノルマ高くなる

いのししのように恋路を走りたい

米子市 澤田千春

ろう梅がまた母の忌をつれてきた

節目ごとに女がとばす銀の鶴

スタートに戻れば心風いどくる

目の前で猫が一回転をする

つまりいた石としばらく話する

米子市 田中亜弥

雷が真上から威して困る

濁点を取れば中味がばけてくる

椅子の高さにまだまだ足をあげられる

呆けたのか極楽の道見失う

上座には福の神なら座らせる

倉吉市 最上和枝

粗末には見えるが由緒ある茶碗
不発弾抱く受験子に歩を合わす
飾らない家に立派な人が住む
きつと来る宇宙でわたし眠る日が
竹とんぼ一番星に恋をした

鳥取県 石尾 かつ乃

生かされて春には春の出会いあり
先輩が走るわたしも走り出す
曲り角 少しおしゃべりしたくなる
娘の便り待つて窓にはぐれ雲
水たまり心の揺れをはつきりと

鳥取県 松下 たつみ

人生のあしたへ辞書を買うてくる
飾らない娘で井物が好き
後を継ぐ約束のない父の城
善後策 後は面子におまかせし
春一番棘ある花は棘を持ち

鳥取県 田村 きみ子

浪花から娘を連れて子が帰る
大根の白さに負けぬ歯を磨く
快調に喋る妻です聞いてやる
終列車の妻を迎えに出るらしい
湯上がり牛乳僕の命づな

鳥取県 土橋 睦子

祈りに明けて祈りに終る修道女
眉太くひいておんなの初鏡
協同の力が握り飯つくる
寝たきりの母に紅梅見せてやる
憎めない顔して姑になつてゆく

松江市 舟木 与根一

先頭を好み貧乏籤ばかり
遠謀深慮 切り札を持たせとく
据え膳の毒が男に回り出す
怠け癖ついても黒字減らぬ国
アメリカの林檎の気持ち分からない

出雲市 小玉 満江

初日の出そして夕陽も見える町
缶ジュース最後は軽く振ってポイ
滑らせた言葉が後へ戻らない
出て行けと言えばほんとに出て行つた
白菊も永雨も泣くか事故現場

伊丹市 樫谷 寿馬

スーパーの隅に七草ある八日
橙に猛暑に耐えた艶があり
丸刈に邪念が残る初日の出
成年の孫と乾盃 春の膳
障害の手足で参る初詣

京都市 都倉求芽

中の下の席でのんびり暮してる

地の星にいつかなりたい街灯り

長所ひとつプロにもなれる長所かも

ディアナ・ダービンに並んだ五十年前の春

その昔かくれて読んだキタ・セクス・アリス

和歌山市 堀端三男

足ることを知って今年のはのんびりと

傘マークの絵馬に神様当てられる

繰り上げスタートきかぬ人生ひた走る

受け皿に合った答がまだ出ない

思い出し笑いを呆けにされていた

和歌山市 福本英子

三面鏡少うし罪が深すぎる

三分で出来た味噌汁褒められる

猫だけが訪ねてくれたお元日

逢うた日の風邪大切に卵酒

短日を造花生け花庭いじり

和歌山市 木本朱夏

花野から芒野なにを追いかけて

着ぶくれて恋もそろそろ好い加減

盗まれた一行がありさむい詩集

北を指すゆびの先から木枯しに

潔く生きるかたちに針葉樹

大阪市 本間満津子

数え直してみたって私傘寿やな

握手しておおきに言うて終りたし

蠅入らず健在 母の台所

一張羅 着こちの良い古モード

もういいかい春待ち遠しくしん坊

大阪市 上田柳影

千円でつせ頼みまっせと初戎

粗大ゴミが仏壇掃除しています

運不運 一步後れただけのこと

広辞苑が笑うこんな汚れても

強くなれ強くなれと餅がふくれだす

大阪市 大塚節子

自分史を書き添えるたび皺の数

地下鉄が地上へ抜けて雨を知り

或る杜葬 男同士のさぐり合い

かにかくに月夜の蟹は果敢なくて

命名に筆をおろすや初硯

大阪市 川端一步

メードイン・ジャパンが希少価値ですぞ

天牛に向かうと足が軽くなる

スナックは家へ帰れば呑み屋なり

友の字と違えば病かと思ふ

年賀状字が跳ねている孫誕生

春を待つ毬掌に温める

堺市 山本半銭

よもぎ摘む土手で昔に遭うている
ボロ市の花簪に誘われる

古ノートそれは稚拙な女の子
人込みを避け孫と行く宵戎

堺市 中野樺子

乙亥のファイトを孫に下さいな

喜寿の幸受けとめる掌をあたためる
心の奥にピンクの箱が五十年
布袋さま袋の福を受験子に
体調に始まり終るクラス会

堺市 藤井一二三

ほどほどに生きて甲斐あり年暮れる(年末年始雑感)

降るほどに鳴る鐘の音に歳移る

無事今日につなげた命初詣

はつはるの雲の姿もやわらかし
猛進をさけてわが道失わず(自戒)

箕面市 坪田紅葉

行ける時 行つてよかった旅の宿

旅の友 次のプランもすぐきまり

取りまぎれ悲しむ間もなく一周忌
孫二人やつと嫁いでほつとする

夜も更けて一人で過す雨の音

老木におじぎをしたい冬の朝

吹田市 栗谷春子

いのししが断然好きになりました
人形も土鈴も馬もみじろがず

嫁く前に燃しし二通よそれも冬
三輪山をかくせし雲はあのような

吹田市 山本希久子

越冬の御札に鶴は舞いながら

行きゆきてこころあたりで荷を下ろす
帰り待つ大根こんにやく柔らかい
手をつなぐ一人で行けば遠い道
虹はるか辛抱強くなりました

茨木市 堀良江

おしゃれするくらいがよろしおじいちゃん

一つだけ待つてたように元日草

まわり年の親子炬燵のロゼワイン

今年から孫にも盃のまわる初春

七草の二つ足りない祝い粥

藤井寺市 福元みのる

ワープロを使いこなせぬ歳となり

内視鏡黒い腹まで探れない

ピストルに注意と家内から言われ

半額のレットル剥がしハイ土産

脱ぎつぷり欧米に日本負けて居ず

何万人の中の一人の初詣

岸和田市 寺田 甚一

正月がすんで故里もとの顔

膝の上に座ってくれぬ孫小二

満足し愚痴もこぼして古希迎え

出来ることも齢口実に逃がっている

富田林市 松本 今日子

青々と七草粥は繊細だ

マイペースそんな猪もいて初春や

水の音いつも聞いている銀杏の木

一枚の賀状に私甦る

香を焚くそんな一時あってよし

富田林市 片岡 智恵子

やがてくる春へみの虫夢をみる

生きている証ニュースに涙する

安定剤もらえば飲まずとも眠れ

無人駅人恋しがる風にあう

御仏に逢う階段のきついこと

和泉市 岡井 やすお

理念より離合集散政権へ

弁護士が法の裏へも助っ人に

通勤が空くと帰省で混む電車

プロブーム早慶戦も色褪せる

楽しさに飽きて怖さを追う子供

のこり福上出来上出来のくらし

独立独歩やはりわたしに合っている

展望へすすく伸びる竹の節

雪洞の灯へ亡母の影ふと過る

スコッチに氷は美しく崩れ

枚方市 海老池 洋

はや昭和七十年と雑煮箸

思い出の雪崩るような通夜の席

サクラサク・チルドんぐりの背くらべ

書きようもあるなと思う葉書くる

知らぬ間に立ち知らぬ間に失せる虹

八尾市 山下 美津留

子宝を授かり賀状華やかな

転勤と聞いて酒屋が飛んでくる

体面を保てと母はもう言わぬ

束の間の風に騙され舟を出す

混浴の男が逃げる様変り

大阪市 神夏磯 典子

自分を試す正月と言う節目

冬眠から覚めたらしたいことばかり

喧嘩出来る夫が丈夫でいてくれる

芽が出たら助けてやろう豆の蔓

分析表 食べたいものとにらめっこ

寝屋川市 柴田 英壬子

大阪市 稲本 凡子

年寄の気持がわかる年になり
質より量 量より質と住んでいる
年かしらチエ熱がもう出ない
私の打つ釘みんなへそ曲り
空っぽの頭にCTとれと言う

大阪市 井上 白峰

天と地の狭間で喘ぐ人の群
口車迂闊に乗って風を呼ぶ
どちらにもとれる言葉に惑わされ
持つ人の品位で決まる物の価値
上げ底の虚栄を隠す包装紙

高石市 浅野 房子

ラウンジでコーヒー飲んで出たホテル
単細胞連鎖反応してしまふ
選手交替 猪突猛進するつもり
秀句なし皆勤賞を持ち帰る
聞きたいが聞けない事で胃がふくれ

寝屋川市 平松 かすみ

福は内 松阪肉を当てました
幸せは 鯉 昆布の味を知る
テクテクとスペイン村は日本晴
遊園地 迷子になったのはどちら
ルールから外れてみたいのも本音

八尾市 宮崎 シマ子

隣も咳 我が家も咳の寒の入り
和服着た妻がやさしい声になる
しっかりと七十歳に踏み入れる
元日からもうジーンパンの若い嫁
頂き物で日々が間に合う老夫婦

岸和田市 島崎 富志子

おこたからテレビ見ている眠ってる
六十路きて六十路の迷いまだ有りき
煩惱を払う木魚のにぶい音
誤解されやすいお口がよく動く
薬害かも知れぬ白髪が多くなる

岸和田市 岩佐 ダン吉

並びから少しはみ出てるのが僕
妻までもやはり見飽きた顔で見る
耳すまし土筆のノック聞いている
少年がまた一人死す冬の朝
五万発の核に警鐘鳴らしたい

生駒市 北山 悟郎

仕合せの空気腹一杯娘の家で
何か有る明日を期待し今日を生き
拳に軍歴しかと握りしめ
善人になりたくて掌を合わせてる
街彷徨何かを拾い何か捨て

大和高田市 岸 本 豊平次

相変りまして今年は良い年に

知らなかったで済ませるものを渦の中

マイカーで来て野仏の道を逸れ

定退が洗濯物を取り入れる

点滴を持ってトイレに回復期

和歌山市 内 芝 登志代

寄り道のスリルまだまだ艶がよい

ひと言がこんなに温い冬の駅

抜き足で妻の寝顔を見て出勤

金平糖幼い夢がきらきらと

ふろふきの大根舌で踊ってる

和歌山市 山 口 三千子

人生の岐路か我が身の置き所

子は嫁に託し夫と歩を合わす

寸劇を重ね櫓山近くなる

黄昏て不発の夢を捨てきれず

一泊の孫へオマルを買ってくる

名古屋市 越 村 枯 梢

あの人と流れていった笹小舟

珈琲をブラックで飲む負けいくさ

来世は重荷負うまい牛の背よ

生きている証見せんと四股を踏む

古里の便りうれしい四季の風

神戸市 山 口 美 穂

歳末の忙しいのに風邪もひき

寒牡丹の蕾へそつとありがとう

梅一輪 早春譜をハミングで

水仙も梅もひかえ目に初春告げる

老母の背がみんなのゆく道を教え

姫路市 丁 坪 サワ子

春夏秋冬巡る速さにいつか喜寿

今日よりは若い日のない喜寿祝う

仕来りを嫁に合わせた屠蘇の膳

姑の樹を揺する孤独な音返る

カタツムリ目を出せ槍出せ嫁の留守

姫路市 大 原 葉 香

車いす目線の高い人に会った

テレビ見終り欠伸をしたらもう忘れ

平成のメガネ明治の字が読めぬ

指五本あつて書く字の上手下手

グリーン車に冷たい客の目が並ぶ

岡山市 花 田 たけ志

新年の炬燵余生ははみ出され

帰省客送ってわびしひとり酒

伝統の芸をむしばむ視聴率

責任をひとりで負えば下り坂

猪よ不況のボタン受けるまじ

廿日市 林野甦光

道聞くと杖が夕日を照り返す
繰上げ当選なんと寂しい微笑なる
寄付額の僕より下がいて安堵
橋脚に金が絡んで橋がゆれ
ドブ掃除すると友達来て笑う

鳥取県 大角幸代

花をもらうと女はうつくしく笑つ
逢いたいと書いた女の一途さよ
白いページのままで残してある日記
手さぐりでやつと沖まで出たという
垣を低くするとやさしさ見えてくる

出雲市 尼れいじ

少しでも英語話せてまだ嫁けず
猪突猛進 妻の手綱がつかれてる
一筋の光下さったのはマリア
お人よらしい野良猫飼っている
実を一つつけてミカンの木が語る

出雲市 板垣夢酔

ああ春だ春だと騒ぐ雀たち
燃えるだけ燃えて満足花枯れる
真実の話を笑い涙わき
うどん好きなどとお金の無い辛さ
愚かでも食わねばならず汗流す

香川県 山地マツエ

酌ぎに来る女的笑顔に身がまえる
新しい年へ余生の夢つなぐ
孫が来る私の席がまたずれる
三世代ただ今快調同居中
なじまねば私が群からはずされる

高知市 北川竹萌

屠蘇気分息に夢誘う年賀書く
我も人 八十三を偲ぶ浮き沈み
大寒も故郷楽しい自家菜園
正午寄る番茶が温い陽が温い
自分史を編みきて五年書く結び

仙台市 川村映輝

豊作の余慶米櫃満ちている
吉良さんが今年も何処かで討たれてる
減税の枠外にいる年金者
そんな馬鹿なあなた社党でなかったか
戦争がビジネスのような国がある

弘前市 岡本花匠

風の子も甘えて母の背で内証
風花に失意の底を見透かされ
どか雪に藁沓きしむ雪おんな
夫婦靴軋む寒夜の雪まつり
団欒の食卓美味い手巻き寿し

雪吊りの傘しつとりと兼六園

大阪市 津守柳伸

紅梅の下甘酒が引き止める

初恋のスタモンダは親が折れ

一年をためてハワイの三ヶ日

大阪市 町田達子

饒舌の一群はたちの娘らがゆく

巡り会い互いに齢を笑いあい

スカイビル孤独の影が聳え立つ

世界遺産ライトアップの平等院

大阪市 板東倫子

佳子さまと言う姫さまに初春なごむ

一にぎりの情炎残る胸の奥

難解の大江文学へ体当り

長生きの秘訣は稚氣と好奇心

大阪市 寺井東雲

病氣した医者態度がやさしなり

同窓会自分の歳もよくわかり

温泉へ三猿疲れいやしる

眉剃って立派な山を描いている

大阪市 北勝美

健康訓一句一句が突きささる

戒律の門の中にも般若湯

霧囲氣に初めて聞いた祖父の喉

句が絆今年も嬉し年賀状

三ヶ日空気清浄音静か

お目出度いから瓜坊へお年玉

一里塚越えても美人年とらず

除夜の鐘鳴って去年が消えてゆく

大阪市 榎本露児

雀卓をかこむと友は饒舌に

ジバングの謎キリストの墓がある

豆腐屋のお二人さんも老いました

寅さんがいない柴又門前町

大阪市 藤田頂留子

春よこい口ずさませる雛あられ

祭礼日しか参らない信心家

上手の手から悪事がもれてゆくドラマ

まっすぐな母の日記が道しるべ

大阪市 渡部さと美

あわてるな幸せゆつくり来ると知り

冬苺いちこの使命赤き増す

スーパード逢うと男の背が丸い

細い脚 細くし美人風と過ぎ

堺市 楊井二南

客筋を誇るホテルのたたずまい

弱腰がてきめんに出る言葉尻

素人芸マイクに念を押したがる

福笹はお構いなしに頬撫でる

地球病む回復剤は無きものか

堺市 黒田 真砂

屠蘇をつぐ娘も正月の顔をして
鍋煮えて二人はわびし娘に電話
春待たで逝きし従兄弟の七七忌

堺市 近藤 豊子

受験生の絵馬を読んてる受験生

帰り道 振袖姿のやや哀れ

枯葉散ってあの樹この樹の似た姿

ぱったりと見せぬ顔ありクラス会

豊中市 井上 直次

叱られたとおりに叱るお兄ちゃん

制服を脱げば融通無礙の人

シーソーの宙に浮いてるいつも僕

人生の午後のシナリオ海がある

豊中市 吉田 あずき

七草の粥に静かな意志がある

薔薇咲いて私の話色褪せる

発想の転換想う波一つ

ひしがれて後ろ姿が多くなる

豊中市 滝 北博史

マージャンで男の器量計るママ

仲人を十三組もして別居

替り目に雨が降ります風が吹く

戦争はしませんでした五十年

初夢と書いてる孫の夢はなに

困った時のお祈りだけでは許されぬ

樂しみがストレスになる稽古事

立ち話 抱かれた犬もきいている

池田市 金崎 峰子

生きたとは難しくて素晴らしい

菅公の心の奥が知れる梅

みな捨てて仕事に自己をああ男

風の音もしや君の足音か

吹田市 古川 喜美子

窓際に見晴らしの良い椅子がある

ふとこでぬくめてみたい靴がある

電話ボックス私も楽しい日があった

玉の輿 好きで乗ってるわけじゃない

吹田市 茂見 よ志子

年男コンペ古希越す亥も出掛け

蟹づくし胃の腑を満たし草臥れる

不協和音またも奏でるのは人間

病状の電話へそり喪の仕度

茨木市 藤井 正雄

祖父の午後ひとり将棋の独り言

ホームランお替り増える立吞屋

老夫婦窓辺に似合う福寿草

おでん食う湯気の合間の品定め

東大阪市 森 下 愛 論

酌ぐ真似へ飲む真似をして飲めぬ奴
老いてなお春夏秋冬飲み分けて
落魄の村に埋もれて木偶となる
欠け仏頭上の柿も村境

東大阪市 崎 山 美 子

無理承知 意地と見栄とを押し通す
お別れの握手の温み忘れず
しっかり者にバブルの影がつきまとう
うっかりの言い訳 手頃なものが無い

東大阪市 指 宿 千 枝 子

干し大根ふるさとの味母の味
門限を案ずる母と叱る父
大声で話せば楽に屹度なる
適塾跡石落咲いて静かなり

守口市 結 城 君 子

三面鏡 一面ずつに違う性
ひと目みて重いと思ふ北の雪
笑われぬ道を守った影淋し
我が家には夫婦の風の道があり

交野市 福 崎 し げ お

初日の出 間近に拝む旅の空
筋通す癖あり悲し敵役
空想を写すか妻の姫鏡
無神論あなた悩みは無いですか

羽曳野市 榎 本 吐 来

春うらら先読めてきた夫婦舟
娘が一人居たらと想う夢の夢
えべっさんの群れをたのしむ無神論
まだちよっぴり男が残る宵の靴

藤井寺市 中 島 志 洋

露天風呂日本はやはり長寿国
酒癖を知らず勧めた花の宴
会議室出ると無口がよく喋り
どうにでも取れる美人の薄笑い

岸和田市 芳 地 狸 村

山門のわらじ仁王のものらしい (長寿寺)
奥さんがたのしく聞かす寺由来 (常楽寺)
セールスをうまくかわした大阪弁
あの顔はやはり何かを知っている

岸和田市 田 中 文 時

子等巢立ち薄味工夫してる妻
粗大ゴミ孫にとつては好々爺
囑託と言う名称で汗まみれ
恍惚の人の長寿を哀れがり

八尾市 吉 村 一 風

ぱつと咲きばらり花びら根に還る
凍りつく心を溶かす母の唄
書初めに弾むいのちを滲ませる
雨音をあてにのんびり爛の酒

和泉市 西岡洛醉

二人居の妻の無口が気にかかり
影法師 不足無い日を従いて来る
寒々と霜踏む職に甘んじる
前進の一步に大地温かし

大阪府 八十田洞庵

駅の地図他社の線へはそっけない
路地に住む人情 都計消しにくる
横文字の表札バラの花が見え
疑似餌などボクは大学出ています

大阪府 粳山隆

生み落ちる祖国自分で選べない
本丸に安らぐ父が母が居て
キャンセルへ六法めくる台所
雲ひとつ疑惑の影を深くする

京都市 山海友熙

老梅の白さが薫る回り道
信じてる人に優しい目を送る
写真館前に立ちすくむ孫がある
無条件降伏孫にほだされる

京都市 稲葉冬葉

幸せになりたい嫁と住むお家
泥舟に乗ったつもり遊覧船
みもふたもない話をなつかしい日々
狂う前にと認めてある白書

宝塚市 丸山よし津

定位置に手擦れの辞書のある安堵
津軽三味 雪をバックに火花散る
消去法 最後に残るのもみじめ
七十の坂で構える事はない

宝塚市 吉田笑女

お年玉皆預金して子はせびり
死んだ娘の年をかぞえる雛祭り
喧嘩して泣いて帰れば叱られる
仏前に供え味わう小豆粥

西宮市 秋元てる

気にすまい蛙は何時も低姿勢
年下を見れば即席教育者
墨の冴え賀状の恩師お健やか
白黒を言わさぬものに老いを見る

伊丹市 山崎君子

破れ風 星になりたいひとり言
里帰り蛙で待つてた小さい花
送られて送って帰る花のみち
冬の蝶遠くへ行けぬいとおしさ

芦屋市 黒田能子

壁に耳 私は何もしゃべらない
息いっぱい私の風船舞い上がる
片仮名に変えて杜運を賭けている
叱られて月に涙を拭いている

加古川市 吐田公一

大和郡山市 坊農柳弘

解禁に酒が体を駆けめぐる
酒ありてこそ正月の三ヶ日

時々は夫婦ではない茶飲み友
人間なら卒寿を過ぎたうちの猫

姫路市 中塚遊峰

亡き母へせて伝えて今の幸
留守仕事 小唄のテープ整理する

遠い日のロマン秘めてるベレー帽
衣食住足りて余生の空しすぎ

奈良市 宮口笛生

道広くなれば車が増えただけ
正月が過ぎて雑用山積みに

家増えて昔の人情枯れてくる
病院へ毎日通うて来る元氣

奈良市 天正千梢

変化がこわいチャレンジに躊躇する
一期一会キザな言葉を使います

結局は利用されているんだよ
大旦 色即是空亡夫のかげ

奈良市 米田恭昌

屠蘇をのむ孫の手つきが亡父に似て
お餅焼く匂やさしいお元日

身勝手な酒 百薬の長とかや
子を抱いた娘すっかり母の顔

パレットの緑のびのび春はそこ
妻の座と一緒に生きた姫鏡台
木立から覗く朝陽も春気配
筋書は己で決める蝸牛

奈良県 長谷川 春蘭

気兼ね無き余生のひと日落葉焚く
誰彼に似て羅漢像底冷えす

冬に入る心その気にならざるに
枯木晴れば無くなりし手も足も

奈良県 田中 紀美代

ドーピングしながら女の道歩む
天才の孫泣く時を心得る

陽だまりの庭 潮の香の荷をほどく
いのししに似た人がいた祝賀会

和歌山市 宮口 克子

人間よりになげんくさくいきたいな
あの恋もセンチライン越えていた

僕たちはそんな時代を生きてきた
セーフティー ドライバーなら娘をまかす

和歌山市 田中 輝子

白砂糖まぎまぎとみて美しい
同じもの食べてしばらく仲違い

冬ざれの畠に父いて母がいて
それからはバラの棘にもときめいて

和歌山市 福井桂香

平成の七とせ巡り芹なすな

一筆箋春の絵柄は欲しいまま

思案顔してシクラメン立ち上がり

羨望の眼 赤あお黄とひかる

和歌山市 青枝鉄治

水に惚れ情けに惚れた左遷の地

まだ見ぬが心の通う友がいる

自販機のかわいた音に馴らされる

蛸の足一本で足る屋台酒

和歌山市 池永正雄

山里はまだニッポンを残してる

何気ないメモの数字のミステリー

スニーカー履いてハタチになってみる

看板がゴミより多い観光地

和歌山市 山田高夫

花も実も終って黙す冬木立

こだわりを捨てると水が澄んでくる

出なかった言葉を吞んで偽証する

ハードルが越せず敗者のままでいる

和歌山市 堀畑靖子

お番茶の味に馴染んできた夫婦

人の世のせわじさしんと除夜の鐘

なりわいの道具も浄めお正月

標的がかすむひたひた迫る老い

和歌山市 岩本美智子

小豆粥 病夫の厄を払う新春

水かけ不動 湯浴みさせたい寒参り

暖冬に毛皮の好きな女がいる

寒木瓜の朱くちづけしたき人がある

海南省 三宅保州

父さんの得意な芸は無言劇

時刻表と僕の時計が折り合わぬ

健康法を教えてくれと言う主治医

勘のよい女 易者を困らせる

和歌山市 北山好笑

地球儀を回し息子の旅を追う

春のいろで一途な愛を染めようか

鈴を振るいやなムードを消すために

何かある無口が急にしゃべり出す

岡山市 井上柳五郎

書初めは欠いだ賀状へ返す筆

思い出せない顔もある賀状来る

癒すため断酒禁煙著効なし

年金にぜいたく敵の暮らし向き

倉敷市 田辺灸六

平凡に過す余生が有難い

路地裏の花に心を洗われる

懺悔しても元の白さに戻れない

軸足が決まらないので勝てません

倉敷市 井上富子

雪景色また発見のある自然

消費者にうれしいチラシ ペダル踏む

雨の日は僕を耕す古机

穏やかな風を着てくる無二の友

笠岡市 松本忠三

年の暮れ何か忘れたことがある

正月になっても歳はそのまんま

猪が持ちあげられておめでとう

職業に貴賤がなくて鋏を持ち

岡山県 江口有一朗

いじめられる子は真実を話さない

家族にも告げずいじめに死の旅路

いじめられてる子の発信が見過ごされ

学校も平和の場所と言えぬ世に

岡山県 二宗吟平

朗詠が流れ詠誦また唱和

お目出度う手を上げただけ焚火の輪

お賽銭 背越しも神は御存じだ

いける口と知る御神酒を注ぎこぼし

岡山県 岩道博友

無視されず今年も届いた亥の年賀

福袋笑い話も詰めてある

前略とあるが主題がすぐ見えす

新薬で今年も心の縄を縛う

広島市 森田文

神からの贈りものだねこの平和

新年の庭千両も万両も

箸置きも猪という気の配り

一本の釘の甘さを悔いて冬

呉市 槇田英詩

若い頃聖書 今はお経あげてます

長男に生まれ小つちやい爺になり

子守り唄 俺が歌うと眠らない

年金から三パーセントほど酒代に

竹原市 古谷節夫

タテの線まっすぐ引けぬ日が続く

旅立ちを天気予報が味方する

ぼたん雪山頭火の句読んでいる

大根の白さふと裸婦を想い

竹原市 岩本笑子

年男 夫の虫歯がうずき出す

幸福ごっここの裏に貧血不眠症

終列車送ると寒さ倍になり

山火事の焼土へ雪のおしみなく

柳井市 弘津柳慶

おしゃべりと無口どちらも可愛い孫

屠蘇機嫌いいちゃんの財布ゆるみだす

お屠蘇の甘さへ孫がもう一杯

孫がもう就職という祖父八十歳

(前月分)

鳥取市

前田 一枝

過疎守る村長さんも若返り

炊飯器ブレード米の唄忘れ

カラクリのわからぬ劇で面白い

金メダルもらった足も医者通い

鳥取市

前田 一枝

正面で見ずに横から見てほしい

ブレーキのかけ過ぎ幸を取逃がす

ほのぼのと何はなくとも差しむかい

温い愛 短い文字の蔭にある

鳥取市

西原 艶子

子ふたりと夢膨らますお正月

今年こそ小犬拾って部下にする

一冬に幾度も蟹が食べられず

何はなくても老母と握手して帰り

鳥取市

西村 黙光

冷蔵庫と別居している仮住居

古希迎え一際映える初日の出

食べて寝る原始時代の素晴らしさ

釣り糸を湖面に垂れて寒の行

鳥取市

小谷 美ツ千

惜命や正しようなし愛の位置

すぐ熱くなるので壺の蓋をする

風が動いてや々と大笑いが出来る

菜の花菜の花もうあの頃に戻れない

倉吉市

淡路 ゆり子

一城のあるじと思うわび住い

灯台の光も細る老母の役

笑顔には風もやさしくなでて行く

階段のきしむお城のあるじです

倉吉市

野口 節子

ときめきがあつて華麗な絵がかける

ストーリー変える覚悟の髪を切る

母さんが笑って春の陽がのぞく

渡ったらあつちの水もにがかった

林 瑞枝

まあいい笑顔で胡桃の殻を割る

深海魚と政治家いつか深い仲

何とも言えぬ顔少年のホームラン

単細胞でうっかり毒に染まりそう

米子市

金上 夕子

まろやかなところで見ればいい人だ

真直ぐに走る気持はあるのだが

無表情の店にわたしも無表情

酒焼けの大きな声の鬼と住む

米子市

青戸 田鶴

どこまでの旅かと思う初春の道

ほどほどの倅せになれ藪椿

今日の事思い出せないまま眠る

神の手の中の定めに逆らえず

米子市 石垣花子

大胆な色も着こなし傘寿とや
グループにタクト振りたいのがふたり
毒づけばおさまる虫が腹にいる
千切れ雲ひとりぐらしの眠りぐせ

米子市 政岡日枝子

女好きだから地獄でしようきつと
雪隠 約束ごとはみな輪廻
風花ふうわり裏切りに逢う橋で
刺ぬけばバラから失せる自尊心

米子市 白根ふみ

弱い陽をあつめて冬木萌えはじめ
枯れ葎とぎれとぎれに信じあう
躓きながらおんなの部屋に冬ざくら
芒野でときめき枯野原でこけ

米子市 木村富美子

好きなのに影が反対して困る
振り返る時は聞える亡父の声
道づれのお方の名前浮かばない
世渡りの打つ手打つ手が読み取られ

米子市 茂理高代

ふところの深さを教え母は逝く
辛いかと波が私に問いかける
恋人を連れて帰った子の背丈
世も歌もテンポが早く疲れます

米子市 中井ゆき

技芸天妖しいみ手にある慕情
寒星座きずなの深さしみじみと
寒星座みんな昇天して終う
温泉にゆく約束を友とする

米子市 光井玲子

古希を越え誓い新たに鈴を振る
娘の家で正月中はおさんどん
デイズニールランド子供にかえる老い二人
ベイブリッチタ焼けの富士に手を合わす

鳥取県 大角正道

からっぱな私が屋根に立っている
透明の傘さす雨を楽しんで
亡父が残した美しい骨がある
私の笑顔が偏差値を上げる

鳥取県 西浦小鹿

花屋の花がいつも笑顔と限らない
一滴の水に始まる大河ドラマ
春の虹 心と心つないでる
外国で国旗の赤が頼もしい

鳥取県 乾隆風

蟹しゃぶる餓鬼の形をせぬように
後継がぬ孫によちよち米送る
力こぶ見せて湯舟に孫を抱く
半分はわたしのために法事する

鳥取県 羽津川 公 乃

粗衣粗食ここに笑顔絶やさない
キューピッドの結んだ糸を撚り直す
四季のないスーパールの餅平和だな
守れない抱負やたらと目に止まる

鳥取県 さえき や え

水仙に案内されての墓参り
子がかえるまでぼけられぬ土いじり
うちもなりもそのおとなりも二人きり
たおれそな冬のかかしの杖となる

鳥取県 上 田 俊 路

OB会古い序列がまだ生きる
宿敵と時に手を組む永田町
転ぶたび妥協が一つずつ増える
形見分け親の生きざまだけ貰う

鳥取県 西 川 和 子

逢う度に力が弱くなつて行く
成長期 不可能などは考えぬ
可能性信じて種をまいている
リサイクル余生を編んで行く毛糸

鳥取県 谷 口 次 男

あれからは胸の時計は動かない
明日のこと雲とじつくり考える
人件費切り詰め策は怖いです
坊ちゃんのような教師を待つ生徒

鳥取県 幸 家 単 車

倦怠期静かに闘志炎えている
伸縮自在 親子の絆切れません
新婚の巣箱で笑い声弾む
リハビリで傾く体立て直す

鳥取県 乾 喜 与 志

大江文学読んではみたいなと思う
この脚で越したいものだ卒寿坂
出番減つても淡々と生きている
老いの部屋に気を入れ換える新夫婦

鳥取県 津 村 八 重 子

故郷が心に帰る七草よ
本と言う無二の親友もつ私
真空の心に清い朝がくる
かるた読むやさしい顔に一目ぼれ

出雲市 坂 垣 草 丘

立寄れば散歩にならぬ家がある
娘に弁当 失恋ぐらいで休むなと
落ちそうなタイルで長湯しています
春はまだたくらみごとに火がつかぬ

出雲市 園 山 多 賀 子

春さざし憶いは深し亡母と娘に
短詩型川柳のよな手紙書く
父逝きて眉落す母今にして
夢に出て背を押してくれありがと

出雲市 伊藤 寿美

妻の挺子老いたる貨車が動き出す
一本の蘂を探している挫折

叩いたら落ちてしまった虹の橋
寺継かぬ息子に遺る父の袈裟

出雲市 富田 蘭水

はりかえた障子のすかし亡母をみる
あえいでる残菊の雪落としてやる

牛鍋が吐わる秘話をしかと聞く
読書会文学めぐり若返る

出雲市 石倉 芙佐子

横揺れにも耐えて此処まで来た命
竹の子が煮詰まる中に考える

ごんぼうを食べず嫌いで六十路過ぎ
鬼ごっこするには淋しい冬の森

島根県 西村 早苗

すばらしい空想 雲の菩薩顔
そんな気がして黒いお花を買って来た

みぞれ雨ポトポトしずくも春となる
三月の吐息 頬杖する癖で

島根県 堀江 正朗

出精を誘ってくれた友の声
点字では書けぬ心の裏おもて
酒すこし減った減ったと妻案じ
我を張って悔いだけ残る日の枕

島根県 石飛 水煙

交流は戦時の飢えの絆から
散歩道不幸の似たる車椅子
幸せが続き不気味さ考える
曖昧なように要点締める父

島根県 佐々木 鳳笙

投げ返す球に付箋をつけておく

執拗に男波が寄せる桜貝
この辺で汽笛と煙欲しい旅

私から握手求めた仲直り

香川県 木村 あきら

幾山河越えて傘寿の足確か
嘘八百大風呂敷が街を行く(統一地方選挙)

人生はテトラポットで終りそう
瀬戸の浜 金波銀波が寄せて春

香川県 工藤 吟笑

水増しが度重なると堤切れ
八十でミクジ女難がありと言う

幾星霜人を育てた故郷の山
倅せな話川柳句碑が建ち(十一月二十日)

香川県 成重 放任

賽銭の顔見て神は心決め
無理しても明日まで残さぬ旨いもの
初孫が一人家庭を掻きまぜる
流し目の酔うたふりして時を待つ

香川県

新川 マサエ

共白髪 地味な着物が馴染みだす

忌明すみ何かときめく空の彩

句碑が建ち夢のようだと言う便り

遅咲きの花にもあった明日の宴

西条市

片上 明水

汐臭い風が半分混じる街

入院で一つ覚えたお茶の味

用があるように野良犬路地へ折れ

干柿が軒で僅かになつて春

今治市

野村 京子

女人高野 棘はきつぱり抜いている

追伸で母が激しく問いかける

ピカピカの靴が教える氏素性

金平糖もたせいい子にされている

高知県

赤川 菊野

福寿草凜と咲かせて春を待つ

色即是空だんだん亡夫に近くなり

紫のつつも似合う亡母でした

夢に出る顔はいつもの同じ顔

札幌市

瀬尾 六郎太

下り坂フンドシ締めよ日本国

プレゼント交換歓喜クリスマス

雪よけにロボットお目見え欲しいもの

大中小CT輪切り縞模様

砂川市

大橋 政良

内申書入れて選別機が回る

何も言えないところに祭り上げられる

以下余白 落書ばかり書いている

大声を出す空があり救われる

弘前市

蒔苗 果林

勝手して互いに思いやる家族

かわらない日々に仕合せ見え隠れ

孫曾孫十人亥年ことほぎぬ

人花 木いろいろそしてみんな春

弘前市

佐治 千加子

一心放下 湖に降る雪の量

雪しきり許されている軽い嘘

瞑想の猫と並んで冬日ざし

出遅れた言葉ひとつを期待する

十和田市

小笠原 敏人

激震が人間の運命を変えに来る

大地震人間の心を垣間見る

安来節泥鰌知らない子の唄で

したり顔出来る分だけ先を行く

弘前市

村田 善保

地吹雪が唸る自虐の鞭として

堂暗く五百羅漢の私語を聴く

一通の封書に炎埋めてある

野仏の顔から溶ける春の雪

静岡市 安本晃授

激流に挑む八十路の土性骨
春先の陽炎妻を乗せたがる

初夢に心機一転先ず笑う
幸せの余生を渡る虹の橋

富士宮市 渥美弧秀

生き甲斐がローンに追わる子の家族

孫の弾くピアノに富士も暖かく

二病息災 不義理気になる老い二人

妻の留守ガウン着て立つ台所

静岡県 蘭田 彥

亥を画く円山応挙を真似て画く

大根葉にはっとり沁みた母の味

打てば響いた頭もだんだん薄くなり

判読で孫の手紙を読むたのし

富山市 酒井 輝

女から出す手はそつと握り締め

籤運は無いが達者な妻と居る

家柄と育ちの笑顔には勝てぬ

職退いて時計見ぬ日々ありがたや

(前月分) 七尾市 松高秀峰

透析を繰返しつつ年が明け

老夫婦 暗証番号みな忘れ

顔色も変えずにビール一気飲み

茶柱を信じ切ってる母と姉

七尾市 松高秀峰

初売りへえとの益生きる知恵
新年会別々にある共稼ぎ

生きている証拠に下手な年賀状
年賀状 友の笑顔が見えてくる

羽咋市 三宅ろ亭

あじやもじやの賀詞でも娘なら許す

二三男の賀状電文のようだなと思ひ

元旦の試筆へ主人の自画自賛

白鳥の家長ついてこいと飛ぶ

岡山市 池田半仙

僕の千支亥年の七度目を迎え

真面目すぎて孫の世渡り案じられ

田舎から土橋が消えて赤い橋

一円が百で百円馬鹿らしさ

鳥取市 岩原喬水

ぐらぐらになつてもやはり俺の歯だ

長生きの欲が耐えてる熱い炎

禁煙を誓った指が淋しがる

円高も円安もない金がない

倉吉市 野中御前

小さい虫団結すると恐くなる

松葉蟹一万円の泡をふき

期限切れの女ばかりの露天風呂

言い勝った女の舌が乾きだす

倉吉市 米田 幸子

一徹な山にもあつた泣きどころ
一粒の真珠に親の夢託す

手前味噌 少々鼻についてくる
平坦な路で時々油断する

鳥取県 黒田 くに子

聞かぬふり見ぬふり姑の名演技

どの愛も母性愛にはかなわな

手文庫の中にねむっているドラマ

いい年になれよ息子は亥の生れ

鳥取県 太田 幸枝

好きなのよ金も力も無い男が

乾杯不惜身命花の道

松ぼっくり添えて新春花活ける

幸せを拾いに赤い靴をはく

出雲市 小白金 房子

三ヶ日過ぎてわたしに新春の暇

三ヶ日酒に吞まれて寝る羅漢

初句会眠る和服に手を通す

甘酒の立ちのみ京の寺まゐり

島根県 藤原 鈴子

生きるだけ生きた証の春風

在りし日の影をしのべば暮れなすむ

春遠し彼岸の夢をたぐらんか

恋しさよ春の足音ちらと聴く

和歌山市 玉井 豊太

書き初めの会を見守る母と祖母

風向きがかわり遮断機おりた友

つま先に力が入るスタートだ

正直なような返事に当てはまり

和歌山市 玉置 当代

初日の出 終の住処で手を合わす

町民の暮らし見つめる天守閣

血圧の上がる話を聞きたがり

胸の内 君に捧げた一行詩

和歌山市 細川 稚代

今しかない自信が海を翔けてゆく(野茂選手)

毬抱いて自問自答を繰返す

むなしさがしみじみ残る茶番劇

初めての街でジングルベルを聞く

和歌山市 田中 みね

好きだからその裏切りが許せない

折りに触れあなたを想うことしきり

このままではいかんいかんと思う事

誰よりも勝った負けたの淋しいね

和歌山市 榎原 公子

春の絵を描いて冬芽の夢うつつ

豊かさの上限こんなものですか

お声かかるとうれしくなって飛んでいく

不発弾抱いて女が下りて来る

和歌山県 西口忠雄

あんなってそんなことまで気にすんの
わたくしのくちづけポストに入れたまま
社会面もつといいことおまへんか
あつさりと退いてあつさり暮してる

和歌山県 小倉アサ

発つ鳥も僕にも同じ空がある
午後三時 妻には喋る客があり
振り向くと妙にかすれる女文字
ふれ合いをもたらず風に蘇生する

西宮市 山本義子

新年にせめても貼った紙障子
正月の賑わいさけて神詣り
霜柱たつ野で鹿の悲しい目
武庫川駅 野鳥眺める待ちタイム

宝塚市 小倉藍

春風が初心のページ開かせる
母一人 嫁いった子の雛飾る
歌劇見た夜の星空よきらめきぬ
お番茶で三面記事の拾い読み

大阪市 松尾柳右子

安らぎをしばし与えて理容椅子
慶弔を聞きつつ髪を刈る六十路
三世代 顔見る客の有難し
名も知らぬお客の家庭手に取れて

大阪市 小糸昭子

何時のまに冬タンポポが顔を出す
風の日猫もあくびをして平和
山寺の五百羅漢や釈迦の声
髪染めて自分にかけ声かけている

堺市 柿花紀美女

生きがいの違う物差しみんな持ち
正月だからみんな幸せそうに見せ
今川焼横目に通りダイエツト
謙遜の陰に自慢が見え隠れ

堺市 一瀬福一

消えかけた慕情の疼くめぐり逢い
ウインクに応える財布軽すぎる
スタートに亀も兎もいる入社
下手な嘘だまって妻が聞く怖さ

豊中市 江口明光

使っても減らないお金くれと言う
筋道を通せば冷たい人にされ
身上をつぶす酒ぐせ女ぐせ
当然な顔で晩酌欠かさない

豊中市 三宅つえ子

独り身は濠を伝って年忘れ
初荒神 女の欲望ひしひしと
故郷で見たのは月と夜の海
沈む陽を追いかけている車椅子

箕面市 椎江清芳

水替えて金魚としばし対話する

土臭い手で農協に預金する

寄せ書きの署名は太い文字で書く

カルテ書く名医誤診の文字がない

池田市 岡本吉太郎

フルムーン家に帰りてお疲れ様

婿殿に初めてもらったお年玉

価格破壊 万札少し重み増し

正論と思ひこませる偉い人

東大阪市 安永暁子

今さらに太い柱を偲ぶる(娘婿を偲ぶ二句)

手を繋ぎ前に進めと天の声

思春期の孫にゆれをキヤツチする

癒されて一輪光る白椿

岸和田市 三輪通彦

無意識に親の真似する子の動作

挫折する度に励ましくれる妻

卒業に就職先の無い悩み

鏡にならず子を連れ離婚する

貝塚市 行天千代

親思うほど子供にはつたわらず

四つ角で風は北から東から

夜更けて雨らしい音車行く

路郎師も亡夫もいます雲の峰

豊中市 小林一夫

手術の妻へ気づけば我に信仰もなし

袋に溜まる妻の尿を見ている正月

妻の尻拭く平成七年一月五日

付添ベッドでトンカツ弁当食べけるよ

八尾市 高杉千歩

一円を余分に貼れぬ几帳面

あいこではいグウばかり出す春の風邪

おおさか弁で住吉さん天神さん

春宵一刻ワープロと勝負する

奈良県 中原比呂志

語り部になろう三月大空襲

掘れば出る金塊ならぬ不発弾

誘わねば不機嫌 誘うと生返事

買わずとも読める中身の車内吊り

鳥取県 林露杖

凜然と白の気高き寒牡丹

芹粥のみどりにいのちあらたまる

起き抜けの足 爪先に老いあらわ

どうしても消えない悔いが一つある

高知県 小澤幸泉

義父逝きて故里とおい新春の空(二回忌)

雑然と生きて跡なくふりかえり

カレンダーにいのちを刻むかすれ文字

定年の橋のたもとにたどりつき

柳緑花紅

橘 高 薫 風

来年へ流れる水を見てゐたり 塊 人

堀口塊人先生の句碑が昨秋阿部野神社境内に建立になった。水脈を思わせる縞紋のある青石は香り高いたたずまいを備えている。

この句を見つめていて私が思い出したのは、一番には洒脱な東雲節である。

へなにをくよくよ川端柳

こがるのナントシヨ

水の流れを見てくらす東雲の

ストライキ さりとはつらいね

テナコトおっしゃいましたかね

次には吉川英治の『三国志』の冒頭の光景で、劉備玄德が黄河の畔で老母に喫ませる茶を求めるため洛陽船を待つところだ。

悠久の水は行く――

微風は爽やかに髪をなでる

涼秋の八月だ。

とある。膨大な激動の歴史小説の幕開けがこのようなくさな序曲から始まっている。三番目は赤穂浪士の吉良邸討入の前日、大

高源寺（子葉）が榎本其角と両国橋の上で交わした句の遣り取りである。

年の瀬や水の流れと人の身は

（其角）

あした待たるその宝船

（子葉）

そしてまた私たちは、すぐそこに来る来世紀へと流れる水を見つめるわけで、甚だ時宜を得た句であると感じ入った。

塊人先生は、しばしば出先からハガキを下

さった。矢立を持つていらしたのだらう、いつも川柳数句を墨書した句便りであった。手

元にある一枚を見ると日付けは一九八〇年、

「三月二十八日食満南北の顕彰式へ出席後、

祇園へ出る」の添え書がある。

上方の文化は女将の生活史

西鶴に殺すつもりはないけれども

近松としては生かしてやりたいが

箱梯子上つて下りて子を育て

花代が勝手に踊る好景氣

白川は辰巳へ流れ名が変り

梅は咲いたがお上りさんはまだかいな

このようにその日のご自身の見聞、行動や

社会のさまざまなニュースを、句日記風に記

録したノートが、昭和初期から戦後までも続

いて残存されているらしい。実に貴重な「昭

和の句曼陀羅」と言うことが出来、私は一度

拝見したいものと思っている。

作品鑑賞

太陽も月も映せる水たまり 新 正子

柳多留に「男ならすぐに汲うに水か、み」というのがある。それに比べてこの句はミク

ロの世界からマクロコスモスを眺めていて現

代的な視野を持つている。時代というものを

感じさせてくれる。

バス動くガイド セリフを思い出す

仁部 四郎

観光バスの発進とともにガイドが説明を始

める。ガイドには職業柄それが習性になって

しまっているのだ。それはまるでテープレコ

ーダーをオンに入れるのと同じように、人間

が機械化された錯覚さえ感じさせもする。こ

れが作句手腕である。

孫二十 坂本冬美型美人 桜井 千秀

私は迂闊にも坂本冬美を知らない。確かめ

ると演歌の歌手のようだ。成人したお孫さん

が美形であることは何より。漢字ばかりの句

であることに気付いたが、作者は意識されず

に作句されたか、とても自然である。

遠耳のふたりになって珍ブレイ

吉岡きみえ

珍ブレイという流行語が巧みにこなされて

いて私どもの世代には身に沁みる句である。

今月は軽みの句を揃えて鑑賞を試みた。

自選集

有働芳仙

猪突猛進 時にはいいさ僕も猪の年

人が来る気配へ急ぎ手を離し

敵に回ると恐いから負けておく

扇子をひらくと顔がうかんでくる香り

なみなみとお酌ぎなさいと腹を決め

八木千代

寒椿 さてこれからの話など

わたくしの鍵は椿の葉隠れに

野末もおぼろ 夢の椿を敷きつめて

椿守 死なぬかぎりは椿守

微笑仏になった椿を知っている

久家代仕男

春や春 土間吹き抜ける風やわし

政界に不惜身命欲しいいま

一病を得てから泪もろくなる

ゆくゆくは郷里で死ぬ気の墓地を買う

散弾の怖さ山鳩語り合い

藤井明朗

風あげに空から春の風が鳴る

女性も酔うて僕も酔い盃のキス

犯罪の悪質 道徳忘れたか

戦後五十年 再教育も未だならず

社会悪の多し義憤おさまらず

大矢十郎

貰うものもらえば用のない年始

頑張るといふ政治屋へ飽きが来る

人の為と書いて偽りとは悲し

落選の背中よ優しく生きようよ

音たててかき込む味の海苔茶漬

野村太茂津

先祖から伝わる十手磨き上げ

十手磨けばそのうち気分楽になる

しばらくは黙視している日の自制

口癖の落葉帰根帰国孤児

木登りもできぬ野性を叩き込む

黒川 紫香

わけへだてしない古老の笑みがよし
お祝いが重なる春の匂とや
冷たい手ですがと握手拒まない
ばあさんに聞けとじいさん素っ気無い
鯉泳ぐ川あり文化都市という

野田 素身郎

テレビ故障 退屈しのぎに食いまくり
孫が来て障子無残な姿なり
歯の治療終わらぬままにお正月
この方も僕より若い死亡記事
年金暮らしになり遠のいたネオン街

藤村 女

ふるさとの山に悟りを聞きに来る
信仰にスランブがあり道まよう
お祈りが済んだ顔柔らかい
物を忘れ神を忘れて柔らかし
手ぶらで来てボトル一本空けて去に

小西 雄々

フルムーン老いたピエロもムード好き
キッチンであなたの夢も盛るサラダ
二十一世紀へもたす命へ餅を掲ぐ
希望だけ大きく持って貧に耐え
無人駅でも時計は止ったことがない

辻 白溪子

ぬれぎぬが晴れ散髪をして帰る
枝ぶりを曲げて気に入る鉢にする
じり貧になって野心を諦める
先生が言うたと主張 子が曲げず
この辺で話打ちり妥協する

奥谷 弘朗

金回り良いと体調までが良い
四畳半 抹茶のうまい老夫婦
打吹の城を再現させる夢
散歩して町の人情知らされる
ダイヤ婚祝い死にたい欲がある

小林 由多香

毛糸屋も春待つ色ではしゃぎだす
蟹食べて雪の砂丘へ会いにゆく
孫という強い味方に囲まれる
一円を拾う小さな勇気出す
乗りもせぬ車の免許切り替える

児島 与呂志

流水の港が春に耐えていた
お手頃の値うち知ってた母の紐
味加減 夫の心をつかんどり
たまさかに根来で摘んだ春野菊
ささやかな小川のおたまに足が無い

工藤甲吉

ウーロン茶 屠蘇の真似だけして終わる
元日も戦っている国がある

冬至の南瓜まだ長生きをするつもり
よろめいてすかさず齢のせいにされ
つまらなく独り歩きをして帰り

正本水客

控え目な人のうしろに付いてゆく

階段を上り下りして嬉しい日

お墓参りがしたいと自分に言うてみる

ウェディングドレスが似合う梅匂う(孫娘結婚)

ゼロからの出発ふたり潔し

恒松町紅

直線が引けて自信が湧いてくる

張り替えた障子を破る古い二人

髭剃りを一日 手抜きする寒さ

撫子の頃はよかったピアスの手

筆はまだ老いを感じぬ雅号印

波多野五楽庵

噂から噂を呼んだ立ちくらみ

余命表 今年も義理を欠きそう

津軽孤独 雪に恨みはないけれど

今日でない昨日でもない暦剥ぐ

あきらめて六道輪廻をめぐらんか

金井文秋

万歩計 百まで生きるかも知れぬ
老斑の話を私の子らがする

事を構えるつもりはないが売り言葉

読みやすいからワープロもいいですよ

嫁に負けられぬ呆けたりするものか

遠山可住

沸点にこだわりがある出し昆布

悪少し混ぜるとうまい味が出る

猫の恋 団地じわじわ腹を立て

コーヒータイムあした合鍵渡します

笑いたくて笑えなかった父の髭

松川杜的

賽銭に2951と言う小切手が

妻がFA宣言したらどうしよう

古希の妻 机がほしいと言い出した

元日の日記 遺言書き添える

もう嫌だどのチャンネルも同じ顔

月原宵明

よく眠りよく食べ極楽見えてくる

少年にカズ イチローは夢をくれ

負けている監督ガムを噛んでいる

一升壺逆手にもてば怖いもの

五十年 昔を語る友は亡し

高杉鬼遊

虚礼ではないあたたかい年賀状
憎しみも憎まれるのも春の川
人の世や風におされて風に泣く
月光のとどかぬいのち土の中
被災地へ足向けられぬ掛布団

西田柳宏子

地震まで猪突猛進して困る
ライフライン切れて地獄の底を見る
安否問う電話五日目まだプー
運不運 生き埋め五日で助けられ
災害へ政府初動の遅いこと

小出智子

ひとつずつ年をとれたらよしとしよ
蘭の花そんなに見詰めないでほし
知恵がないから笑っているのです
逢いたいと思いつづけるだけでよし
春が近い老いを禁句にしてからは

橘高薫風

地にひそむ魔の天空へ駈け抜けし(阪神大震災)
閃光から火焰 首なき兵馬俑(南京町)
地震熄んで一輪の薔薇毅然たり
遠吠えのごとく余震の続く夜
これからも神戸に住むと卒寿の師

河内天笑

日本国中じんだんだ踏んだ初動ミス
後始末しかできないんだ自衛隊
消防のホースへ水が来てくれず
なすすべもなく類焼を見ていたり
避難所を体験すべし議員さん

川柳塔 (追加)

購読料上がり領収書小さなり
寒がり寒い地へ行く蟹食べに
電話する度 旅に出ておらず
河内長野市 植村喜代

鏡の前 黒の彩入れ逃げる歳
晩成と自負し咄嗟にでる能力
三ヶ日過ぎ休日に行く美容
岸和田市 藪野けい子

四月病窓際族乃倦怠期
五目鯔母御手造り里の味
六道の罪を戒む六地藏
唐津市 筒井朴竜

お願い 「川柳塔」「水煙抄」「渺湖抄」「茴香の花」
「一路集」「初歩教室」欄への出句は、毎月十五日ま
でに到着するよう、本社事務所へ。
(編集部)

川柳太平記

(202)

川柳の群像

川村伊知呂

東野 大八

平成六年夏の柳都大会の帰りの車中、同席の森中恵美子が座につくなり、一枚の古びた写真を取り出していわく。

「懐かしい写真を新潟のさる方から頂いたのよ。なんと戦時中の写真で、陸軍病院の白衣の軍人の川柳大会の風景。若い近江砂人先生に病院長の川村伊知呂先生もいられるわよ。」

なるほど大勢の白衣の兵隊がわんさといろ中に、白面の近江砂人と並んで、ニコニコ顔の伊知呂軍医の顔もある。懐かしい御仁だと筆者もその微笑に誘い込まれた。

戦前の若い頃、大阪のさる句会で、このエビスさんの笑顔と会っている。筆者が、中支老河口で執刀して、隻手にして貰った軍医少

佐が、なんと伊知呂軍医とウリ二つであった。懐かしい人である。

川村伊知呂（本名一郎）明治39年3月27日大阪生れ。大阪大学医学部出身の医博。京阪神急行電鉄（阪急）大阪診療所長として父君からつづいて大阪の刀圭界で活躍。堺市の金岡陸軍病院の軍医となり、番傘本社同人となる。番傘投句は昭和10年から。

戦後は番傘誌との縁で、昭和25年から同31年まで、番傘本社事務所を南区北桃谷の自宅に置き、番傘の理事長も務めた。

随想をよくし、医学関係の各雑誌にも健筆を揮い、その軽妙洒落な柳文は、番傘誌の名物であった。昭和38年6月5日死去。

昭和38年1月号の番傘は、「本社前理事長・

川村伊知呂氏逝く」の特集号である。以下は写真三葉つきの六頁にわたる悼文の抄録。

—金岡陸軍病院へ四、五回慰問に行ったのは、もちろん戦時中のことだ。

川村陸軍軍医中尉殿は、二千人からいる白衣の勇士をよく講堂に集め、講師である私（近江砂人）を正面に号令をかける。

講師先生に注目ッ。直れッ。

こうして句会が始まるのである。この号令のあとは、川柳人川村伊知呂に変身する。

その頃からのつきあいだから、もう二十何年にもなる。晩年はふつつり禁酒されていたが、ひところは随分飲んでおられた。私もまた大酒癖のあったところで、ともによく飲んだものである。伊知呂さんの額から汗がふき出して目頭を伝い、おとがいからポツリ、ポツリと落ちるのを眺めて愉快に飲み合った。

伊知呂さんは、つきあえばつきあうほど味の出でくる人だった。この人はお坊ちゃん育ちのくせに、つきあえばつきあうほど、苦勞人のような思いやりの深い、気持ちのあたかな人だった（近江砂人）。

—この人と各地への旅行によく一緒にしたものである。この人もばくも、互いに巨軀を持って余して、宿の階段を上り下りしたものだ。

宇奈月温泉などでは、川つぶちの浴室から一階の部屋まで、七十何段かの階段をえっちらおっちら、やっと部屋へたどりつけば、汗いっぱい、フンドシ一つのストリップを川風に吹かせながら、しばらくはフーフーと顔を見合せたものだった（林 一六）。

— 好い奴だったの一言につきる男。天衣無縫、善意と人一倍のさびしがり屋だった。彼との旅の思い出。どこへ行くにもジョニ黒をお供にしての旅だった。

むじな会と命名しての、九人あまりの仲間の旅で、人一倍大きい身体でありながら、いつも眼を細めて、人なつこい笑顔でいたあたかい彼も、なんと今は伊知呂でうて、俊光院真智伊知呂居士というながい名になってしまった。あ、（太田茶人）。

— 川柳人の中でも、川柳の社会進出に大い

に力を入れていた伊知呂さんだった。

だから愉快な句が多かった。

— 無沙汰の方がよろしい聴診器
よだれかけうどんのにげる面白さ
この二句は、求められると短冊によく書いたものだった。

戦後、番傘川柳社理事長を五年の間、立派につとめあげ、その役を解かれると、番傘う

めだ川柳会に全力投球した。面倒な川柳論を嫌ったが、うめだ句集だけにはフアイトを燃やし、よく面白いエッセイを書いた。酒が伊知呂さんの生命をうばったが、私はその酒によって、伊知呂さんから人生を教わったものが多かった（平井与三郎）。

— 行年五十八歳、まだまだのお齡でしたのに。臨床医としては、勝れた手腕の人だったが、川柳の方は友達甲斐にも、名作家とは申せません。しかし、健吟家ではあった。

蛸の初恋モジモジ足をかじってる
かかるときボンと出したい金がない

名句ではないがいい句です（脇田梅子）。

— ハネムーンさくらの座席狭うとり

の処女作を、長崎柳秀博士に添削して貰ってから、この人の川柳道の道はひらけた（さくらとは当時の特急大衆列車）。

笑いの多い句が、長期療養者にとつていかに大切か、これを痛切に感じた伊知呂さんの医学的良心が、ぎゅっとその川柳をにぎりきつていられたのである（吉野耕吉）。

— 先生！なせ死んだ。ベレー帽片手に。あ
あシンドと入ってくる先生のおおらかな微笑
先生のかもし出すあたたかいあのムード。一
昨年の浅間の夜の「酋長の娘」のユーモラス

な珍芸や、三朝の依山楼で、新婚旅行の思い出は二十六年ぶりだと、名産のカニの足を食べながら、つぶさに話された折の笑いの絶えなかったあの夜。人に驕らず、へつらいもせず、そばくに素直な本当の善人だった先生。

霧晴れる思い血圧下りかけ

グループの最後の忘年会の時の先生の句が
今も、血圧を気にする私にとっては懐かしい。

（安部光子）。

— 昭和29年9月の川柳まつりのこと。天満の天神さんで余興の珍カプキ。題して「番傘五人男」で、伊知呂さんが日本駄右衛門、水府さんが弁天小僧、林一六さんが赤星十三郎、平井与三郎さんが忠信利平、平野吾水さんが南郷力丸、磯野いさむさんと私が右内、左内の捕り手でからむ、面白かったな。

右は筆者の親友、青木史呂さんの話である。史呂は、伊知呂のモジリでね、と万年青年の好紳士然たる彼は、いつも故人の話になるとこれを持ち出しては「きげんだった」。

「この写真の頃は、私も昨今のかけ出しで、いい娘さんでね。伊知呂先生は雲の上の白衣の神様でした」と白衣句会の古写真をあかず眺めての恵美子の明るい顔の旅だった。

▼次号は「荻野 義博」

柳籠裏三篇研究 (二十五丁)

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人

八木敬一・七久保博・岩田秀行

紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

325 持りやうを御法の巻に書き給ひ 五帆

佐藤 持料は、携帯の道具とか、所有の用品などの意味であるが、ちよつとニュアンスは違つが「持前」の意味もあり、この句の場合は、持前とした方が適切かも知れない。源氏の御法の巻は、紫の上の死と、その葬送の模様を叙した無常観の溢るる一帖であるが、主題句は、こうした内容には格別関係ないと見た方がよいのではなからうか。つまり、源氏は紫式部が石山寺に籠つて書いたとする俗説を踏まえただけの句で、仏法のさとりを、真如の月に譬えるところから、御法の巻は、石山の月をこの一帖にとりこんだといふうがではなからうか。

八木 紫式部が石山寺に籠つて源氏物語を書いた折り、料紙を忘れたので仏前にあつた経を裏返して書いた、という俗説がある。この俗説を匂わしてはいないであらうか。「御法の巻」は源氏物語の一章であることは礎のとおりでであるが、経文を「みのりの巻」としやれたのではないか。

七久保 賛、御法の類句に、
文月の頃に御法の巻ハ出来 四一 31
一帖ハ初夜の御法を聞て書 六一 1
どく経の側て御法りの巻を書 七八 23

西原 八木氏説に賛。お経に書いたもの。
鈴木 持料はこは料紙の意か。源氏は一説に経文のうらに書いたというから、八木氏のお説が妥当か。まだすつきり落着かぬ句。難

句。

326 社をかりて書きそふな物がたり 如雀
佐藤 源氏は石山寺で書かれ、百人一首は小倉山で選ばれたというが、伊勢物語は社でも借りて書きそふな物語だ、という洒落であらう。伊勢の字から、直ちに伊勢神宮へと連想されたところに、特に伊勢信仰の盛んだつた当時の民衆の意識を知ることができようか。

327 富士までもかぶり物と御祭礼 高砂
佐藤 被りものは、帽子などのような頭にい

328 太神宮の勅らしい物語 三八 2
いせものがたりに太神宮なし 二〇 22

329 太神宮の勅らしい物語 三八 2
お宮をかりて書そふな物語 六六 13
があるが、源氏物語にしても伊勢物語でも、男女の情事を中心に書き上げたものであるから共通性がある。限定する必要はなからう。

330 鈴木 礎稿賛。これは「伊勢」であらう。
岡田 「伊勢物語」説動かず。

331 鈴木 礎稿賛。これは「伊勢」であらう。
岡田 「伊勢物語」説動かず。

ただくものの総称であるが、御祭札すなわち六月十五日の山王祭の時は、富士もかぶっていた雪も大方解けて、被りものをとって、山王さまを拝礼しているように思われるという意味であろうか。

あるいは、綿帽子を被って嫁入って来た花嫁が、その夜宴も果てて、お祭りという時には帽子を脱ぐことを踏まえて、「富士までも」と表現したのであろうか。

岩田「かぶりもの」は霞であらう。「衣被」のベールに見立てたものと思う。夏になると霞もなくなる。

ふし山をかくす斗が春のきず

一七九

西原 礎稿前半に賛。富士の雪がとける。

青木 同。かぶり物は雪の綿帽子の見立てならん。夏の富士、遠景からでは雪の白は見えない。

鈴木 礎稿の前半は動かぬ。

岡田 同。

328 ハツ橋のやふに並べる琴の会

狸声

佐藤 ハツ橋は燕子花の名産地として知られた三河ハツ橋のことか。

燕子花の生い茂った池沼に、板橋が相交叉していて、一種の雅味をただよわせていた。

従って画題として使われ、光琳には何種類かの「ハツ橋図」があり、抱一にもこのテーマの「燕子花図」がある。その橋が飛び桁に並んでいる様を、琴の会の折の琴の配置に直ちに結びつけたのは、視覚的な表現であらうが、同時に、琴の流儀「ハツ橋流」のあるところから、二重の関連をもたせた句構のようである。このように一句の構成を分析して見ると、狂句臭いということになるが、一句を読んだ感じでは差程、狂臭を感じさせないの不思議だ、というのも、視覚的に十分納得させる情景が、読む者の頭に展開するからではないかと思われる。

八木 賛。八橋。小川などに幅の狭い橋板を折れ折れに継ぎつけ架けた橋（広辞苑）。

七久保 賛。礎稿にもあるように、三河の八橋と琴のハツ橋流を利かせた句である。

鈴木・岡田 賛。

329 業平を小町へかさね嫁ハにげ

寸魚

佐藤 歌かるたの席での情景。故意に重ねたのか、読む順序がたまたま業平の歌の次に、

「花の色は」の歌がつづき、二枚とも嫁がとったため、偶然そいう結果になったのであろうか。定評のある美男美女の札を重ねたの

では、座にいたたまれなかったのも頷ける気がする。

八木 頼原氏「川柳雑俳用語考」に「だき絵」という項があり、

歌がるただき絵といつてしかられる

二三二

という句を出す。母袋氏追加に「ヨミ・メクリなどのカルタを揃へて切る時、その絵と絵とが偶々向合って重なっているのをいったものではないでしょうか。そんな下品な言葉をカルタの時に使ったから叱られたというので、春画とまで考えるには及ばないでしょう」とある。

嫁がカルタを切っているうちに、業平と小町とがたまたま「だき絵」になってしまったので、顔を赤くして逃げた、と解しています。礎稿の方が素直のようにも思います。

七久保 佐藤説の方がサラリとして上品でよい。

青木 礎稿賛。業平の好色漢ぶりと小町の穴なしをよくよく嫁は知っていたから逃げたのであろう。

鈴木 同。しかし八木氏の「だき絵」も一説よくお調べです。

岡田 同。

秀句鑑賞

同人吟 安藤寿美子

2月号から

君はどう生きたか戦後五十年

田中正坊

この稿を書きつづけている時、兵庫県南部地震（阪神大震災）がございました。平成七年一月十七日午前五時四十六分。多くの川柳人のご無事を切に祈ります。その後は集中できず、散漫なことになりました。おゆるしください。

昨年つれ合いを亡くして以来、やったこともない雑用に追い立てられ、今までの平凡な主婦の座で太平楽をならべていることができたのが、いかに幸せだったか、思い知りまします。平凡なことは、いいことだとつくづく思っています。

いつも言うことですが、私は俳人高浜虚子の言われた「平明にして余韻ある句」というのが好きです。川柳もまた然りだと思えます。私自身は平明にして凡庸なる句しかできませんが、今回は使い古した頭にもふっと暖かい息吹きを感じる事のできるような句を頂戴しました。作者の意図と異なる解釈もあると思いますが、拡大解釈とお思ってください。



これは今年の一つの課題だと思います。神戸には、その五十年が灰燼に帰した方々がいらっしゃると思います。どんなに口惜しい事でしょう。一つの人生を築き、志を得ようと得まいと社会の一員として皆、一所懸命生きて来ましたが、閻魔の序で何と評価されるかはさて置き、ふり返って見ていくつかの節目をよりよく生きたか。私などエンマ様の前で、小さくなっている方です。次の五十年は私たちはおりませんが、若い人達がよりよく生きるよう祈るばかりです。

丁寧な手紙の誤字が気にかかる

小野克枝

テレビのニュースを聞いていてもアナウンサーの言葉の言い回しが耳にさわる事があります。ことに敬語の使い方が気になります。私は最近、あちこちから寒中見舞などをよく頂きますが、喪の字にヒゲが生えている事がままあります。さすが文字を大切になさる川

柳関係の方にはごさいませんよ。

一人居は内緒がなくてつまらない

中井ゆき

先日、古いハンドバックから万札が一枚出て来ました。ヘソクリやったんかいなと思いましたが、つれ合いが亡くなった今は誰に對してへそくるのか。隠す相手がいないくては、かくれん坊に鬼がいないみたいにしまりませぬね。その代りすべての責任は、自分にかかって来ます。作者の気持に全く共感する今日のごころです。

クシャミ三つどうも風邪ではないらしい

柳楽鶴丸

ところによって違うのかもしれませんが、「一褒め、二そしり、三徳れられ」と言うのですよね。風邪なもんですかノ鶴丸さんノぬけぬけといひのかなあ。今度会ったらどやしてさし上げたいですね。

私はクシャミが二つ出たら、「わあ、誰か二人褒めてるわ」と思うことにしています。
冬の月ぐちをこぼすに冷たすぎ

松下たつみ

須崎豆秋さんの句に「お月様残念ながら負けました」というのがあります。残念やけどホッとしたと庶民は思いました。お月様は太古から人間の話し相手になってくだされまし

た。小倉百人一首にも四季の月がモチーフになつています。寒の月は鋭く、うっかりさわると切れそうな感じ、近寄りがたい人の顔のようです。お月様も災害地を見下ろす時は、痛ましげに悲しげに見守つてください。アンデルセンの「絵なき絵本」の月のように。

私には畳が四帖半もある

乾 喜与志

「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」。路郎師のこの有名な句を踏まえられたことと思います。「起きて半畳寝て一畳、それで暮せば気が楽よ」という都々逸が何かがありますね。鴨長明の方丈記を引き合いにするまでもなく、書斎は手のとどく所に欲しいものがあるのが理想です。四帖半というのは、川柳人の思索の天地としては理想的だと申せます。

舞い終る日まで女の白い足袋

黒田 能子

私たち大正生れの女は、人生をかくきちんとあらねばならぬと教育されました。思い出すのは明治初期の生れの一人の老女です。死の床にあつて寝返りするたびに、無意識に衾を直し裾の乱れを気にして上前を引っぱられるのだそうです。私はだめですね。のたうち回つて蛙をぶつつけたように無様にいきたない格好で死ぬだろうと思います。妹も教育も

知ったことかと。

その他大勢わたしも大事な役どころ

山口 美穂

団十郎や鷹治郎だけでは、芝居の幕は開きません。大勢の捕方やお腰元、通り抜けの人達をやってくれる人がないと、華やかな舞台は出来上がらないのです。そしてその大切な役どころを心得て、主役を働かせる人が必要です。つれ合いが警察署長をしていた時、なるほどと思いました。警察の仕事は、一人一人の警官がしっかりやって下さっているんだなと。署長なんてでかいツラをするだけで、ふだんはいなくなつて困らないんだなと。

じゃんけんでバーばかり出す楽道家

松本 ただし

大人物ですね。負けるとわかつている勝負にも、泰然自若として自分の信念どおりに生きておられます。ものごとを暗く暗く考えるより、どんな時にも道は開けると肚をすえておれば、たとえ地震で家がつぶれても、救出されるまでがんばれると思います。

還らない島へカモメが往き来する

福岡 しげお

カモメには、パスポートも船賃もいりません。ましてややこしい国際問題なんかに関係なく往き来しています。漢の蘇武は雁の足に

帛をむすびつけて望郷の思いを托しましたが、カモメの足にも帛をかえせと書いた文をくくりつけてあるのかも。

俺の敵は俺だと自問自答する

高須賀 金太

自分の責任をちゃんと自覚しておられますね。何事でも他人のせいにして責任をなすり合ひするのが普通です。私もつれ合いがいた間は彼の背後で勝手な事を言つて批判したり、反対したり、かつての社会党みたいでした。それが死なれて何もかも自分の責任になつてくると、面くらつてお腹をこわしたり、熱を出したりしています。誰かのことではありません。私のことです。

根を張れば有象無象がひつかる

政岡 日枝子

平明な句をと心掛けている中に、この句は深く読み込みたくとり上げました。まず鞍馬の木根道が目には浮かびました。つまり人もおれば、牛若丸のようにすいすい通る人もいます。大樹は人をからめ取るために根を張っているのではありませんが、長年のうちに地表にあらわれた根には、うっかり者がひつかるのでしよう。それは大樹の意志か如何か。一つの社会風景かとも思うのです。

水煙抄

高杉鬼遊選

摂津市 井上源一

神さまに授かる歳をもて余す

学歴の重い鎧を脱ぎ兼ねる

国あげて子等のいじめの川ざらえ

その話あの世で聴こう飽屑

世紀末地震殺人拳銃禍

米子市 足立由美子

新年へ私の棚もつりかえる

朝夕に清めの水を飲んでゐる

倅せな事によく寝てよく笑う

予定通りいけば今年もいい年だ

少しソフトになれと影に言い聞かす

丸亀市 松岡遼雲

弥勒菩薩も私も好きな半跏思惟

妻がいる事ときどき忘れます

疑えば肩凝りリング効きませぬ

何でも出来る何にもしない男だな

ごきぶりは礼服のまま戦死する

羽曳野市 芦田絢子

そんな時もありましたなあ みかんむく

背のびにはついてゆけない影法師

春はそこ梅のつばみに色が見え

きつちりと食べて一人の冬日かな

お返しがすぐに来るから気が重い

宝塚市 永田晩風

春はあけぼの老いては褪せた夢ばかり

逃げられた釦握ったまま老いる

夫婦とは何だと玩具箱が問う

バイブルにいつぱいユダが居る重さ

咳込んで私の内緒洩らしそう

名古屋 藤井高子

夢の続きへ未練も少し 春の床

誰も見てないが野の草 花をつけ

皿のさわぎをよく聞いている皿まわし

からくりはとうに見抜いている石だ

冬の蠅 仲間のような気さえして

枚方市 前 たもつ

しつかりやれと他人はいつも言ってくれ
ハンカチで男の涙拭えない

日没の視野で味方の数を読む

カードはないが診察券なら持っている

星の瞬ききつと万国共通語

藤井寺市 高 田 美代子

虹の橋なら落ちないように渡るべし

五十には五十の夢があつていい

流れ星きのうの風はもう他人

どの山も春の来るのを待っている

元を取るまで粘つていよう生きてよう

羽曳野市 酒 井 一 壺

今もある食管法はだれのため

物の無い国に残飯多すぎる

物溢れ価格破壊の底知れず

国民のわからんままの区割案

借金も義理もすませて除夜の鐘

兵庫県 安 達 厚

年かいな病氣かいなと腰をなで

譲ること覚え明るい日が過ぎる

平凡を宝と思う年になり

言うて気が済むならうんと言うがよい

逆ろうて風の強さを確かめる

米子市 小 塩 智加恵

姑の杭は寄せたり離したり

塩加減 少しきいてる嫁がきた

姑をまねて電話の受け答え

後継ぎがあると行く道迷わない

こっそりと腰痛体操淋しいね

和歌山市 山 根 めぐみ

木守柿そんなにねばらなくても

地上へは戻りたくない竹蜻蛉

温い温い心へゆるむ喉仏

さばさと苦楽跨いでいる私

生命までかけて女は満ちたりる

高槻市 小 林 一 閑

初日の出拝んだあとの深呼吸

去年欠礼 今年に彼が出して来ぬ

リストラの戌の始末を亥にまかす

手料理のおいしい妻でありがたい

追伸につまらぬことを書いた悔い

静岡市 三 浦 つ ね

家庭では憎まれ役はお母さん

美人にはそつと付き添う福の神

反省の二字を抱いて年を越す

入浴があまり静かで呼んでみる

人の世は順番ないからおもしろい

八尾市 井上しのぶ

天国に人種差別の壁はない

たたかをやめて自分の息をする

迷つてゐる間に森が消えました

可愛げのない女だとすませられ

深海の仲間 嵐にたじろがず

鳴門市 八木芳水

赤信号 人より犬がよく承知

一生を賭けて答えの出ぬ明日

年金の暮し義理欠くことに慣れ

控え目に生きて辛せだと思ふ

高齢化社会福祉は遅れがち

岡山县 福原辰江

荒れた手へすなおな母の木綿針

言い過ぎて胸がせつない帰り道

息子に負けて少し浅瀬をゆく頑固

裸木になつても老母は踏まれても

自信過剰 合わせ鏡にのぞかれる

尼崎市 田辺鹿太

鬼瓦 雪の重さをまだ知らぬ

湖底から確かに聞いた祭り笛

天国に一番近い煙草の輪

竹光に斬られて死んだ父の墓

透明な恋はやっぱりつまらない

和歌山市 杉山精子

流されぬように私も鈴を振る

覗いたらはなく虹が消えそうで

わたくしの中で大きくなる蒼月よ

支え合う人と見ている細雪

大和郡山市 榊原慧心

あの世にもこの世にもある袖の下

パチンコの最後は小銭かき集め

包帯の白さに相手責められず

客がきていつもとちがう上にぎり

羽曳野市 川田晋

ないよりはましと白髪に威張られる

色もよし値も手頃だがしばかり

フルムーン ホテルでテレビ見てるだけ

瘡せたいと歩けば膝が痛み出し

今治市 渡邊伊津志

悲しみの数だけ女強くなる

口開けて物言いたげな冷凍魚

星の位置しつかり舵に見せておく

海の香が窓の下から這い上がる

尼崎市 湊修水

突つ走る癖たしなめる墨の彩

お茶漬けが一番うまい松の内

休刊日ゆるり賀状とはなしする

神さんに良い縁もらう福娘

倉吉市 松本 よしえ

顔はまあ二の次ですと言ったはず

思い切り跳んでいるのに見てくれぬ

アンケート出せばカタログごとと来る

他人には今日も愛想笑いする

鳥取市 杉本 孝男

仲間割れ陰で喜ぶ鬼もいる

難しいことは言うまい仲間うち

台風で落ちたりリンゴの私語を聞く

成し遂げるまでの雑音聞き流す

八尾市 村上 ミツ子

壁にぶつかりたんこぶばかりつくつて

泣くことを武器にするほど若くない

曲がつてるきゅうりを安く買うてくる

雪吊りが解かれ私も春の彩

大阪市 池田 一男

女性差別どころか妻の強かさ

風の糸切れても広い空がある

診察を受けると病氣出てきそう

狂った世わたし冬眠しています

富田林市 藤田 泰子

若者に割り切り方を教えられ

上手にはなれないけれど続けてる

成人式 猿軍団のお通りだ

独り居に張合のない大掃除

綾部市 藤田 芳郎

花の名を一つ覚えて豊かなり

神売りが愛だあいだと言ひ過ぎる

バチンコへ週一回の惚け封じ

物覚えよきそうだから気をつける

鳥取市 植田 一京

劇的な話に遠い主婦でいる

簡単なことだ好きだと言えばいい

逃げ道が無くて傘から出られない

ハードルを下げて気楽な余生ゆく

寝屋川市 森 茜

アサーティブに欠けるわたしの影貧し

職安で見かけた人も桜見る

群雄割拠してぬくもりが消えている

大切な人びとばかり年賀状

河内長野市 橋本 弘美

似合わない帽子をいつも被ってる

大晦日 雑巾バケツにけつまずく

大吉が出るまでねばる初みくじ

家事万端 省略をして寝正月

西宮市 古谷 ひろ子

ひとことが過ぎ順風に乗りそこね

かざ車こどもは風の彩を見る

風を呼ぶ男がほしい永田町

殺される覚悟で女たびを脱ぐ

島根県 今若章子

クリスマスたった一夜の赤い靴
これ以上燃えたと恋が灰になる
風よ風 抜けがらですが女です
しばらくはさよなら冬の散歩道

熊本県 高野宵草

氷のうに訊く新米の水加減
深呼吸ひとつ残して眠る床
マジックの鳩が三枝の礼忘れ
今日おわる心おきなく死ねるかな

堺市 小西小雪

アメリカの赤いリングが唄い出す
沢山の愛で生きてるのを忘れ
おみくじも小吉ぐらいなら嬉し
嘘も方便なっとくさせるコンパクト

茨木市 久保田恵美子

花の土 花は気難しげに咲く
遠来の客へ畳の蘭が匂う
好き嫌い激しい人に嫌われる
果て太鼓やがてわたしに鳴る太鼓

西宮市 牧渕富喜子

どの窓も年を迎える顔になる
移し絵のあそびに少し疲れ出す
咲き切ると花は芯までさらけ出す
誕生日ほっこり蕪煮えてくる

和歌山市 古久保和子

A T M 軽い通帳吐き出され
はがき一枚持て余してる筆無精
錆び止めを塗りに夫婦で旅に出る
影法師きみも私と同年

米子市 堀江美月

倅せをたしかめ合うてパンの耳
許す気になって手鏡暗れやかに
夕暮れて可愛い馬鹿になって行く
父の背を重ねかさねて大樹たれ

高槻市 乙倉武史

料亭の贅は金粉ひけらかす
あの世にもいじめの役の鬼がいる
生きていて良かった年に見たい
まだ生きているかと社会保険庁

豊中市 石川勝

淋しさに鳩は自分の影へ降り
寒椿ころり献体考える
鼻の汗あなたは嘘が下手です
笛の音が鬼と気付いたのは秋だ

島根県 森茂美

ふるさと墨絵ばかりの雪が降る
柚子風呂に一年の計立てている
亡母乗せてゆく霊柩車小雪降る
死んでから話題にのぼる母だった

和泉市 中川 楓

木枯しに寄る岸のない父の舟

トンネルをゆっくり抜けてきた力

旅人へセーヌは母の顔をする（バリ 2句）

バリから見る日本に多いムゲ

十和田市 阿部 喜久江

ぬくぬくと椅子に納まる天下り

土と生き満ち足りている過疎の父

新鮮な香り漂うリンゴ市

寝化粧をかかすことなく古希迎え

芦別市 斎藤 房子

洗面器きょうのいろはを浮かばせて

花柄の封筒なごむ春便り

すり切れた靴がなじんで捨てられぬ

猫に鈴付ける勇気をかけて出る

尼崎市 岩倉 キク子

寝て起きて食べて遊べてありがとう

有りったけの知恵をしぼってこの程度

さわぐほど淋しさ残る春の宴

娘がしてくれる親へ私がしたように

大阪市 勢理客 トミ子

クロスワードパズルが解ける回復期

莫山の書に寛いで胡坐かく

夫婦とて襖一枚鉄の壁

えこひいき無く家族みな風邪をひく

佐賀市 古川 かずのり

感動をペアで味わう京の旅

夫婦とも趣味は読書で旅が好き

窓際に座ると社風読めてくる

身もふたもない雑音に惑わされ

今治市 渡辺 南奉

何もかも後手 回れ右でもしよう

若い日をよく思い出すうしろ向き

ポケットの数は便利でややこしい

とって置きの話 お金の要る話

大阪市 和田 和風

えべっさん帰りはったか風邪の床

窓際は鬼が解脱をするところ

福は内 鬼もおいでよ寒からう

鬼さんはころんではかり花れんげ

今治市 越智 青園

春をさがしにうぐいすが町に来る

痛いほど自分を抓るいい知らせ

水鳥の声が聞こえる羽根布团

野火走る大地の春をさそい出す

熊本県 岩切 康子

式急ぐ事情は聞くまいおめでとう

再会の決意へ旅の荷が軽い

放つとけず腹立てながらしてる世話

甘塩の父に不満の中学生

寝屋川市 太田 藍子

もう一度頑張りますと言い振らず
お正月 母はニコニコしてるだけ
はめられてウフウフの帰り道
馬鹿でした予定通りのミスをする

鳥取県 奥谷 彩子

フルムーン無職と書いて軽い靴
暗夜行路 夢捨て切れず夫と行く
破れ太鼓 老父も仏のようになり
はしゃいではやがて悲しくなる手鞠

尼崎市 軸丸 勝巳

柏手にまだ響きあり古希の春
正月と力んでみても二人膳
価格破壊まだ及ばない焼芋屋
魂を洗い替える除夜の鐘

広島市 流奈 美子

私を叱咤するのか春一番
良いことはすぐやってみるしいたけ酒
その時の心を映す水鏡
まどろんでも少し夢を見えています

宝塚市 嵯峨根 保子

かくれ蓑あれば気丈な事も言え
アドレスを入れた財布が戻らない
日だまりに探す私の椅子ひとつ
七草の粥はテレビで見て済まし

和歌山市 木村 親路

SOS美人ばかりに囲まれる
金よりも生きがいですと二度の職
水割りの底には僕のダムがある
旗色が悪いと死んだ振りをする

今治市 塩路 よしみ

壁と言う冷たいものにつき当たる
過去の罪ゆっくり溶ける絵ロウソク
この橋を渡れば罪は消えますか
ネクタイはこれでよいかと妻に聞く

大阪市 一本 勇太

調律のきかぬピアノと住み慣れる
ぎくしゃくはしても夫婦と言う絆
これからの余白を妻と恋しよう
春夏秋と続いた愛に冬の棘

貝塚市 池田 寿美子

駆込寺いじめの相談受付ける
モーニングコーヒーさてこれからのスケジュール
富士百態あすの素顔はわからない
ミステリードラマ何故か近頃よく受ける

羽曳野市 麻野 幽玄

何もようせんが心に期するもの
嫁がせて貰って老いが残される
調べると欲しくなるから見ず捨て
ああ極楽 主婦にはこしかなないお風呂

和歌山市

吉村 さち子

島根県 今川 三津江

本当は笑いたいのに出る涙

初湯から口笛漏れて受験の子

ねえあなた今夜は雪になりそうよ

堺市

宮本 かりん

高知県 百田 幸

大あくびごまかしている仁王さま

頭の火少し静めてから返事

これからを身軽く生きてゆく手ぶら

尼崎市

長浜 澄子

大阪府 澤田 和重

逢えた日のかすかな残り香を抱いて

見放した運 空き缶を蹴っている

あたたかい雨です鳩の住む街で

羽曳野市

徳山 みつこ

出雲市 園山 かおる

新しい肌着で区切る去年今年

電話機へ正面を向く初春の声

年金の財布苦心のぼち袋

福岡市

井崎 ミサ子

徳島県 安宅 美代子

付き合いで通うた趣味に取りつかれ

涙ならドラマでたとえ流します

負けん気が痛くてそっと目を伏せる

高槻市

傍島 克治

鳥取県 岩崎 みさ江

結局は父さん悪いでけりがつき

披露宴終れば才媛ただの女

東寺の塔見えてやれやれ降り支度

陽が昇る昨日のことは忘れよう

ねんねこの絆で背中あたためる

次の世は終着駅のない花野

牧方市 濱田良知
寅さんに逢つて来ましたお正月

自分史に日の丸もある赤旗も
五十年わだつみの声よみがえる

大阪市 尾崎黄紅

貰うまかつた燐寸で喫つた頃
良くも悪くもならない医者と三年目
喉元の過ぎた熱さを繰り返し

海南市 谷口義男

老い来れば妻の意見も捨てられぬ
躓けば人の痛みもよく分かる
クラス会花を添えてる姥桜

泉南市 坂根流水

さあ地震逃げるだけですこの天地
頑固だけ身の支えとは寂しすぎ
衰えた臍抜けの老いに自笑する

大阪市 藤森小雅子

紅白を隣も見てる晦日そば
街路樹のシャンゼリゼは妬まれる
色即是空男凡夫の灯を点す

尾張旭市 三浦きぬ

年齢だから年齢相応に呆けてます
残金と余命バランス崩れそう

悲しみの淵 歳月が埋めてくれ

舞鶴市 森本芳月
斬新な線が答えてくれそうな

正面を向けと心の石が鳴る
すれ違う風コトコトと言う仕草

鳥取県 山内芳江

家中が明るくなった嫁貰う
期待したうまい話に落し穴
お互いに折れるときとつうまくいく

香川県 山崎はつ恵

振り袖を脱いで娘はつまみ食い
現実に戻れば夢が遠くなる
今言えは角がたつから明日にする

堺市 吉本菁風

年寄を困らすキップ販売機
ラッシュアワー基礎体力が培われ
無農薬 姿勢は気にもせず

伊丹市 榎谷郁子

超音波いじめの音を聞きとろう
強がつて不況の町を闊歩する
クリスマス甘いにがいの年でした

唐津市 山門幸夫

君が代に年代別の姿勢見せ

お年玉 孫を指折る老い二人
吾以外 味方が居ない娑婆の風

唐津市 山門タミ

三ヶ日過ぎれば元の老いふたり

古希過ぎた猪は峠で座り込み

王将の危機を救った歩が一つ

和歌山市 森口美羽

目を閉じていつも悪妻ふりを詫び

波風を立てる気も無く投げた石

粘り腰ここ一番を試される

八尾市 平川幸枝

移り香を鼻がしつかり嗅ぎ分ける

鼻唄のジャズが出てくる快復期

ああ余生短いものに日の長さ

唐津市 浜本治幸

また無事に年を越せたと妻も老い

医師の指示守って薬依存症

正月の屠蘇酌み終えて身が締まる

富山県 高島五月

銀行からお歳暮持つて来なくなり

来年は播けるかどうか花の種

病む妻に洗剤の量 聞きに行き

沖縄県 杉谷一栄

草もちのきな粉一ぱい春を食べ

ポストまで徒歩近からず遠からず

ケチだけとお金楽しく使いたい

松江市 佐野木みえ

あれもこれも仕残した事 除夜の鐘

迷い箸一つ気になる事がある

へちま水 私の顔に慣れました

熊本県 大川幸子

だあれにも譲れぬ夢を持ちつづけ

横着にたべて血糖叱られる

コーヒーの湯気が消えてる忙しさ

唐津市 江川青琴

息子らの帰省の世話がまだ出来る

宝物 息子に孫に嫁二人

頼まれて返事はしたが忘れてる

和歌山県 中村君枝

相槌を打たねば妻がソツポ向く

公約はとても守れぬ休肝日

喪に服す金魚も犬も逝った夏

旭川市 朝倉大柏

まぐれだと他人が言うお腹が立つ

年寄りに効かぬ薬も盛ってくれ

もうお声からかぬほどに長く生き

相生市 中塚礎石

強情がおとりの針に引くかかり

やじろべえ地球が動くから動く

腹の虫 一匹二匹顔を這い

岸和田市 亀井 皎月

言い勝って女は何時も得をする

畑作り知られ皆から期待され

北の島返さぬうちは敵である

高知市 桑名 知華子

暮らしぶりそれぞれ違うお正月

地下工事男の顔が光ってる

米醬油揃えて母のお正月

兵庫県 玉田 三重

噛み合わせぬ話に油差したがる

何となく仏心で除夜をきく

味方にも義理の絡んだ敵がいる

寝屋川市 北岡 波留吉

しごかれたお陰で光る仕事ぶり

透明な政治家蟻も寄せ付けず

弥次喜多の気分で歩く松並木

島根県 槻谷 伸子

約束を気軽にうけて肩がこる

年金の大風呂敷は知れたもの

ここに来て怖い事等ありません

米子市 永井 三津子

恋人の顔が他人に変わる朝

泣いた母一度だけが覚えてる

雪降って白い私の村になる

和歌山県 中後 清史

禁煙の札がやたらに増えてくる

今だから言えるあの日の綱渡り

涙腺が弱いドラマのもらい泣き

神戸市 船津 とみ子

薄味に慣れて優しい声になり

運勢は良い事だけを読み返す

新聞を声出して読む楽しいよ

泉佐野市 内田 倫子

図書館の書架に向うとはずむ胸

転勤をする支社もない小企業

年金でまかないきれぬお年玉

宿毛市 岡村 千鳥

来世紀へ翔べ初風が風に乗る

孫宝子宝乗せて来た初荷

初対面ころ安らく人に会う

大阪市 川原 章久

張り変えた白い障子で読む賀状

ざるそばがこんなに美味い成田着

間違ひ電話三度も掛かる屠蘇機嫌

兵庫県 北川 とみ子

精いっぱい生きて二つの欠け茶碗

落し蓋 亡母の涙が浮いて来る

夢を買う街で冷たい風にあう

河内長野市 木太久 正一

娘から始めてもらおうお年玉
生きている証 年金問うてくる

妻の愚痴昔のことを忘れない

広島県 森川 抜智

お正月孫はかるたを絵でおぼえ
怒りなや先手を打ってから話す
災害で倒れた樹から新芽ふく

尼崎市 森安 夢之助

流れ矢を躲すと妻に当たってた
ニコニコと笑顔で座る酒の席
指輪など見たことがない母の指

羽曳野市 安芸田 泰子

愛情に甘え過ぎたか呆けはじめ
春風に満ちて来るもの消えるもの
愛想が過ぎて信用軽くなる

大阪市 乾 哲静

天地無用の歳暮も届く好い時代
整形の顔が冷たく笑ってる
転勤のお陰で知った旬の味

熊本市 宇野 照代

難聴の耳丁寧に掃除する

担当の医師がとっても若過ぎる

呆けたばけたと本気で誰も言っていない

寝屋川市 太田 とし子

また一つ齢頂いた泣き笑い
夫からよろしくねえと雑煮餅
だらしなく着るのが自慢フアッション

鹿児島県 大山 舞鳥影

辞めたのに微分教える初夢か
保険満期うれしさ消える貨幣価値
間違えた育児のせいと自覚なく

岡山県 福原 悦子

よく笑う人で心の見え隠れ
骨休み知らない母の割烹着
古日記小さな風の跡がある

鳥取県 藤山 弘子

餅搗きへ孫にも搗かす電話する
三ヶ日トーストやめて餅にする
年金に見合った餅でお正月

寝屋川市 宮崎 菜月

可笑しくて少し哀しい絵馬模様
娯楽化のテレビがとんと合いません
火の恋へ厚き氷の蓋をされ

札幌市 三浦 強一

老いらくの恋も知ってるテレカード
ポケベルに舌打ちをするテレカード
聞き捨てに出来ぬ話をテレカード

藤井寺市 楠 昭子

客招く隣の部屋は見せられぬ
呆けてないお陰で嫁に使われる
年金と知らずチラシがどつと来る

愛媛県 久保良子

ばあさんやたまにや鏡見なはれや
糖尿へ甘い見舞がたと来る
食事薬点滴 今日も日が暮れる

摂津市 木下道子

庭中に水仙咲かせ淋しがり
軍手干す冬陽の当る一等地
リモコンの二つ三つは手なずける

泉佐野市 河原崎礼子

波消しのブロック海を遠くする
コスモスにときめいてから恋を知り
価格破壊 浮いた分だけよい飲み

兵庫県 倉垣恵美

鉄瓶の泣く静けさもありました
みかん剥くみかん農家を思いつつ
ラーメンをふうふう食べている絆

尼崎市 河津正治

野花より造花の多弁落ちつかず
未来思考 秘策練ってる村起し

四コマ漫画 今年も暮れる政治劇

寝屋川市 瀧本 八十八

ほどの良い遠慮もときに見せ夫婦
極楽も地獄も遠慮して傘寿
上手下手超えて誠意のある賀状

尼崎市 的場 十四郎

頑固さに染まり老舗を守りぬく
花活けて喜ぶ妻に嘘言えぬ
責任を果し快気の千羽鶴

豊中市 みきわきみ

病窓をトンビが噪音なくよぎる
頑固さもすなおも残り余命尽く
逝かんとす子らは人後に落ちざらん

尼崎市 山本 すみ

動揺を静めるお茶を飲んでいる
橋渡る途中で迷い深くなる
宿ゆかたみんなおんなじ年に見え

尼崎市 野瀬 昌子

母さんの雑煮食べたい子が戻る
日の暮れの早さに妻が走り出す
うつむいていては世間も狭くなる

池田市 木村 一笛

へそ曲げた亭主に孫の守りをさせ
本棚で威張った顔の紳士録
トンボとも蝶々とも見えるクレヨン画

唐津市 野田 旭恒

節分の鬼リストラでドサ回り

笛 鐘 太鼓どこか合わない変調子

庄巻は御旅所出ずる勢子乱舞

静岡市 沢田 きん

そろそろと来たかボタンの掛け違い

カラス鳴く何か知らせに来たように

ゆっくりと眠り直した旅帰り

静岡市 浅子 まつゑ

退院の試歩喜びの歩を拾う

幾とせをたどりつづけて老いの幸

嘘つきが一人まざってかき回す

静岡市 小木 久子

そこまです言って何処まで行ったやら

難しい顔で夕飯食べている

泣き上戸笑い上戸も同じ酒

静岡市 佐藤 次枝

半世紀 時効にならぬ傷のあと

順番が近づいて来て深呼吸

一筋の絆 結べず還る孤児

静岡市 永倉 柳華

天下り役人同士回り椅子

疑わず開いてくれる自動ドア

スカートと祝辞 短いほうが良い

静岡市 松下 正枝

物置きに眠りつづける道具箱

車社会 狭い歩道は命がけ

聞けば皆それぞれ事情ある暮らし

熊本県 増田 一乗

冬仕度ドラム一杯灯油入れ

不動産担保が抜けて身が軽い

老いてなおこれだけ出来る辞書を繰る

唐津市 岩崎 實

餅の数きいて雑煮の祝膳

小みかんの小さなたねが今もある

常の日となりて未だに残りもの

唐津市 市丸 晴子

アイラブユーが切手も貼らず飛んでくる

早魃に耐えてみかんはうまくなり

来し方のヘヤピンカーブふり返る

東京都 清原 悦子

おばあちゃんまだ口紅は離せない

糸電話 電話賃など気にならず

肩書きの名刺に負けぬ顔にする

河内長野市 印藤 智子

定年後まあ快調な暮しぶり

顔までも似て来て夫婦今日も無事

孫達の帰ってからお正月

退院の自分励ます赤い服

宝塚市 飯西 ミサヲ

我が家には有って無いよな自由席

義理欠いて胃袋守る休肝日

河内長野市 大西 文次

混み入った話みかんも聞いている

裸婦像に風邪の神様立ちどまる

胃カメラを飲まずにすんでお目出とう

寝屋川市 坂上 高栄

遠慮なく意見を吐いて四面楚歌

砂丘の馬鼻息一つずつ落し

ウインドに写る貧しき我が姿

富山市 島 ひかる

中流の意識へ夢が遠ざかる

大きな児居ると思えばいとやすし

道端の空きカン拾うのも勇氣

松山市 丹下 美津子

観光バスも大瀬の里を組むコース

いろいろの話をもって里帰り

賑やかに来てにぎやかに去った孫

香川県 辻上 よしみ

離れても心を繋ぐ虹がある

倅せを掴みそこねた手が憎い

馬鹿になる事も女の胸算用

檜原市 西本 保夫

そう言えばチャンス逃してばかりいる

ゆるせない人だと妻も決めている

電話より確実一枚書くハガキ

八尾市 村上 剛治

夫婦げんか負けるが勝ちと逃げておく

大金は手が小さくてつかめない

神様が知らん顔するから迷う

羽曳野市 山本 たけし

正月も休めず書いている履歴

まだ欲も夢もあります古希の春

お節食い脂肪気にして寝正月

犬山市 山田 津多江

離乳食 親も一緒に口を開け

一を聞き十を悟って嫌われる

氏神へファミリィでゆく下駄の音

鳥取県 山本 正光

何もかも握られました糖衣錠

デパートで欠伸しながら妻のあと

捻子巻いて余生丈夫に生きている

富田林市 山原 昭水

夜遊びにこの頃妻に誘われる

半額になるまで待つて買ってくる

この頃は愛よりお金選びます

姫路市 福島 姫女
今日よりは若い日無いとおしやれるる

冬至湯の風呂屋ののれんよく動く

島根県 菅田 かつ子

生きている姿で蟹は膳にのり

初詣終つて鳩が胃をこわし

宇部市 中村 三良

旅が続いて悟りの坂の深い闇

にぎり拳は握つたまま笑顔する

和歌山市 楠見 章子

かわいさもルーズに見える倦怠期

重そうな方がわたしのお弁当

大宮市 新井 圭二

それぞれが神の言葉聞き違え

初出勤 勘がにぶつて乗り遅れ

鳥取市 田中 友子

着飾つた服旅先で邪魔になり

スタミナを盛つて受験の尻を押す

泉佐野市 稲葉 洋

呼びすてにされなつかしい里帰り

吉兆に老いも願いの二つ三つ

犬山市 田中 太音

子と孫に囲まれ女房達者すぎ

お迎えの準備はできた火打ち石

息子には俺より上と期待する
真心を切り売りされてすぐに乗る

鳥取県 橋本 孝原
豊中市 藤原 桂子

行く先の出会い楽しいひとり旅

服装に引き立てられて生きる日も

河内長野市 水谷 笙子

にっこりが五千円也 孫が来る

高野線カタカナにでも変えますか

長岡京市 山田 葉子

自立して甘えてくれるひとがいい

気がつくと手持ちのカードなくしてる

唐津市 山口 ふさ子

読みたい本 山ほどあつて眼鏡買う

しっかりと食べて病に縁がない

島根県 三代 朝子

いい事がありそう春の便り待つ

老いの楽しみ誘い誘われ春の旅

尼崎市 尾宮 弘治

老いの独楽どちらも孫に弱すぎる

わる者でいいのと妻が瞳で笑う

島根県 福岡 博利

綿ぼうしうれしそうなる庭の松

老いしかな酒が一合あれば足る

岡山県 富坂志重
新春に曾孫が一人ふえました
苦と樂と生きる手垢の道具箱

島根県 武島 ちよえ

全身を耳にしている一人の夜
聞かされてからは他人事には出来ず

岡山県 国米 きくゑ

陽だまりのつくしの土手で亡母に逢う
記念日と言うては増える酒の量

香川県 田中 ふみ

仏様にお話聞いて貰います
女です選ぶ宝石目も光る

堺市 谷平 照とも

早起きと遅寝でもめる二人旅
屋久杉の生命に力湧く思い

仙台市 小寺 九

一人居に佗助の名が氣にくわぬ
バック入り七草粥の一人分

鳥取市 中澤 正恵

天候不順約束してはまた今度
はなんてんをまとい横着きめている

鳥取県 権代 康女

雪起こし神の怒りか喜びか
馬鹿笑い少し長生き出来そうだ

岸和田市 井齋 一齋
価格破壊 内職までも攻めてくる
リーダーのとおり動く渡り鳥

鳥取県 原 みさを

子ができて嫁の軸足太くなる
星空と静かさだけの故郷です

鳥取市 岸本 宏章

ささやかな善意美談になってくる
やりくりの母は粗末な服でいる

千葉県 大川 晩翠

三ヶ日どのチャンネルも同じこと
風邪引いて箱根駅伝テレビ視る

大阪府 原 美恵子

トメ子さんも捨吉さんも老いました
囑託になって判った事がある

静岡市 片平 静代

酒造場味見をさせて買わされる
一円の尊さを知る消費税

兵庫県 酒井 靖子

姉妹会こころ許せるお茶にする
こめかみがピクリと動く向い風

兵庫県 円増 純子

振返ることもしないでさようなら
虹求め続けて虹にほど遠い

子を叱り子に叱られる齡となり
暗闇の一本道の長いこと
西宮市 池田善守

賽銭の音だけ響く初詣
静岡県 大村正雄

怪獣の名前孫から教えられ
岡山県 土居ひでの

晴れ着にて猪の首少し回りかね
鳥取県 中西智恵子

還暦も女盛りのコンパクト
吹田市 西岡豊

頑張ろう年の初めの祝い餅
言い訳は悪友だしにことがすみ
鈴の音に洗心をする初詣
暗闇で春風恋し雛人形
チョコレートなかった頃の青い恋
ベル二回 無言電話が気に障り
齡の功小さいミカン選る甘さ
紋付の子猿照れてる初舞台
素人が歌舞伎のまねの村芝居

羽曳野市 西村りつえ

東大阪府 松山隆

交野市 山川日出子

今一度抱かれてみたい星降る夜
嫌われているとも知らず好きと言う
和歌山市 和田美寿子

点滴に命あずけて治癒をまつ
八尾市 生嶋ますみ

簡単に手術しますという主治医
松江市 浦辺静江

握手して隣の孫へお年玉
良い所へ来たと受話器持たせられ
西宮市 岡本道子

きりきりとひといとおしき肋骨
片翼の雀に遠い空の碧
和歌山県 上岡正直

狂った大人の姿子に映る
賽銭箱お札の札か食欲か
伊丹市 小熊江美

笑わして泣かして役者冥利なり
函館の朝市蟹を溢れさせ
鳥取県 高尾京

どうき打つ夜が明けそめて深呼吸
度々の輸血でいのち支えられ
鳥取市 谷口侑里

美談とはいえぬが夫婦仲がよい
降水量ゼロを信じて雨に濡れ

鳥取市 谷口侑里

鳥取市 谷口侑里

鳥取市 谷口侑里

米子市 服部 朗子
こわごわに食べて私のダイエツト
手料理で正月の夢ふくらます

枚方市 森 本 節 子
両の掌にゆたかさがある雑煮碗
お仏壇 水仙の香がみちている

寝屋川市 井 上 すみれ
何も彼も中途半端で年変わり
せつがちで愚図で自分がややこしい

米子市 池 尾 保 子
焦点がなくてうつろな埴輪の目
留守電へしっかりと話しておこう

米子市 鹿 島 蘭
母からの便りに暗示らしき文字
働いた手にガラス玉よくなじみ

和歌山県 久 保 ふみえ
優しさは瞳の中でものを言い
短気とは思ってもせずに指摘され

寝屋川市 後 藤 黎之助
明日から今日をみている眼が怖い
新しい年で古さが加速する

犬山市 早 川 盛 夫
年寄の元氣家では困りもの
お互いに気になる話ふれずおき

鳥取県 橋 谷 静 江
良い風の吹く方向へ当る勘
食うて寝てテレビ見飽きてお正月

富田林市 欄 智 久
人生はそう簡単に終わらない
良妻賢母ぶっても只の女です

唐津市 福 島 紀 一
友逝きて答の来ない十二月
禁煙が三日続いてまだ不安

和歌山県 藤 井 春 子
余命表伸ばして神の掌にすが
快調に目覚めてきいた新春の音

酒田市 永 澤 裕 子
合格の小豆一合待ち構え
繰り言の空回りする外れ籤

大阪府 中 橋 恵美子
退職へ銀行員が手もみする
普通の日に戻り大根煮ています

兵庫県 中 野 とよ子
祝電を打ってその場の役がすみ
生活のリズムを変える間がほしい

静岡市 中 西 雅
亡母の年越せとまわりは言うけれど
絵に書いた七福神の夢を見る

新潟県 高野 不二
父の齢こえてわかった父のよき
政治家の裏は見せない記事ばかり

砂川市 武田 正美
子の好きな進路に託す親心
反逆のこの身を責める向い風

高槻市 執行 稲子
歳月が浦島太郎にさせる駅
いのししの鼻につつかれ筆走る

茨木市 島元 ふみ
老人の自覚はないが古希を越し
丸餅に慣れて大阪ついの町

弘前市 今生 恵子
退いてから海の広さに溺れかけ
カステラの端っこ好きでそつがない

島根県 児玉 幸子
久し振り話はずむ夜明まで
小寒の小春日和にせりを摘む

鳥取県 近藤 秋星
お正月 小皺の顔を化粧する
年賀状 妻に書かせて飲んでいる

豊中市 岸田 知香子
天神の絵馬に合格初参り
紅白が済んで飛び出す初詣で

柏市 上鈴木 春枝
新築の隣家に吐息聞かれそう
楷書での受話器を置いてからの凝り

鳥取県 武田 照女
新人が空気を少し入れ替える
矢印が行く方向を狂わせる

島根県 松本 聖子
しまい風呂ここがわたしのオアシスで
残業がことさら佗し外の闇

尼崎市 向井 末貞一
爪弾きの三味の音色に足を止め
ゆつたりと浸る湯舟に贅溢れ

弘前市 相馬 銀波
年度末 残尿感拭えない
後手ごとと気付いて種を播きなおす

米子市 木村 春枝
父の旅 母と逢えたろ一周忌
頼りないが後に続く子を頼る

島根県 安部 美恵女
雪の夜を和む折り紙親子猪
肩がこるので畑へ出ます農閑期

唐津市 松本 圭一
医者嫌い薬嫌いは酒が好き
愛してる言われるたびに罪に落ち

松江市 安食友子
蜃気楼に誘われそうな沖の青
一言が階段の音荒くする

天理市 飯田昇

横車押して大役背負い込む
身構えてみたとして所詮播いた種

出雲市 川島和歌子

熱い胸心の鬼がかけめぐり
有難い和尚の法話アクビ出る

箕面市 木村天弘

ゆっくりと歩いて波に乗り遅れ
波立てぬ老いの氣遣い苦勞人

和歌山市 木村初子

一瞬に賭けて悔いなしシャボン玉
三世代生きて未来がまだ見えず

大阪市 平井露芳

本皮や言うから匂いで見ると
紅白で鬼も笑いでしめくくり

松江市 松浦登志子

子どくさん掛けて割ってるお年玉
しみじみと話すつもりが仲たがい

松江市 松本知恵子

冬の虹 大事なものは胸にある
木枯しへ凜と咲いてる水仙よ

今治市 村上久美子
ガタガタと鬼が邪心の戸をゆする
動く歩道セカセカセカと歩く癖

倉吉市 山中康子

万両の実に足下を探られる
浮かされて右往左往の花便り

寝屋川市 富山ルイ子

観桜の誘いうれしい電話口
師の無事を祈りお寺を梯子する

今治市 野村清美

腹の虫起しに夜泣きそばの笛
近道を教えてくれた落し穴

尼崎市 中澤向西

返杯にくどくど酒が冷えてくる
どうしても血圧上がる十二月

香川県 高橋たみ

今の世もおしん あちこちいて暮らす
不揃いのもちに楽しさありました

鳥取市 津村静枝

さりげない師の氣遣いにまだ添えず
子の机 今は私を指図する

日立市 加藤権悟

ムードには弱い男のコップ酒
故郷の温い情けの酒に酔う

唐津市 入江喜久亭
お年玉孫に渡せば親が取り
杖ついて老いが笑顔の花見坂

姫路市 服部一典

一人居へ呑みたいだけの雪見酒

何時からか舵取り代る定退後

泉佐野市 大工静子

黄楊の櫛 男の孫がくれました

長尻も焦げた匂で腰を上げ

高槻市 江原秀夫

お元日 三日坊主の誓いたて

この辺で止せば薬になるお酒

福岡県 本田忠男

利子税について行きたい利子である

地獄から使いが持つて来たお水

島根県 岩田三和

大寒に滝もおつて冬休み

年いちど眠る蔵からおきる雛

東京都 松本冬蛇

宝籤競馬競輪総博徒

近頃は呆けたふりする時もあり

八尾市 與田明

エイズより恐いワイフが側に居る

孫が来る楽しみを待つジジとババ

大阪市 中井正秀
公園へようおいでたとさるすべり
クーラーがばんばん効いて肌寒い

藤井寺市 鴨谷瑠美子

熱をもつ身体吹雪を待っている

用事して美味しいところ後で読む

寝屋川市 籠島恵子

リモコンの感度つけたいうちの子に

わたくしを前に夫のボタン付け

鳥取市 山口しげる

言い訳の出来る近さに友が居る

旅立ちの妻は童女の顔になる

尼崎市 吉永伊三郎

妻の掌に乗ったふりしてのばす羽根

欠礼のハガキしみじみ去年今年

和歌山県 村中悦男

目が光る中国の子にある活気（中国に旅して）

友が買う旅の土産がよく見える

出雲市 浜圭三

手作りの干支も飾って年を越す

健康薬あれこれ変えて飲んでます

神戸市 向井泰子

咳ごほん二階の夫まだ元気

眉間にも皺とりクリームつけておく

大阪市 松 永 会 美

羅漢さん笑って送る塩の道
鏡見て笑ってみたり怒ったり

静岡市 増 田 扶 美

丸い背な幾つ山谷越えたのか

良い目ざめ生きる幸せ今日もまた

尼崎市 萩 原 し げ る

大みそか余暇を氏神訪うてみる

雑魚寝して夢まぼろしの除夜の鐘

出雲市 西 尾 和 子

やりつけぬおしゃれ気になるイヤリング

不意の客 電子レンジが忙しい

2月号 未掲載分

大阪市 一 本 勇 太

無色透明 助言は胸にジンとくる

錆止めを真つ赤に塗って生きている

折れ釘のような余生をどう生きる

正論に拍手がこない爛ざまし

尾張旭市 三 浦 き ぬ

壺の小菊 流儀は聞かぬことにする

美人薄命 美人の分も生きてやる

溢れてる老婆 私もその一人

五十音辿って名前思い出し

今治市 野 村 清 美

ひねくれた盆栽なのに褒められる

騙されて咲く野ぼたんの返り咲き

うっとおしい事は忘れた雨上がり

ぬくもりを貰ってバター溶け始め

香川県 高 橋 た み

ドアあけて又閉めて待つ娘の帰り

たおれそうその木の下で休んでる

葉も柿も同じ色して美しい

沖縄県 杉 谷 一 栄

履き替えに帰る足元恥ずかしい

オーイお茶 自分に言われたかと思う

多用縫い出来るミシンも飾り物

枚方市 森 本 節 子

お互いに疎遠をわびて三部経

無農薬 虫もががつ菜つ葉食い

居座った気持でひとつ年をとる

鳥取県 中 西 智 恵 子

幸せはお餅一つで腹八分

影武者が殿より目立つ猿芝居

寄せ鍋の底かき混ぜる永田町

熊本市 北 川 一 進

お城写る角度あちこち変えてみる

花の色それぞれ自慢 垣根越し

なるほどとうなずいて聞く選挙戦

— 水 煙 抄 —

秀句鑑賞

— 2月号から —

小 野 克 枝

木犀の風に白杖足を止め

村 上 ミツ子

木犀の香りを運んでくれたのは風。呼び止められたのは一本の白い杖。ひとときの安らぎを美しい心の瞳で満喫されたことでしょうか。あたたかい一幅の絵を見せて戴きました。

よそさんの食卓のぞくレジの列

徳 山 みつこ

女性ならではの感性と、軽い穿ちで微笑ましい句が生まれました。そうです。買物籠の中身を見れば、今日の食卓が判るのです。

掘みどり欲がつかえて手が抜けぬ

辻 上 よしみ

物と金さえあれば怖いものは無いとはかりに、欲の皮を肥らせてしまった結果、こう言うていたらくになるのです。殺伐とした今の世の中を、無欲に生きた良寛さんが見たら、どんなに嘆かれることでしょう。「手が抜け

ぬ」に苦笑させられました。

どうだどうだと聞きに来るから痛くなる

藤 田 芳 郎

心配をしてくれる気持に対して厭な顔をするわけにもいかず、愛想笑いにくたびれてしまったのでしょうか。ユーモアとペーソスを半々に混ぜ合わせて、人間の深層心理を見事に捉えています。さすが巻頭の一句ですね。

夢にまだふる里があるホームレス

野良犬に餌を与えてホームレス

三 浦 強 一

故郷を想い母を想い、世の中の矛盾に抵抗することなく、真摯な生き方を模索しているお姿が見えてきます。軽いタッチで並んでいるホームレスの詩五句に、惜しめない拍手を送ります。

しまったと思う約束してしまふ

大 西 文 次

こう言う失敗は日常茶飯事の私です。気の合った同士のお喋りの中で、ちよつといい顔してしまつたばかりに、大きな荷物を背負うことになったのです。作者の慌てぶりが目に見えるようで楽しい句になりました。

こんな日もあるのか番号青ばかり

牧 淵 富 喜 子

「青ばかり」に安心は禁物。どんな災難が

待ち受けているかも判りません。たとえ赤信号ばかりが続いたとしても、「明日の来ない夜はない」と言われた吉川英治さんに習って安全な道を歩くように努めましょう。

車椅子に乗せる重みが年毎に

松 本 冬 蛇

重いのは多分、心の重荷の方が比重は高いと思うのです。老齡化の進む昨今、他人事では済まされません。戦後五十年、我慢して耐えて日本の復興に尽された方々のお陰で、今日の平和があることを忘れてはならないと思うのです。

指切をいっぱい溜めて孫が去ぬ

北 川 と み 子

きつと優しいおじいちゃん、おばあちゃんなのでしょう。どんな約束の指きりゲンマンだったのか教えて下さいね。私にも三人の孫が居ります。理屈抜きで可愛い孫が「バイバイ」と手を振って帰るときは、すこし目がつむのです。

守らねばならぬ一人の小さい城

今 川 三 津 江

この句から、ひとり暮しの淋しさと厳しさが感じられます。孤独に打ち克つて、楽しみ多い実りある人生を作り上げて下さい。川柳を生涯の友として…。

沙湖抄

小出智子選

サーカスが残っていた水溜り
 絆ひとつ結んで神はほくそ笑む
 幹にもたれた写真 孤独は昔から
 小樽運河に私の過去が佇っている
 胸張って歩めと影が前をゆく
 一日の折目がつかぬ休刊日
 初春を笑っている間に財布空になる
 満天の星のひとつと相聞歌
 手の温み憶えてくれていたらしい
 二年生悪いことなら直ぐおぼえ
 家計簿を付ける妻から座を外す
 年寄りが無駄に使わぬ寒の水
 コンクールに出る駅弁は売っていない
 マネキンのまばたきだれも見っていない
 頬よせて麻酔の妻の息を聞く
 女対女 帯の高さを見のがさぬ
 順風に乗って帰らぬ竹トンボ
 旅の掌で朝風呂の湯を掬う
 誘い水井戸の深さはまだ知らず
 雷がどかんとおちておちついた

鳥取県 江原とみお

宝塚市 永田 暁風

寝屋川市 堀江 光子

岡山県 矢内寿恵子

松原市 小池しげお

岸和田市 田中 文時

今治市 越智 一水

五所川原市 斎藤 易

米子市 金山 夕子

広島県 田村 新造

和歌山市 細川 稚代

名古屋市 越村 桔梢

西条市 村上 明水

西宮市 奥田みつ子

香川県 高橋 たみ

ゴミの山から這い上がるリサイクル
 後悔はいつでも指を切ってから
 勾玉のみどりは遠き空のいろ
 虹消えて啄木の詩口ずさむ
 蠅歩く冬のいのちの透き通る
 黙祷のしばしを雀だけしゃべり
 クリスマス今日はだあれも来ない夜
 黙々と己育てている古木
 カラオケは独りになってから歌う
 かごめかごめうしろの正面は無人
 私を美しくする白いエブロン
 化粧品いろいろつけている自嘲
 家計簿に辻褄合わす字が乱れ
 後列を走ると空がよく見える
 トラさんで泣いて元日暮れんとす
 目玉焼こわれた朝は気を付けろ
 ポケットの拳頑固を放さない
 習慣が違い垣根を高くする
 去年より大きくなつた鏡餅
 出処はしっかりしてる再生紙
 余命とは釣り合ってるか預金帳
 黒豆の転げて暗き床に和す
 雪晴れの道すれ違ふ霊柩車
 鳴砂に耳かたむけた日の短
 ライバルの位置たしかなり寒椿
 万葉仮名の中に見つける祖母の筆

弘前市 中山 雅城

富田林市 藤田 泰子

堺市 近藤 豊子

寝屋川市 江口 度

尼崎市 田中 薫

青森市 工藤 甲吉

大阪市 日坂 秋子

岡山県 江口有一朗

鳥取県 土橋はるお

東京都 山口 新子

倉吉市 淡路ゆり子

大阪市 西出 楓楽

阪南市 深日白光子

倉敷市 小野 克枝

横浜市 菱田 満秋

出雲市 園山かおる

砂川市 大橋 政良

鳥取県 新家 完司

大阪市 上田 柳影

枚方市 前 たもつ

豊中市 田中 正坊

西宮市 岡本 道子

青森県 田中 叶

寝屋川市 坂上 高栄

弘前市 佐治千加子

米子市 政岡日枝子

定年がノーネクタイにしてくれる
 じつくりと鈍行で見る冬景色
 日が伸びて少し優しくなる心
 赤ちゃんに習っていますいい笑顔
 初暦なんとはなしにいい予感
 好きという雪崩は防ぎようがない
 新年の柏手打てば衍する
 終着駅別れの音を知りつくし
 風邪の掌にナイフの冷たさが怖い
 感度よし君の心がよくよめる
 剪定の樹と語り合う頬被り
 札束に囲まれて寝て尚さびし
 寒椿落ちて仏のはなしなど
 気にかかるところであなたとく違う
 仁王さん元はやさしい顔だろう
 七、八分どおり下ろした浮世の荷
 頑固さの抜けない皺を持てあまし
 背中には僕を見詰める人が居る
 一番に屠蘇まだ父権ゆるがない
 約束の重さを知っている封書
 満たされて悪魔の入る隙がない
 女房に少し派手目をすすめてる
 婦唱夫随老母の辞書にも載っていた
 どの道も袋小路の私の地図
 牛乳を飲む日が続く父と住む
 石蹴って隣の犬をけしかけて

大阪府	澤田	和重
福岡県	本田	忠男
河内長野市	水谷	笙子
鳥取市	植田	一京
枚方市	海老池	洋
海南市	三宅	保州
守口市	森川まさお	
米子市	堀江	美月
京都市	都倉	求芽
吹田市	西岡	豊
弘前市	岡本	花匠
大阪市	稲本	凡子
八尾市	宮西	弥生
堺市	宮本かりん	
西宮市	西口いわゑ	
箕面市	岩津ようじ	
川西市	松本ただし	
米子市	林	荒介
今治市	月原	宵明
弘前市	村田	善保
鳥取県	西川	和子
大阪市	榎本	路児
香川県	川崎ひかり	
羽曳野市	吉川	寿美
神戸市	船津とみ子	
寝屋川市	後藤黎之助	

台本に此処で笑えと書いてある
 有情無情受け取り方にある違い
 エプロンが外せた妻の小正月
 娘が嫁ぐ卵焼きしかできぬのに
 自己破産カードはいつも薄っぺら
 手のひらに種も仕掛けもない月日
 さむい部屋にひまわりの絵をかけておく
 冷静になれと言ってる冬の月
 流れ星 星の謀反かも知れぬ
 お説教うつらうつらと聞く小春
 九十五歳の母ゆつくりと花野逝く
 水仙の美しい今日誕生日
 老いかなし腹が立っても怒れない
 少年のいじめ他山の石でない
 寒玉子きょうの元気を食べて出る
 台所事情は言わぬ母でした
 忘れな草忘れたこと山とある
 言葉づかい暮らしの荒れをのぞかれる
 空元気夜は小さくなって寝る
 響き合う友と余白の中に居る
 気まぐれをゆるす私のマスコット
 負け犬がばくの心について吠える
 触れ合って互いに丸くなる小石
 愛ですか会わずにいるということも
 猪の勢い借りて今少し
 ジョーカーを持って顔に出さぬ孫

唐津市	野田	旭恒
和歌山市	桜井	千秀
姫路市	丁坪サワ子	
鳥取県	石谷美恵子	
宝塚市	丸山よし津	
和歌山市	田中	輝子
和歌山市	木本	朱夏
泉佐野市	内田	倫子
姫路市	大原	葉香
姫路市	黒田とよの	
岡山県	土居ひでの	
堺市	山本	半銭
鳥取県	林	露杖
唐津市	田口	虹汀
鳥取県	鈴木	公弘
和歌山市	堀畑	靖子
今治市	矢野	佳雲
寝屋川市	籠島	恵子
鳥根県	松本	文子
米子市	木村富美子	
吹田市	山本希久子	
札幌市	三浦	強一
鳥取県	岩崎みさ江	
堺市	谷平	照
和歌山市	和田美寿子	
尼崎市	春城武庫坊	

女部屋時計は少し遅らせて

助太刀に來る筋書きにだまされた

苦勞せぬ子等が唱える無神論

取り柄などないが笑顔は持つてゐる

大根おろしあなたをおろすように摺る

ポケットにまだ残してゐる最後の手

甲斐性がすこしあつて怪我をする

淋しくて部屋にポスター貼つてみる

趣味に明け余命は神の思召し

乗りついで乗りついで行く終の駅

人の目に怠惰とうつるかも知れず

逢いに行くバスへ信号機の多弁

冬トマト 神のなさけが匂わぬ

老友の賀状の筆も枯れてゐる

姿勢よき人のあとからついて行き

笑顔は不思議明日をかえてくれ

そう言えば亡父のビンタが痛かつた

出逢うまで折りつづけよう紙の鶴

女だな秘密語つてしまけり

ユーモアでかわしておこう非難の目

雪月花まだ夢を見る絵の具皿

明日のこと明日になつたら考える

結び目に願いをこめて娘は二十歳

けつたいな男はんでも客は客

大凶でふつきれました気の迷い

寂しさを振り払うのか雪が舞う

西宮市 山本 義子

米子市 石垣 花子

海南市 谷口 義男

旭川市 朝倉 大柏

大阪市 神夏磯典子

出雲市 久谷まこと

羽曳野市 酒井 一壺

弘前市 戸 一ツネ

摂津市 井上 源一

和歌山市 山田 高夫

尼崎市 春城 年代

綾部市 藤田 芳郎

名古屋 藤井 高子

泉佐野市 稲葉 洋

唐津市 岩崎 實

岡山県 富坂 志重

八戸市 島田 昭治

米子市 中井 ゆき

寝屋川市 宮崎 菜月

柏市 上鈴木春枝

宇部市 中村 三良

米子市 小塩智加恵

米子市 林 瑞枝

枚方市 濱田 良知

高槻市 守先 伸子

鳥取県 谷口 次男

語学力つて外国が近くなる

はほ笑みを絶やさぬように鏡見る

浅い眠りの中で走つてばかりいる

野仏の頭を撫でる春の風

玉手箱開けるところで目が覚めた

無為無策そんな日もある山眠る

不意の客いつもポットが味方する

仲直りしたのかペアの服で来る

灰皿へ意志の弱さを知らされる

関空の風に国籍見失う

大阪の孫が野をかけ帰らない

ふところに忍ばせてある切り口上

生きてゐる証は腹が空いて来る

好き嫌い器用に分ける箸をもち

まだ米寿ですよと姑のうす化粧

満点の笑顔空気を和ませる

初鏡心曇らぬように拭く

とみおさんの句。つい昨日までそこにサーカスの小屋があつた。まだその日のジントラの曲が耳に残っている。「水溜り」と

いうのはサーカス一団の暮しの名残りである。サーカスへの余情を見事に十七音字に纏められた。曉風さんの句。川柳とは自

己を表白するものだと思つて。さり気なく表現された二句には、作者の思いが凝縮されて、しみじみとしたものが胸に伝

わつてくる。光子さんの句。前をゆくわが影に作者は思い当るものがある。作者の前向きな姿に拍手。文時さんの句。一読し

て何故?と考へ、そして納得させられる。一般的な家庭の主たる者には複雑なものがある。心の動きが鮮やかに見える。

八尾市 山下美津留

兵庫県 酒井 靖子

東大阪市 今岡 貞人

藤井寺市 中島 志洋

香川県 辻上よしみ

出雲市 園山多賀子

大阪市 松尾柳右子

倉吉市 松本よしえ

茨木市 藤井 正雄

鳥取県 上田 俊路

島根県 岩田 三和

米子市 鹿島 蘭

高槻市 乙倉 武史

岡山県 荻野鯨虎狼

宿毛市 岡村 千鳥

和歌山県 藤井 春子

静岡市 片平 静代

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、、、ろ

(51)

橘 高 薫 風

川柳雑誌十周年に因み福田山雨楼の調べて「十を因める」として「十違い十組」「同じ歳十対」「物故十大巨石」の三項が示されている。山雨楼は後に川柳雑誌社の副主幹になった路郎の心酔者で、希有の論客であつた。

十違い十組

(五五) 長崎 柳秀	(四五) 矢野 錦浪
(五〇) 庄 萬よし	(四〇) 永田里十九
(四九) 齋藤 松窓	(三九) 田中五呂八
(四七) 蛭子 省二	(三七) 塩路 吉丁
(四六) 麻生 路郎	(三六) 福田山雨楼
(四二) 大谷五花村	(三三) 布部 幸男
(四二) 安川久流美	(三二) 松丘 町二
(四〇) 西田 艸柴	(三〇) 尼 緑之助
(三七) 前田 雀郎	(二七) 楊井 二南
(三四) 水谷 鮎美	(二四) 山本 丹路
同じ歳十対	
木村半文銭	(四五) 森 東魚
本田溪花坊	(四四) 梶元 紋太
岸本 水府	(四二) 橋本 緑雨
前田 五健	(四一) 小田 夢路

亀井花童子	(四二)	麻生 葭乃
安井ひろし	(三八)	北山 悟郎
関本 雅幽	(三七)	岩崎 柳路
高橋かはる	(三六)	西村 明珠
日野 華水	(二九)	河野 夜王
三条東洋鬼	(二八)	中野 裸人

物故 十大巨石

児島六厘坊	明治四二・	五・一六
藤村 青明	大正 四・	八・二
松村柳珍堂	同 八・	九・一四
今井 卯木	昭和 三・	二・三
窪田而笑子	同 三・一〇・	二七
武笠 山椒	同 四・	三・一八
西原 柳雨	同 五・	四・二七
河盛 芦村	同 五・一・	一四
杉村 蚊象	同 五・二・	二四
浅井 五葉	同 七・	七・六

川柳雑誌社には当時学生だった伊藤愚陀・住田乱耽のコンビがいた。愚陀は昭和七年暮れの二十七日、腸チブスで急逝する。行年二

十四。乱耽は涙ながらに僚友との二人句集を出版する。麻生路郎の「潮騒」の序。

愚陀は一見寂しい男であつたが、うちにはいつもとろとろと燃えるものを持っていた。

(略)彼の顔からうける感じはどことなく子どもらしいところがあつたが、態度からうける感じは親父くさかつた。(略)

彼の感覚は新らしかつた。そして鋭かつた。それは彼の川柳を見れば判るが、彼は空想と現実を巧みに織り交ぜて漂渺とした句を創上げてゐる。私は彼の将来に多くの望みをつないでいた。彼が学業を終えたら『川柳雑誌』

の編集を彼の手に委ねたいと心ひそかに期待していた。しかし、彼の川柳が彼の墓標として永遠に光りを放つであらうことを思う時、多少の慰めとならぬこともない。(略)

河童同志愛の言葉は泡になり

近代美鋭く迫る啓よ

逢ふ日もやはりバットなりけり

手と足から女の線を拾ひ集めて

母子して朝餉に茄子のつや、けき

腕 足 胴 ばらばらに病院をぐるる

死ねばよいと思ひながら電車道越えた

止まる時計へ金平糖を入れておけ

猫が窓へ来て女の顔してた

なかに日向で棺桶を考へてゐるのさ

苗香のむ

西出楓楽選

三本足の椅子でうたた寝などしてる男のかばんちよつとのぞいてみたくなり風呂敷に遊びごころを包もうか今日と言ういちばん若い日を生きる案内図ほんに行つていいのかなふだん着に替えるとお腹がたとへり賞められてから運針の目が狂い女同士 食べて話して生き返る間に合わすような微笑で会釈する赦そうと決めて土鈴がよく響くいつからか運の悪さにしています鮮明な記憶にリボン付けておくふところを見せあつてから他人めくいくつもの夢を見て来たひなまつりジーンズに着替えてからの私生活ほほえみの裏をせんさくなど出来ぬふる里の山が後ろに控えている捨てられた科白を集めふところにしがらみの脱ぎっぷりなら冬木立

米子市 政岡日枝子
富田林市 片岡智恵子
貝塚市 池田寿美子
鳥取県 岩崎みさ江
藤井寺市 高田美代子
兵庫県 倉垣 恵美
寝屋川市 井上すみれ
鳥取市 植田 一京
和歌山市 北山 好笑
倉吉市 最上 和枝
寝屋川市 籠島 恵子
倉敷市 小野 克枝
米子市 中井 ゆき
大阪市 鍛原 千里
和歌山市 宮口 克子
米子市 青戸 田鶴
倉吉市 松本よしえ
岡山県 山本 玉恵
和歌山県 小倉 アサ

目標があるから心歩きだす
それまでに薔薇の棘とも握手する
すこし疲れて花屋の前に立っている
ふる里の山がだんだん丸くなる
海を見にもっと大きくなりたくて
柿の種ほどの情けは持っている
なるようにしかならないという慈悲か
子の視野は背伸びしたとてもう見え
絵馬の山 神はただ今思案中
愛だけでは奇跡現われないようだ
流されて流れ私も様が変わり
てのひらの俸せ逃げるのがうまい
芽の出ない鉢にも水をやっておく
ときめきを忘れかねて郵便受
有効なパンチ温める懷手
石になり木になりバードウォッチング
セクハラの抗議ぬらりと躲される
二十五時仁王の笑い声がする
ゴム紐の距離で嫁との和を保つ
めんどうは飲むのと飲まぬお正月
居眠りが上手で姑らしくなり
家計簿の抱負忘れた春財布
今日だけの夢で終ろう雪椿
奥歯からめれる言葉に迷わされ
更年期 信号無視で通過中

和歌山市 吉村さち子
米子市 野坂 なみ
西宮市 西口いわゑ
和歌山市 田中 輝子
富田林市 藤田 泰子
和歌山市 木本 朱夏
弘前市 佐治千加子
和歌山市 山口三千子
鳥取県 田村きみ子
大阪市 本間満津子
和歌山市 堀畑 靖子
島根県 松本 文子
八尾市 宮西 弥生
西宮市 門谷たず子
倉敷市 井上 富子
東大阪市 指宿千枝子
和歌山市 岩本美智子
藤井寺市 楠 昭子
羽曳野市 吉川 寿美
大阪市 渡部さと美
姫路市 丁坪サワ子
鳥取県 羽津川公乃
出雲市 石倉美佐子
米子市 木村富美子
芦屋市 黒田 能子

笑い終ると顔は哀しくなってくる

懸命なぐらしの中で物忘れ

世紀末 衆愚の鼻が高うなり

花の溪通った風は花の色

言い訳はきらいお茶漬食べている

あなたから私を引いて気を許す

アメリカの肉もリングも認知する

自己主張忘れた群れの初詣

巻戻しするのはよそう辛いから

初鏡拭いて今年の顔にする

売り言葉買わねばならぬ時もある

娘もいつか鏡からでていくだろう

冬の雨許せないものなどないと

まばたいて周りはだれも居なかった

少年に森の深さを教えとく

芽吹く春齡は数えぬ背を伸ばす

懐に袂に優し里の風

先達か椿一輪ひと咲く

福笑いしましよ仁王さま仰ぐ

夫婦茶碗ひびが入ってから強い

くもり空 山の鴉に会ってきた

気の向いたときには弾む糸玉

いつの日か堀江に流れつく血潮

照りくもり何に狂うたはるのやら

ここへ来て思案するなと自動ドア

鳥取市 小谷美ツ千

姫路市 中塚 遊峰

和歌山市 福井 桂香

泉佐野市 内田 倫子

和歌山市 山根めぐみ

今治市 野村 京子

大阪市 板東 倫子

和歌山市 福本 英子

和歌山市 細川 稚代

鳥取市 前田 一枝

香川県 辻上よしみ

鳥根県 今若 章子

西宮市 岡本 道子

米子市 金山 夕子

米子市 白根 ふみ

吹田市 茂見よ志子

香川県 川崎ひかり

西宮市 牧瀬富喜子

鳥取県 石谷美恵子

今治市 越智 青園

香川県 高橋 たみ

鳥取市 西原 艶子

和歌山県 杉山 精子

吹田市 栗谷 春子

大阪市 藤田頂留子

孫よりも娘氣遣う雛の宵

この扉開ければ風になれますか

生姜湯を吹いて今日より若返る

引立てる若さはないが黒が好き

朝夕の触れる風にも弥陀の声

バーゲンにつられて買った妻の愚痴

結び目をゆるめて許す気になった

真心がお金に化ける寒い街

逢いたいと思えば一途冬銀河

見つめれば見つめかえて咲く椿

そら耳に鴉のおせい啼いている

亀の子たわし味方に元気良い主婦で

出合いから忘れられない人となり

覚め際に見た夢一日反芻し

寡婦となりゼロから歩む道に立つ

選も三度目となり、ゆとりを持って投句と向き合えるようになる

とともに、この二頁というスペースがうらめしくなってきた。

沢山投句いただくうれしさは、入選率の厳しさと反比例する。

どうか没になっても、その月の入選句と自分の句を比較し、

次回への糧として欲しいと願っている。一句目―折から阪神大

震災のあとだけに、強いインパクトがあった。人の世の常が軽

妙に詠んである。二句目―若さを保つ秘訣である異性への興味

が、かばんをのぞく。に凝縮されている。三句目―風呂敷がよ

く効いていて楽しい。四句目―毎日を大切に生きなければと、

いささかの自戒をこめて上位に頂戴した。

西宮市 奥田みつ子

香川県 山崎はつ恵

姫路市 福島 姫女

西宮市 秋元 てる

弘前市 一戸 ツネ

和歌山県 藤井 春子

鳥取県 小西五十鈴

大阪市 稲本 凡子

堺市 黒田 真砂

和歌山市 和田美寿子

和歌山市 野々 圭子

柏市 上鈴木春枝

岡山県 富坂 志重

枚方市 森本 節子

米子市 永井三津子

鳩

石倉美佐子選



山鳩が覗きこんでる分教場
悪女にも女人高野の鳩やさし
馴れすぎて伴せ忘れた鳩がいる
ポケットに鳩を飼つてゐる割烹着
鳩よりも早起きをして嫌われる
鳩のいる景にやすらぐ風の底
食あさる野鳩 野性に立ちかえる
餌売つて鳩に食わせて貰つてゐる
五十年平和ほけした鳩が増え
パン屑に倦いて緑を探す鳩
鳩笛が郷愁そそる花いちもんめ
鳩の目の丸さ信用してしまふ
公園の鳩が聞いている嫁の愚痴
クツクツと鳩も言いたい事もある
ブーケ持つ花嫁祝す鳩百羽
傷ついた鳩に情けが通じない
鳩一羽原爆塔からはなれない
開会に鳩の編隊盛り上げる
雪国の雪になじんだ鳩時計
王候の城に鳩舎の虚栄心
バラの花くわえた鳩が戻らない
任務終えて胸を張る伝書鳩

佳雲 勇太 なた子 ちかし 可住 あずき 倫子 不二 俊路 英壬子 圭美 希久子 鉄治 高代 満江 たつみ 俊子 東雲 京子 花匠 帆雀 雅城

野の果てで鳩は仮面を脱ぎすてゐる
九条に触れると鳩が騒ぎだす
マジシャンと夜汽車に揺れる白い鳩
ぼんやりと充電中の夫婦鳩
飽食の鳩が苦しむタイエツト
鳩ポッポ歌つたおかげで場を凌ぎ
賽銭を覗いた鳩を追い払う
三枝の礼鳩もうそぶく次元の差
鳩を飼ひ自閉の殻を抜け出す子
寺の鳩どんな人にも気を許し
温かい腕に抱かれた手負い鳩
地球の裏へ鳩よ平和の使者となれ
宴会がめつきり減つた伝書鳩
目をつぶる勇気を鳩に教えよう
正月も終わり鳩にも静かな日

みさを 清史 隆 めぐみ 章久 忠雄 正雄 多賀子 時弘 しげお 洋 寿恵子 富喜子 雄々 日枝子 あずま 舞鳥影 高夫 正雄 美代子 螢 保州 吉村さち子

鳩が焼けてますよと換気扇
口臭が邪魔するけれどなつかしい
これしきのメモに文才匂わせて
ふるさとの海の匂の貝ボタン
コーヒーの匂に負けた万歩計
冷蔵庫期限切れてる嗅いでみる
玄関でパンザイをするカレーの日
香水を振つて来るなと言う男
みぞおちに男の匂溜めて生き
好きですという告白は火の匂
火が匂う男のいくさ身構える
押入へ男の匂つめて寮
行間にほのかに匂う愛がある
思いがけなく君の匂にぶつかった
青雲が匂うマントに朴鹵下駄
老母と酌む母の匂の自在鉤
母の手の匂忘れた事はない
懸命に生きる母から香が匂う
かあさんの匂はしない哺乳瓶
幸せの匂溢れる母の乳
過疎もよし柚子湯が匂うしまい風呂
そこはかと匂うあなたにいてほしい

句

う

石尾かつ乃選



満秋 とよ子 杜的 ミツ子 彩史 和枝 保州 雄々 佳雲 葉香 宵明 たず子 夕子 あずま 源一 ちかし 次男 隆 黙光 可住 圭一郎

りんご一つ車に入れて冬の旅
ライラック冷たい嘘を匂わせる
陽と草の匂をつけて辺地の子
移り香を抱いて生き抜く白い闇
すきやきの匂う寒入りだという日
これからのローンを思う木の匂
うつむいて匂うすみれがいじらしい
担任の匂が変る新学期
樟脳が匂う服着て何処へやら
新品の靴には靴の匂する
沈丁花匂う庭から春を見る
娘を送り出せば木犀匂う夜
子の匂家に残して飛んで行く
墨の香が匂い立つほどうまい文字
たこ焼きが匂う大阪っていいな

佳

硝煙の匂が消えぬ世界地図
母さんが匂う安心して眠る
人間の匂持ち続けていこう
頂上の匂火繩に違いない
大山の雪に男が匂い出す

人

禁断の実で紫の匂う人
病む母と同じ匂で看護する

天

匂い立つ春へ芽吹いてくる音譜

軸

被災して家族が匂う地へ帰り

山田 高夫

みつこ
愛論
時弘
寿恵子
とみ子
典子
清美
久仁於
螢
一壺
一齋
あやめ
艶子
露児

鉄治
重人
日枝子
芳郎
俊路
京子
シマ子

柔らかい

福本英子選



起きなさいと啓蟄の風柔らかい
柔らかな里の詠りに会いに行く
柔らかい胸でつぶてを受けている
柔らかに言うつもりが大波紋
柔らかい言葉で妥協するつもり
柔らかさの中にけじめはきつい母
柔肌にふれて心を盗まれる
柔らかい風が決意の袖を引く
柔らかな土に記念樹植えておく
やわらかく受けて応える京おんな
母さんの縫った糸目が柔らかい
産院で出来たての孫そっと抱く
赤ちゃんの頬つべをちよいと突いてみる
柔らかい餅を背負って初節句
やんわりと言って急所を外さない
元旦は餅も親父も柔らかい
定年が近い柔和な人当り
柔らかい話になって場が弾み
花芽抱く木々へ冬陽が柔らかい
柔らかくなつて佗しい古希の坂
煮こりがほどよく溶けてゆく地酒
柔らかな言葉によわい落ち目の日

富喜子
佳雲
公子
あやめ
和重
白光子
俊路
めぐみ
かおる
愛論
狸村
強一
舞鳥影
忠雄
芳郎
黎之助
新造
克治
達光
黙光
保州
玉恵

柔らかい物差し持つて世を渡る
柔らかな道で時々怪我をする
柔らかい嫁の手 爪が気に入らぬ
木漏れ日がベンチの二人包み込む
柔らかくなつたお札にあるドラマ
柔らかい花芯に触れる蝶一羽
柔らかな手だったさよならの握手
柔らかい土だ先祖の音がする
すこし詠ってほどほどの柔らかさ
なの人に聖書の声は柔らかい
物腰が柔らかな過ぎるのが怖い
年輪を重ねた皺が柔らかい
柔らかに結んで解けぬ絆持つ
ペットにはとても柔らかい妻だ
柔らかな新芽を守る虫めがね

佳

柔らかい風に哀しみ干してみる
柔らかい手をして苦勞まだ知らず
柔らかい言葉で鬼が攻めて来る
柔らかくなつた夫に気をつける
肩の荷をおろせば風が柔らかい

人

許す気になつて母の柔和な目
柔らかな手になり職が見つからぬ

天

立て前は固い堅いで通してる

軸

小池しげお

みさを
ちかし
典子
晴子
四郎
高夫
美代子
寿恵子
螢
京子
三男
満秋
希久子
可住
英千子

日枝子
抜智
杜的
シマ子
よしみ
鉄治
帆雀

初歩教室

題一雪

吉岡美房

消えるから雪は剝那を淨く舞い

この句は昭和四十三年度の川柳塔賞を受賞された高杉鬼遊氏の句ですが、雪という題ですぐにこの句を思い出しました。句には品格というものが必要であると感じております。それでは添削句から発表します。

雪見酒という口実で二次会 淳子

(二次会は場所を移した雪見酒) 旭

(酒を酌む雪が主役となる集い) 静子

(豪雪の恐さを知らぬ雪見酒)

(豪雪の苦労を知らぬ雪見酒) 君江

(老妻の酌も又よし雪しきり)

(雪降る日子等着ぶくれてカラフルに 瑠美子

(カラフルなコートで雪の通学路)

(ゴム長の雪掻き散らす通学路) 幸枝

(登校の長靴雪を蹴って行く)

遠路くる孫は真つ先雪の方 美恵子

(孫はしゃぐ父の故郷は深い雪)

とか雪で児よりも親がはしゃぎる 俊一

(雪降って子よりも親がはしゃいでる)

雪の日の話昔のことばかり ミツ子

(雪の夜は祖父の話聞かされる)

過疎の地に追討ちかける雪が降る 宏章

(豪雪が過疎に追い討ちかけて来る)

冠雪に父眠る墓寒々と 克治

(冠雪を払って参る父の墓)

深しんと雪降る里に老母独り 志華子

(独り住む母へ風雪注意報)

一人居の母しのぼる雪便り 高栄

(雪の夜は北の故郷の母想う)

降れよ降れ好きだ好きだよ雪化粧 孝原

(雪よ降れ大と一緒にとび起さる)

美しいとはかり思つた雪見バス とし子

(驚声と喚声あがる雪見バス)

雪景色描きたく降るを待つわたし 姫女

(雪を待つ心に画く銀世界)

うす雪に庭の雀が絵に見える 志重

(雀来て墨絵のような雪の庭)

雪のない土地に住みますまだ見えず たみ

(雪のない土地に住み慣れ雪を恋う)

雪女吹雪の夜は戸を叩く 侑里

(吹雪く夜に戸を叩くのは雪女)

雪女溶かして見せんと胸の内

(情熱で溶かせて見せる雪女)

職決まり次は雪山血がたぎり 一乗

(就職も決まり雪山呼んでいり)

雪の日に孫と童話の雪女 日出子

(現代つ子孫は信じぬ雪女)

雪見酒友もいいなあ妻もい 鶯爺

(友もよし妻も又よし雪見酒)

春浅く浅雪消えて落の臺 ミツオ

(雪の下耳をすませば春の音)

人は皆雪の朝は何思ふ 美寿子

(雪の朝人それぞれにある想い)

置き忘れ小雪ちらちら亡妻の傘 隆

(粉雪舞う亡妻の忘れて行つた傘)

雪ダルマ目玉に苦勞電化品 一典

(電化して目玉に困る雪だるま)

細雪に街角で待つ雪だるま 幸夫

(町内の雪を集めた大だるま)

猛吹雪亡姉葬る日の事を (由)正子

(吹雪く夜は亡き姉のこと父母の事)

白い闇しんしん積る雪の音 ますみ

(寝はぐれてしんしん雪の積る音)

雪踏んで新聞配り朝を行く 芳水

(新聞を配る気配は雪の中)

程々の雪が積って風情あり 一壺

(程々の雪でうれしくなる風情)

雪の降る音が静かに迷い消す

孝原

(雪の音聞いて迷いが消えて行く)

木枯しが吹いて雪舞う空の色

ふみえ

(独り寝て外は吹雪になるらしい)

竹の葉が頭を垂れる春の雪

ふゆ子

(融けて行く雪を一気に撥ねた竹)

夢叶いおとぎの世界雪まつり

よしみ

(雪まつりおとぎの国に迷い込む)

来年も約束をした雪祭

(園)弘子

(来年は二人で来たい雪まつり)

雪国と想う辞令へ身構える

春枝

(雪国へ転勤辞令身構える)

雪道をアヒルとカモで助け合い

タミ

(雪道であひるのような歩を拾う)

白い雪ラッシュで黒く踏み消され

辰男

(初雪の朝のラッシュが載るニュース)

雪が降る蟹がおいしいお湯の街

トミエ

(雪降って蟹のおいしい旅にする)

ボタン雪蛇の目が似合う下駄のあと

鐘造

(しみじみと雪の京都に見た蛇の目)

舞う雪も狂えば激し人をのむ

りつえ

(舞う雪も牙むく貌を秘めている)

雪乗せた車がホットひと休み

しのぶ

(雪乗せた車をやとと休ませる)

雪こんこ唄った頃が懐しい

ふさ子

地蔵さま誰を待つやら雪被る

ツネ

(温顔の変らず地蔵雪被る)

雪やコンコン老いたりし内の犬

(因)静子

(雪こんこ我が家の犬も老いにけり)

ちらちらと舞う雪の中露天風呂

文子

(露天風呂わたし一人に雪が舞う)

抱かれたくて雪の夜道でよろけま

冬蛇

(逢いたくて雪の夜道をよろけつつ)

雪の白心の汚点拭われる

八重子

(降る雪に心の染みが拭われる)

二人旅雪にも焼かれ汽車止る

(伸)弘子

(二人旅妬いたか雪が列車止め)

逢うて来た余熱の頬にばたん雪

強一

(逢うて来たばかりを醒ますばたん雪)

雪道に慣れぬ南国ドライバー

義男

(麻痺させた都市の積雪数センチ)

雪なれど文化都市をマヒさせる

真一

(大都市のもろさを雪に教えられ)

新雪も消えて流れる永田町

黎之助

(新雪の消えてぬかるむ永田町)

着想・表現ともに立派な句

振り袖を庇って雪の初詣

(園)幸子

姉独り賀状に添えた雪見舞い

方子

お茶飲んで雪の風情を分かち合う

彩子

ふるさとの雪は心に染みて融け

玲子

雪山の怖さ忘れた日の誤算

敏子

眼が覚めて外は幽かな雪の音

忠男

皆泣いた南の島の雪舞台

霧爺

積ること知らず南紀に雪が舞う

さち子

この足で雪山踏んだ自負がある

義子

ひとひらの雪が思い出なぞらせる

碧

この雪を融かす想いで夫を待つ

三重

新雪に恋の通い路見つけれ

太郎

子のピアノ子犬のワルツ雪が舞う

三重子

雪の日は赤い服着て出掛けよう

照

お清めをしたい都会に雪がない

勝巳

雪の夜は逢いたい人に電話する

美羽

裸木に雪は情けを着せかける

キヨエ

掌に触れて命の尽きた細雪

嘉寿子

春の雪それははかない恋でした

(今)章子

待ちぼうけいつしか雨が雪となり

(備)章子

雪の下蛙の眠り深くなる

笑

雪しんしん老母には遠い絵が見える

絢子

消え急ぐ雪に命の序曲聞く

めぐみ

私の句

おつかいを褒めて粉雪払ろてやる

祈るため神に吹雪の夜を貰う

◇

題「花」

3月15日締切(5月号発表)

宛先

3月15日締切分から原稿は本社事務所にお送りください。

編輯部

一路報

千麻夏清淑比汎
里代喜水子呂美
 勲
美佐雄
蝸牛
節夫
栄恵
喜美子
静風
喜久恵
静佳
蘭幸
中千枝
中史子

靖子報

臣貞子一宏枝笑居菁路
純子とよ恵美とみつや素水ヒサ和重市三靖子
武子明美歌義幸枝野草
營報

孝男 喜与志 喜み子 小 幸代 艷子 瑞枝 睦枝 日枝子 智恵子 久枝 かつみ 秋女 菊乃 弘子 孔美子 秀峰 実満 石花菜 諷人 盛桜 富久江 和子 くに子 節子 荒介 三千代 八重子 富恵

— 87 —

子の試験親も試験で祈る朝
ポケットに母の祈りが入れてある
千羽鶴一羽一羽に祈り込め

川柳塔唐津支部 久保 正剣報

美々 鹿太 勇次郎

バイトの子配り終えたか一服し
秋の風待ってたように旅に出る

息子等の帰省の世話がまだ出来る
鴨は肉鳩は平和ときめつける

石地蔵赤い頭巾がずれている
平凡が最高の幸老いて知り

交差点猪突猛進黄信号
カンガルーパーカン猫の年の暮れ

客間への出番を孫は知っている
ボナスに見えない羽根がついていた

大臣の違反子供が届け出る
絵のような暮れにしたいと案を練る

勘どころ掴んで客を笑わせる
老い仲間来年一杯旅を決め

目の奥の澄んで一芸ゆたかなり
弁慶の腰を泣かせる子の無心

柔らかな雨が木の芽に春を告げ
印籠を同じパターンで見る疲れ

はびきの市川川柳会 榎本 吐来報

久仁於 晴子 正剣

失敗を少し繕い披露する
一期一会今年もたんとありました

一人身の誰待つとも厚化粧
盛り上がる健忘症の忘年会

治代 悦子 泰子

りつえ

山茶花の夏涸れに耐え咲き揃う
咲き惜しみしたか美人のわび住まい
素直には好意受けずに一理届
書き初めにまた遺言を書き替える

敬老のおまけと知らぬ鐘三つ
雑念を撞木に込めた鐘をつく

戦争に行つたまんまの寺の鐘
借金と義理をすませて除夜の鐘

鐘三つ鳴ってじいさん歯を落とす
風音もノックと思う待つ女

木枯しがやけた背中をノックする
二人だけわかれたノックにあるリズム

ノックは無用 心の窓は開けてある
陽溜りにそとノックは春の風

ノックする仲直りのみかん二つ持ち
悩む子にノック無用の保健室

空き缶がひとつベンチでくしゃみする
空っぽの頭を乗せた終電車

大ばらを吹いた男の空手形
裸婦像を飽きず見ているベレー帽

生きるのに飽きたと小五が書き遺す
飽きません母の手料理古にのる

偏差値が無情に摘んだ希望の芽
ささやかな希望を溶いている絵皿

食欲が出て病窓のいい眺め
五十坂重い希望を持ち続け

八尾市川川柳会 宮崎シマ子報

志洋 洞庵 六子 扶美代 一屯 与呂志 夏秋 利武 一壺 聡 金太 吐来 敏 晋 一貫 えみこ

食欲が出て病窓のいい眺め
五十坂重い希望を持ち続け

ナツメロへ逆さにまわる走馬灯

度

度

誰からともなく歌い出す通夜の席
酔えばまた老母のまるい子守唄
礼状の過大評価をまに受ける
婚礼の半年あとに子が生まれる

本音みな袋に入れて持ち歩く
無帽でもアメリカ式の拳手の礼

巡礼の鈴が四国を春めかせ
礼に礼返るはがきがあたたかい

見栄八分本音の二分が見えかくれ
冷えきったおでんと聞いている本音

落ちるとこまで落ちて本音で立ち上る
母の目に会つと本音がうつろたえる

姑と住む本音を凍らせないように
深くしずかに華やぐ母のバースデー

華やいだ宴バートの光る汗
華やかな女の過去に嘘がある

一本の薔薇に空気が甘くなる
石段をのぼると野心消えていた

野火のよに広がる野心もて余し
ああ哀し野心を抱いて呆けはじめ

くすぶりの野心夕陽がかきたてる
一粒の柿の種にもある野心

川柳塔きやらばく 政岡日枝子報

朝顔が垣根一杯咲ききそつ
手帳にし我が宝物持ち回る

夫には内緒こつそり手帳をのぞく
アリバイになった手帳が生き返る

脳味噌を手帳がわりにした頃も

のり子 紫布 保子 恵子 花子

夕花 柳伸 柳子 春子

春子

春子

老化防止みんな手帳にはしり書き
 プロフィール手帳に書いて抱いている
 すり切れた手帳の重さ手放せぬ
 手帳には汗はかかぬときめいている
 おしまいの頁に一行ありがとう
 赤い表紙のアンテナを持つ手帳
 古い手帳にしばし時間を盗まれる
 B型がまだ生きている古手帳
 見られたくないから手帳持ち歩く
 嘘も方便立派なことをかく手帳
 手帳から父の進軍ラッパ鳴る
 ハローペーシの海で迷っている手帳
 日は西に手帳に追つかけている
 手帳ひらけば今も火種がこぼれる
 何時からか手帳に握られていた急所
 目に見えぬ垣根があつて気が重い

南大阪川柳会

金井

文秋報

品子 美月 春枝 千春 天雀 玲子 ゆき 富美子 朗子 瑞枝 すみえ 千代 荒介 八重子

複雑な器具にとまどい齢を知る
 贗札へ騒ぐスリルに酔う悪魔
 無力になって丁寧に靴みがく
 盃を持つと無力もしんとする
 複雑な事情あるらし嫁の愚痴
 うかつにも両隣には地獄耳
 宝石の類似質屋も騙される
 うかつかと洩らした口が罪作る
 うかつな事いっただばかりに友がもめ
 人に逆らわぬ無力な母の処世術
 酒豪とは知らず迂闊に酌みかわす
 込み入った事情で遺産庫に浮き
 金の要る話へ逃けている無力
 切り札を頑と押さえているゆとり
 うやむやにされて黙っている無念
 大物のゆとり葉巻をくゆらせる
 心まで許したくない類似品
 ゆとりある生活がしたい労働歌

はたる川柳同好会

井上

真次報

咲子 凡子 千里 宗悟 勝美 信博 東雲 志華子 頂留子 真砂 悟郎 公一 文江 三男 トミ子 柳伸 シメ子 智久

マイプラン残り時間を視野に入れ
 机上討論プラン中に蹲る
 生涯のプランは消えて霧の中
 一生のプランに川柳入れておく
 母ちゃんの外国旅行プランだけ
 子に説教酔った機会に言っておく
 酔いの芸扶養家族に見せられぬ
 玉砂利にはほろ酔いの足とらわれる
 ばあちゃんに猪鹿蝶の札に酔う
 ほどこにみんな酔わせるママ上手
 妻に似たホステスが居て酔いが覚め
 軽く酔う軽口の出る夫婦仲
 酔い覚めてあれは現か幻か
 酔い止めも七つ道具のバスの旅
 ちどりの足玄関まではたどりつく

川柳岩出

小倉

アサ報

純次 一笛 竹二 紫水 眞郎 明光 直次 馬郎 方郎 祥風 正安 昭史 桂子 幸子 保子 昌子 春子 智恵子 正直 愛子 紳一 神一郎 悦男 重徳 正義

街角で師走彩る鉢を買う
 霜やけのもみじの手出し乳さがす
 人の道歩んで神のふところに
 余命表延ばして神の掌に縋る
 年の暮れ女やたらと忙しい
 一年の区切りをつけてノート閉じ
 神様に都合があつて伸びる髪
 霜ふりの毛染め女房若く見せ
 神棚に祀りハズレる宝くじ
 孫たちも無口になった神の前
 七福神巡る一人は山の神
 新区割師が走りまです秘書も飛ぶ

福笑い諸天の神に感謝をし
 天地人みんな生かせる愛の神
 信心は神と仏を使い分け
 ひと時も師走の主婦に無駄がない
 節穴でない神様に見守られ
 神算で老母を優しく包みこむ
 子に譲り師走の風の外にいる
 人生に私の神を住まわせる

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

人生の岐路を背負うた重い絵馬
 若い気で仕切り直して出るファイト
 親と子の理想が合わぬ目の高さ
 初産へ母に教わる返し縫い
 若い芽を育て静かに去っていく
 若いから老いに合せている歩幅
 カラオケのマイクを持って若返り
 翔ぶ若さあしたへ炎えている命
 雀百まで生きている限り理想追っ
 現実と理想のギャップ大きすぎ
 美しい理想を蕾からもうろう
 現実と平行線にある理想
 ランドセル重い頃から理想追い
 周波数合わぬ親子の理想像
 理想には遠いがうまいにぎり飯
 絵馬堂でまだ生きている忠と孝
 お札詣りも来でない絵馬が揺れつづけ
 絵馬吊るし桜咲くのを待つてます
 僕の絵馬神の答えを待つています

ふみえ 英子 千鶴子 綾子 和子 精子 忠雄 与呂志

千寿子 和子 君枝 精子 淳太郎 吞天 正博 寿子 三男 武春 佐代子 紀久子 誠子 紀美女 稚代 紫香 柳宏子 金太 和重

三幸川柳教室

三宅 保州報

どの絵馬も炎える希望に溢れてる
 絵馬堂へ雪はななめに降り急ぐ
 もう一度エール送って欲しい絵馬
 三日しかもたぬと知って初日記
 笑い袋にうつかり触れた初詣
 スランプの扉初心の手で開く
 初鏡亡母に似たなと掌をあわす
 初暦三枚剥いで貨車が出る
 てのひらをととしてひらいて初の一宇
 初物を分け合う垣根低くして
 前向きに生きて若さが溢れてる

石橋をたたいてチャンスまたにがす
 橋いくつ渡ってたどる修羅の道
 紙風船 夢のかけ橋駆けのぼる
 劇的な出会いが橋の上にある
 橋のない川を渡って来た噂
 人と人結ぶかけ橋ならなれる
 真ん中でちよつと溜め息ついた橋
 深追いはよそうつり橋ゆれてる
 開放をすれば覗き見などしない
 よそ行きの顔並ばせるフラインダー
 湧水を覗き昔の秘話を聞く
 もつ出番ないのに覗く子の舞台
 本心を覗けば鬼はまだ元氣
 子の心覗く視線を低くする
 の一つ絞って覗く射程距離
 分相応覗いた視野で我慢する

光代 めぐみ 美羽 射月芳 英子 好笑 信子 栄美子 輝子 裕美子 克子

三千子 初子 章子 朱夏 保州 百合子 桂香 めぐみ 義男 正雄 信子 靖子 公子 さち子 高夫 当代

堺川柳会

河内 月子報

半眼の弥陀に邪心を覗かれる
 飾らない言葉結び目固くする
 装飾音なくて切ない子守唄
 ラッピング上手でわたし売れました
 装飾はよそう素肌が持つ自信
 艶飾り女は少し羽目外す
 飾るもの一つはずせば向き合える
 底なしの箱に悩みは入れておく
 パラ色の箱は未だに見当らぬ
 救急箱はこり被っている平和
 名所みやげ箱と語らう二三
 美しい箱にナイフは眠らせる
 空っぽの宝宝箱をもっている
 重箱の隅で生きて冬支度

お父さんには手頃くるくる回るすし
 冬の旅心の港探さんか
 無風地帯で賞罰なをたしかめる
 迷ったら戻る古果のある港
 灰になつたらきつと優しい風になる
 両手広げ受けたと決めた冬の風
 手頃な石そこにあつたという悲劇
 北風をやり過ごしたら動こうか
 すこし赤いが値段手頃できめました
 香水が風を酔わせているらしい
 手頃な石一つ抱いて春を待つ
 並んでは歩いてくれぬ息子の背
 塾通いして風の子が遊ばない

鉄治 由梨 圭子 和子 千秀 昭枝 秀男 町子 道子 美智子 親路 満洲子 鬼遊 春蘭 美代子 泰子 美子 ダン吉 頂留子 金太 途子 狸村 紀美女 梓 照

居直った妻が並べる箇条書

卒業写真などの子も夢を抱き並ぶ
學歷がなくて手頃な妻である
あなたの嘘を一生待つてやる港
破れ鍋と手頃な縁で添い遂げる
ご近所と肩を並べぬことにする
新人が愉しい風を連れてきた
古い二人手頃なおせち料理買つ
追い越すとライバル足を引きにくる
並ねばはじき出される莢豌豆
お手頃で広くて安い家がない
おとなりの金木犀が風に乗り
あの人と並んでみたい影法師
下津井の港で蛸の話など
子等の背の手頃へ背のびさせられる
手頃だと紙めた二キロで落伍する
老母は手頃な趣味で命をつないでる

岩美川柳会

羽津川公乃報

勇太 妻時 芳水 寿美 月子 天笑 てるよ 摩耶 夏子 彰 菜々 半銭 小雪 かりん 晋 寿恵子 公乃 孝原 睦子 喜志 単車 忠良 照女 芳江 孝男

果造りの下手な女で不倫する
憧れて覗く愛の巣景色
寡夫になつたら日本海の巣に帰る
母の巣が恋しくなつて受話器取る
団欒の巣からこぼれる笑い声
反抗期娘は巣立ちする準備中
愛の巣も月日と共に色褪せる
ひとつ巣に人の好いのと悪いのと
草葉の陰で巣立つ日等待っている
わたくしを解した古巣暖める

川柳後楽吟社

從野

健一報

二幕目も通行人で出ています
ふらついて余命に気付く寂しい日
花空間無限の姿を垣間見る
くすり飲む寂寥感の枯野行く
車座で春歌を謳つ父である
健康な胃で新春の酒とろり
妥協して字余りらしい夫婦仲
コスモスの哀しい程に乱れ咲き
ちと呆けて心の温い母となり
深入りをすれば計算狂いだす
さりげないジョーク一言勘に触れ
歯の白い笑顔だけならよかったに
平凡な年でありたし初詣
自転車で森の小人に逢いにゆく
塩べくりなめて狂わぬ母の舌
飲んでないといはけていてもよく匂い
乱れてもよからう父の旅日記

幸枝 美恵子 はお しみ子 嘉津江 一京 八千代 大漁 隆風 道博 たけ志 青銅 柳五郎 拓治 哲郎 博友 幸子 桃風 吉則 邦季 美智子 玉水 草風 正秀 秋月 照路

富柳会

池 森子報

捨て切れぬしがらみ抱いて行く旅路
クリスマス過ぎてから買つ子沢山
捨て切れず風にもなれず毛糸編む
祝われたケーキシしみじみ古希の膳
ひとつ捨てひとつ拾つて春を待つ
値引きしても許せないから不眠症
捨て石になる覚悟なら出来ている
せかせかは性格ですと馬耳東風
ゴミの山知恵も一緒に捨てられる
曳きずっています捨ててに捨てられず
一切れのケーキで嫌な話聞くと
意地捨ててから世渡りが楽になり
八十に延びたせかせかしなさんな
値引きしてまだ売れ残る店ざらし
せかせかしても帰って来ない今日の悔い
忘年会積った憂さの捨て所
夕方の売り場で値引き待っている
過去捨てる事からゴール見えだした
クリスマスケーキが宙に浮く計報
値引きしたサンマ匂を嗅いでみる
クリスマスケーキを切ったことがない
せかせかと命も秒読みに入る
せかせかとしての地球を逃れたい

東大阪川柳会

森下

愛論報

魂を洗いで帰る故郷の町
銃弾が飛んで町の灯うつたえる

章久 高尚

名物はないが地酒のうまい町
 自己主張はつきりさせて煙たがれ
 白黒をはつきりさせて敵が出来
 はつきりと物言う父の土踏まず
 白黒をはつきりさせずする和解
 月末に支払うくせが直らない
 私う金あれば頭は下げに来ん
 人払いの小声にきつと悪い策
 美しい文字で届いた果たし状
 美しいつくり話に酔わされる
 女心を動かす光持つタイヤ
 クレヨンで描いても母は美しい
 美しい過去を語っている渴き
 本見つつ料理を作る新世帯
 孤独に耐えているのは六法で
 本伏せてまたうたた寝の老眼鏡

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

孤舟 隆美 勝美 信治 たもつ 太一 猪太郎 頂留子 恒明 文秋 湖風 愛論 信博 東雲 文子

きのうから買う物業も二人分
 ぬくもりの心定着させ生きる
 世渡りがうまい男の高笑い
 定着をしたら税率上げてくる
 話術一つで虎の子を手なずける
 世渡りの銭のなる木を植えておく
 世渡りの破れ草履がすり切れる
 世渡りの義理が重たい男坂
 世渡りのコツはシベリアから学び

岸和田川柳会

田中

文時報

季芳 和枝 幸子 とみお 節子 妻子 仙岳 弘朗 朝一 さと子 一弥 萬的 京 鹿太郎 通彦 ダン吉 文時 信博 二南 柳宏子 昭二 一齋 甚一 富志子 東雲

クロスワード解く能力へ悪い知らず
 能力主義いつか人間味を忘れ
 能力は五分五分どっちも単細胞
 能力が目に見えている棒グラフ

川柳高知 川竹 松風報

口だけは達者に動くクラス会
 早起きの雀へ朝が動き出す
 流水が動いて活気づく漁港
 裏方で一生終るそれよし
 人生に悔いなし今日も夕焼ける
 深ぶかと下げた頭へ二度おじぎ
 試着室 鏡のせいではありません
 自己嫌悪そんな心の貧しき日
 とまり木で相合傘になる二人
 若充も酒も先祖の罪にする
 ご先祖のとおりになれば間違わぬ
 ご先祖のたんぼ売られず作られず
 ご先祖を妻が大事にしてくれる
 名物の蕎麦も買い足す旅の帰途
 先祖から女に弱い血を貰う

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

しみじみと敗戦思う暑い日よ
 初恋の学生服もセピア色
 歳月が遠くへ流す俺の過去
 歳月に流されぬ石抱えている
 歳月を一気に戻す赤トンボ
 歳月の何時かは鬼と手をつなぐ

浪速子 白光子 勝晴 狸村 子龍 三郎 圭風 千鳥 菊野 快風 さち 春枝 千恵子 朱坊 京子 佳幸 竹萌 松風 杜的 マツエ 艶子 克治 かおり 彰一

歲月や父の背骨を蝕んで

灰皿がよこれています妻の恥

恥かいた数だけ貰った生きる術

恥かいて自分で悟れ親ごころ

まだ少し生きて赤恥かくつもり

栄光の数だけ恥がある浮き世

浅知恵の心貧しい日を恥じる

教師には追い詰められた子が見えず

脱サラで夢を追うのをやめにする

少し後れて大江の本を追っている

食欲に追うことばかり世紀末

飛行機も追って日本の父を恋う

ブラス思考ゆっくり風を追っている

すぐ追えばまだ間に合うという電話

残像を追いきれなくてパンを焼く

老人に温い政治を期待する

譲られて素直に受けるのも礼儀

元氣なのが取柄醜い妻だけど

ふるさとはいいなと思う柿がなり

ここからは母の矢印書いてない

遠回り見えないものが見えてくる

負け犬になっても正直だけ守る

心貧しく噂ばなしに乗せられる

背信の背なに二の矢が追ってくる

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

雑談の流れを愛える咳払い

こたわった分だけ狭くなる世間

もつ涸れたはずの涙が溢れだす

惠美子

樹芳子

伸子

よ志子

あきら

正坊

メ女

猿杓

萬的

道胤

太茂津

静江

澄子

茶の子

薫

東雲

庸佑

波留吉

紫香

栄

瀧小

白溪子

スミ子

諷云児

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

くに子

ひかり

初恵

年末にヘソクリはたき夢を買う

もらい風邪頭の悪さ変りなく

久びさにダムの底見た炎天下

経を読み永遠の旅路の伴をする

年金のおかげ笑顔で義理果す

同じ服着て仲良しの六地藏

亡母追うて行きたい浄土まだ遠い

宴会を一人占めする村雀

アルバムで昔むかしの夢を追う

制服の胸に眩しく芽吹くもの

いつの間に交配したか変な色

野仏をつまく使って金儲け

見上げれば空いっぱいの青い海

露天風呂幸福の顔浮いている

吊し柿健康な母の味届く

川柳塔まつえ吟社

恒松

進む世に歩幅が合わぬ古希の坂

縁談の話が進む襖ごし

私だけ残して刻は進むだけ

すぐ錆はすすむ私の蝶番

老い進む腰確かめて煤払い

進まない時計がほしい妻の留守

築地松の本音を聞いてみたくなる

頑なに紅葉にいとむ松の青

老木の松がささえに冬景色

門松の竹の心をもらいたい

外国の松茸食べて消費税

松ぼっくりも付けて床の間春の彩

よしみ

正雪

治延

マサエ

ふみ

あきら

マツエ

放任

いさむ

かおり

吟笑

迷貫

中なみ子

文仙

チカエ

登美子

房子

すみこ

雄々

清志

佳江

博子

たつみ

早苗

邦代

米子

みえ

更生の再出発を陽が祝う

雪が怖くて出発を遅らせる

戦場へ覚悟して発つ二十歳の日

出発を三面鏡に見送られ

出発を送らぬことも愛だろう

目が覚めて再出発の屋台ひく

手紙みんな焼いたある日の訳がある

或る日ふと思いい出させる思慕の人

言葉一つに或る日反省させられる

或る日午後名もない文が来た波紋

或る日ふと一人歩きの影法師

或る日また紫色に憧れる

ガキ大将膳の前ではかしこまる

膳の音今朝も元氣だなどと思う

膳を前に許す言葉を考える

雑魚同士肩の凝らない初春の膳

寒椿ひとりの膳を祝うてか

曲折もあつたと語る祝膳

久世川柳クラブ

二宗

寝所まで趣味で作った品の増え

箸紙の唄をおぼえた旅土産

残り火に油をそそぐ趣味の友

母の海怒ればこわい鬼となる

岸壁の母の涙が海にある

早合点したばかりに荷が重い

急流の早さに石も丸うなり

カラオケが中毒になりやまらない

お互いになやみを語る縄のれん

清子

蜚

茂美

静江

きみえ

与根一

午朗

静恵

桂子

友賀子

長三

日出子

畔

太泡

義良

文子

叮紅

吟平報

美恵子

メ女

秀香

甫正

吟平

志重

すみれ

光水

伊久栄

川柳クラブわたの花

片上

英一報

防風林父の腕ふところよ

水源の林に強い自負を見る

林間の小さなチャペルに立つ二人

松原に待った天女は水着なり

竹林の風一服のお茶を点て

竹林の葉すれの音にきく哀史

松林寒々として世を眺め

皆同じ思いで冬を越す林

落ち葉踏む詩人気分になる林

雑木林紙飛行機が墜落す

林道で頂いた杖浄土まで

林道は朽葉落してせいせいと

林道にりんと凍としてひとり

コンニャクと豆腐の角で頭打つ

凜然と凍土の涯の日章旗

信濃路で主婦ご自慢のこうご責め

それなりのブランを立てて老いたのし

バーゲンの値札女の目が走る

下積みをはたすら走る老いの坂

手をつなぐ雑木林をぬける風

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

木の名を忘れてからのひとり旅

しんしんと枯木を飾るばたん雪

ドングリがいつかはきつとなる大樹

童歌 子供の僕が笑つて

青春にかえり寮歌の渦に入る

シマ子
美津留
隆

友甫

暁子

君江

幸枝

しのぶ

朝子

トシエ

道子

龍

英一

明子

弘直

剛治

春子

ますみ

一風

鬼遊

半世紀 父は風呂場で兵の歌
働いた指の太さに母の自負

寮歌祭 ああ白髪のお敵

幸せなことに働く場所がある

赤ん坊の匂 束の間の平和

真つ白く洗つて幸せが匂う

大猫の匂が混じる路地の奥

寝返りを打つ 海の匂に誘われて

ころ柿に指のぬくもり透けて見え

幸せは逃げ水のごと消えて行く

かたくなな力みをほぐす福寿草

正月を写すと冬が美しい

水すまし水の深さをまだ知らぬ

福笹をたのみまかせて残り福

省略はどこもしたくはない祝辞

成人式この娘を嫁にやるものか

終で帰る暴走族の音を聞く

プライドを捨てたら消えた胃の痛み

喜びへ亡夫の拍手聞えそう

ほどほどに年賀状くるおらが春

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

あの世まで持つてゆきたい祝い酒

合格を祝う赤飯どんと盛る

披露宴父が涙の祝い船

喜寿傘寿お祝い重ねて共白髪

つつましく生きたい夫婦の祝い箸

それほどでないのに民放バカ笑い

公園のシーソー跳ねたまま暮れる

武庫坊

瀧小

万之助

庸佑

寿美子

美智子

一笛

薫

登代子

吉太郎

ただし

明光

福一

慶子

白溪子

博史

紫香

石舟

富子

きく子

向西

勇次郎

昌子

十四郎

美智子

修水

澄子

美しく咲いた我が娘の角隠し

喜寿傘寿浮世の坂を駆け登り

お見舞に愚痴も一緒に置いて行く

流水が騒いで春が近くなる

初春に髭を残して独り悦

橋いくつ渡れば春にたどりつく

美しいべが重いとむずかる子

下積み涙は美しく乾く

美しい国土やさしい妻と住む

エレベータの長さ美人とふたりだけ

川柳大阪

川端

一步報

次は喜寿目指す達者な当り年

めでたさの度合いがわかる齢となり

初詣あれもこれもと頼んどく

ほつとする雪積む宵の露天風呂

ボロを着て我が子に託す親心

女子バレーボールのように浮き沈み

不況下で家なき人に死の寒波

安らぎが欲しくて補聴器を外す

過労死へ救済のめどたたためまま

大学を出てうどん屋のタモを振る

除夜の鐘のせて心の掃除する

へソクリがひよいと出てくる大掃除

掃除機へきのうの鬱を吸い込ます

通わない心に寒波駆け回る

まんまるい背中にさせてゆく寒波

寒波来る反りの合わない上司いて

背信を投げつけている早い朝

夢之助

正治

六浦

すみ

弘治

いゝゑ

末貞一

みつ子

鹿太

紫香

雅果

たもつ

推高

かよこ

信醉

醉照

和子

希久志

美津留

司

川童

柳弘

金太

太元

我勝

青道

与呂志

好調な風に一日早すぎる

ラストまでマイク放さぬ友がいる

菊人形ラストへ菊師の汗光る

ラストにはいつもの歌で肩で組み

この曲でラストにしたい恋もある

渾身の力がラスト盛りあげる

凡人で終るラストで良しとする

山登りいつもラストを守る人

ゆつくりとラストの蟻が従いてくる

ラストまで勝負捨てない徳儀

成績はいつもラストで人気者

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

初夢や太平洋を一気呑み

文字知らぬ母が数えた一つとや

冬を病んで賀状一枚書き残す

一の糸に意地を鶴八鶴次郎

動く歩道折角だから一休み

ひとり生きてひとり宴バラを買う

金持つと宴を失くなる男

宴会の席をはずして風に逢う

窓の下の鬼もお入り宴だよ

真剣に生きた背広が吊つてある

真剣にカラの頭を掻いている

真剣に渡ろう二人だけの橋

真剣になると女はすぐ死ぬる

ノックした扉は地獄かも知れぬ

親しげに肩叩かれてからのこと

一冊の本に魂叩かれる

重人

河南子

しげお

比呂志

良花

柳昌

洛醉

美花

笑風

鉄心

一步

まさお

てる

澄子

義子

江美

よし津

透太

涼子

哲子

富喜子

しげお

鹿太

房子

みつ子

年代

いわゑ

警策がうつつに戻す背に響く

手を叩く輪のまん中において平和

もう一度叩いてみたい亡母の肩

不器用で軽口ひとつ叩けない

自意識を叩け叩けと除夜の鐘

札束で叩くと牙城すぐに落ち

叩き台へサッカークジを蹴り上げる

椿咲く八丈太鼓は威勢よく

病む友の力になれず鶴を折る

思い知る運の悪さよ宝くじ

えらそうな顔して蟹が煮えている

無くしたくない物に鈴つけている

愛の言葉が一番欲しい孤児の胸

酒代はボクに払えという家計

岬川柳会

八十田洞庵報

大男ぶつさらばうにマンガ読み

娘が母に話す姿はもう大人

大人だと言つても昨日と同じ僕

八十を過ぎて大人は遠くなり

文句だけ大人のような口をきく

縁談に娘大人の素振り見え

健康でめでたく祝うお正月

腹帯の重さをそつと打ち明ける

母になる自信ふくらむ若田帯

お正月おめでたいのは子供だけ

人ごとに言えぬ雑煮の食べた数

歯をかばいながらも雑煮三杯目

雑煮食べ一里塚をばまた越える

道胤

たず子

春蘭

諷云児

ひろ子

佳秋

修水

トミエ

香子

キク子

求芽

能子

武庫坊

正坊

みつ子

よし子

とみ

庄六

いと

悦子

安孝

慶之

晶吉

末吉

文雄

年平

良平

神仏と雑煮を分かち年新た

癒えた身に今朝の雑煮の味のよさ

おんな一人の雑煮を祝う朱い椀

雑煮箸家長の席が与えられ

川柳塔とつとり

武田 帆雀報

初売りのチラシ横目に寝正月

初売りの福袋買い運試す

初売りの声尖らして客を呼ぶ

初売りのブーツを買つて旅に出る

初売りに今年占う鍵がある

初売のおみくじ凶だ変えてくれ

初売りの声に魚もはね返る

初売りに出す猪を撃ちに行く

分校の松は知らないいいじめつ児

風雪に耐え岸壁の松の景

松根油松も昔を語りたい

健康と平和寿松飾り

松添えて正月らしい彩に盛る

松の内和服で妻が他人めく

初釜の床一本の根引き松

満月が見越の松にひっかかる

飲み慣れた酒で成人おめでどう

おめでどう言つた矢先の大惨事

喪に服す人にうっかりおめでどう

披露露胎児ときどきノックする

おめでどう今年も会えてよかったね

逢う人へ一月中はおめでどう

おめでどう一寸お腹にさわらして

正美

春江

幸庵

洞庵

帆雀報

銀嶺

崇枝

侑里

楊芝

悦子

喜与志

螢

黙光

孝原

行男

山人

一京

光子

明美

静生

喬水

和歌子

帆雀

舎人

圭一郎

孝男

輪多朗

丹田に力をこめておめでと

しげる

川柳藤井寺

高田美代子報

不得意の科目攻めてる塾の窓
上に乗得意の鼻もへしおられ
絶頂で得意の綱が揺れている
お得意がまだ見つからず日が暮れる
八十路坂のんびりしては灯が消える
今は青のんびりしてると赤になる
のんびりといかぬ師走の青い空
さあのにんびりしよと長電話に挑む
のんびりと出来ぬ総理の眉伸びる
のんびりと私の夢は歩きだす
のんびりはさせてくれない三輪車
日向は今日一日の影になり
のんびりと亀が私を追ってくる
のんびりと本屋の隅で日が沈む
のんびりを動かす十三歳の遺書
叩き上げ課長代理で生き字引き
煩惱を打ち消す木魚叩きつつ
書叩き私窓際明日は晴れ
不況風それでも日本叩かれる
姉叩く叩き返してワツと泣く
慢心を叩きのめした右フック
熱いうちに叩き直してやる火花
冬の蠅ボクにお前は叩けない
叩かれるゴキブリ訳がのみにこめず
海鳴りは神の叩いている太鼓
ホームラン打って仲間叩かれる

恒雄 三夫 和樹 昭子 キミ子 愛子 絹子 公輔 宗一 修六 扶美代 与呂志 悦子 敦子 和子 智久 三郎 トミ子 敬一 六子 美代子 一屯 正一 美房 志洋

糞穀焼く煙地を這う霜刈田
うりばうも大事にされる当り年
泣きなさい笑いなさいと海は言う
風向きによって炎となる火種

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

ひと言が足らぬばかりに誤解され
一枚の足りない皿を討ち果たす
小春日へ仔猫のうたたねゆるそうよ
あの時は足らぬづくめで生き抜いた
追肥してやらねば足らぬ顔で咲き
久し振る親子で飲む酒夜が白み
酒好きの友一人へり二人へり
紅葉やただそれだけで酒になり
にわとりは賢い水をかんで呑む
百葉の長です今日も呑んでます
バックカスにつき合います千鳥足

川柳ねやがわ

江口

居酒屋に今日の日銭が吸い込まれ
居酒屋も電話も遠くにわか雨
居酒屋のみんなここに傷がある
コップ酒人の心がみえてくる
居酒屋の看板亡父の顔に似る
居酒屋に今日未だ見えぬ顔案じ
地獄まで道連れにしてはしかった
ライバルの弱点掴む地獄耳
一分を切って勝利のボール蹴る
いいサイン胎児がおなか蹴ってるよ

春蘭 利武 映三子 治子

小路 頂留子 黎之助 とし子 光子 冬葉 庸佑 三郎 あやめ

政治家の甘い言葉は蹴っておく
蹴ってるのはどうやら女の方らしい
後足で蹴った故郷に帰れない
良縁を蹴って長男愛に生き
蹴られても意見は変えぬ父の顔
縁談を蹴ってしまえと父の酒
夫婦にもルール封書は開かない
黙認の限度を甘く見たルール
六法の隅でルールの穴見つけ
同居決まる始めにルール聞かされる
ルール守って居れば仕事を貰えない
酒やめて次のタバコが止められぬ
駅の喫茶に入る煙草吸いたくて
女神さまちよつといけずな相がある
舶来の器も同じ音で割れ
反骨に燃えた日もある冬木立
いじめられも帰らない冬の庭
気も新た雑煮の椀を買ってくる
阿弥陀様と貧乏神が住む末寺
雪化粧きれいな嘘をつくように

倉吉川柳会

谷口

次男報

振り向けば時間が急かす追ってくる
すいている時間を狙う診察券
出世あるから時間無駄にせぬ
時間がない人ほど工夫しています
あり余る時間に脳のシワが伸び
六十年無駄に時間を使い過ぎ
しあわせは時間をかけて豆を煮る

秀峰 秋女 喜美子 サカエ 節子 幸子 ゆり子

御見舞と御礼

阪神大震災により被災された皆さまに
謹んで御見舞申し上げます。特に家屋が
破壊・損傷し、水道・ガス等の不通によ
り、日常生活に支障を来した川柳塔社の
同人・誌友の方たちに、心から御見舞い
たいと存じます。

また、震災の報に全国の句会・同人な
どから本社に対し、懇篤な御見舞の便り
を頂き、さらに多くの方から救援金を寄
せられましたことに對しまして、厚く
御礼を申し上げます。

川柳塔社といたしましては、特に大き
な被害を受けた同人に対し、早急に見
舞金をお届けすることとし、皆さまか
らの救援金もこれに充当して御趣旨を生
かしたいと思ひます。

ここにその旨、御報告するとともに、
このたびの御配慮に對しまして重ねて厚
く御礼申し上げます。

川柳塔社

主幹 橘高 薫風
理事長 西田 柳宏子

残り時間エンマが知つてゐるらしい
樽の中時間たつぷり寝る洋酒
ボケベルを持つた時間の奴隷たち
明日というまだ真つ白な時がある
木枯らしが僕を酒場へ連れ出した
一人居の私の時間あげましょか
人間の皮をかぶつて私と言う
わたくしも天皇陛下もコメの飯
すぐばれる嘘もじつくりきいてやる
ふるさとにとつても温い城がある
じつくりとテレビが見せる生地獄
私に何ができるか聞いてみる
一時間かけたおかげで厄払い
五分でも待てばいらぬ私
自分のために地球を回す人ばかり
いじめつ子反省僕が悪かつた
じつくりと的を見つめて矢を放つ
城もたぬ次男がこいと言つてくる
追悼文へ時間をかけて綺麗ごと
いつも寂しいボクの残高明細書
じつくりと夢を描いて寝てしまふ

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

天雀 和枝 石花菜 柳風 美由紀 苦句 次男 御前 かつみ 寿朗 螢 康子 智子 康子 小生 独歩 玲子 雄々 日枝子 秋人 澄子 芳子 福一 武庫坊 いわゑ

煩惱がかすかに揺れて眠くなる
銀杏散るかすかな秋の訣れきわ
冬の野にことばの疵のかすかに残る
人生マラソン走り続ける運と根
運のええ自分やつたと言えませう
半分は内助の功がにぎる運
踊ろうよ運がこちらを向くように
衰えを見せない父の女運
運命と思ふ飯茶碗が一つ
ひたすらに生きた女のうす化粧
早朝に茜雲みるよい予感
少年の胸中の絵が翔びたがる
寒する窓を見ている竹人形
是非もなし父の遺した銀握る
美容院で話ぼろぼろこぼれだす
老いてなおセピア色した夢を追つ
癖のある年賀状きて友達者
ねえ貴方猫なで声でゴミ渡す
駅頭のなまりが温い迎え旗
コロコロのししの絵もあり置こたつ
ふる里は水も空気も透き通る
深い眠りの中で君と渡った橋がある
価格破壊もつ驚かぬ五割引
人妻の眼変つてきた怖さ

風云児 年代 薫 まさお キク子 石舟 昌子 鹿太 正坊 正治 夢之助 萬的 正一 ハツエ 千恵 伊三郎 智栄子 真柳 修水 すみ 義芳 紫香 渉

川柳展望二十周年大会 4月20日に開催を
予定していた同大会は、阪神大震災のため、
開催できなくなった旨、川柳展望事務局から
連絡がありました。

平成七年

新年おめでとう会

1月15日・大成閣

恒例の新年おめでとう会が一月十五日午後一時から七十四名の参加で開かれた。今年は風邪の大流行と山陰方面の大雪のため、参加予定を取り消された方が多く、恒松町紅氏ら鳥取・島根組ら十数名は約一時間遅れて会場に到着するという有様であった。

会は川島諷云児氏の司会で開会、初めに橘高薫風主幹があいさつ、今年は地方の同人とより以上に密接な交流を行いたいと語った。

次いで早朝から猛吹雪をついて参加した東野大八氏は、『新内閣』がスタートしたことに祝意を表するとともに、昨年出版した『没法子北京』の普及についての謝意を述べた。

披露は午後一時半から開始、三宅保州氏と新家完司氏が入選句を発表した後、祝宴に入った。各テーブルで交歓風景がくり広げられる中でカラオケがセツトされ、自慢のどが披露されたが、中でも河内天笑氏の「ハワイ航路」の歌に乗って踊る小林トメ子さんに大きな拍手が湧いた。

猪

三宅保州選

猪の絵も句もつまい年賀状
振り向かぬ若き猪年の年賀状
干支はびりだが僕の闘志は世界一
瓜ん坊に期待している新世紀
中国の干支で猪 豚になり

いのししの勢い借りることにする
いのしがすくなくなつたおらが里
猪も一役になつ村おこし
猪突猛进そんなお人に賭けてみる
不景気で絵馬の猪二頭だて
猪にも袖引く雌がおりまする

勘平どのは彼岸でつつくばたん鍋
丸ごとの猪をささやま売っている
猪はもつしんどいな亀でいこ
猪が来た死んでるふりをしてやろう
保険証持つ猪街に出る

今にして猪ほどの子がおかしい
勲章にしたいのししの向こう傷
もうつけ口逃したことのない猪首
戦力になる猪が友に居る

猪になつて不況をひた走る
帰ろうか猪の住むふるさとへ
瓜ん坊抱いてあやしたこともある
猪がやさしい顔で山車を曳き
食いつめた猪が出る肥えた街
太つ腹山よりでかいししは出ん
振り袖の猪 街を春にする

由多香

美房

武庫坊

美房

トメ子

森子

天笑

いわゑ

洋敏

トメ子

吐来

義子

紫香

照香

れいじ

智子

しげお

楓楽

美津留

月子

千枝子

艶子

千梢

金太

隆

白溪子

曲がること知らぬ男のはたん鍋
小心な猪で乳房を恋しがり
猪も老いて戦は語らない
わけありのお方とつくボタン鍋
屠蘇くめば猪の牙じやまになり

猪の年ものしし撃ち捕られ
へそ曲がりの猪で座禪を組んでいる
ただ急ぐだけでは猪もたかが知れ
猪除けの柵朽ちて行く風の中
猪の肉を食べたら子が出来た

憶病な猪でいつでも牙をむく
猪突猛进人間さまのセリフです
真直ぐに進まな猪に笑われる
猪も寄り道したいときがある

天
地
人
軸

光る

新家完司選

本棚の背文字が光る川柳塔
年男ですわと光当てられる
七転びやつと光が見えてきた
悪役が光って舞台引き締まる
風光る饒舌を聞くイヤリング
稲光 鬼を百匹束にする
ピカピカの林檎が少し媚びている
夜になると都会の空がよく光る

金太

稚代

武庫坊

千梢

完司

朱夏

緑良

完司

月子

朱夏

吐来

三男

保州

吸江

保州

由多香

与根一

多賀子

しげお

智子

紫香

捨て石の中にも光る石がある
陽だまりの子等は光の玉となる
遺産分け光るものだけかくしとく
銀嶺が光り搜索まだ続き
光るものみんははずして鏡見る
波光る宮城道雄を恋うように
大吉のみくじに顔がよく光る
片隅に光をあてて温い記事
あの人が来ると空気が光り出す
わたくしの今を光らすナイフ研ぐ
大器晩成そろそろ光ってくる頃だ
少年の拳の中に光る物
この辺という退きざわを光らせる
初雪と朝の光を手のひらに
台所ピカピカにして日を終い
残雪が光る素足の修行僧
台所では姑の目がよく光る
ファミコンへ向かうと子らの目が光る
受胎告知あの日妻は光ってた
今日も光った父の星母の星
一徹の古木に光るものがある
友だちが光って私が暗い
光るものいっぱいつけて淋しがり
トンネルの小さい光に春が見え

住

保 柳 美 房 千 笑 天 笑 美 智 子 楓 楽 武 庫 坊 射 月 芳 みつ 子 寿 美 柳 宏 子 千 寿 子 美 房 君 子 千 枝 子 稚 代 二 南 由 多 香 い わ ゑ 金 太 は つ 絵 文 子 朱 夏 一 風 哲 子 諷 云 児 弥 生 洋 敏

贗物を光らせている骨董屋
人 再出発 太平洋の波光る
鬼 遊 月 子 みつ 子

堀口塊人さんの の句碑拝観記

東 野 大 八

川柳塔の新内閣構成への挨拶を兼ね、拙著出版に際し大層なご支援を頂いたことへの謝意も合わせて、一月十五日の川柳塔おめでとう会に出席。久方ぶりに本誌同人各位とも交歓できて、楽しい一日を過した。

その会後、橋高新主幹に西田柳宏子、田中正防両氏の三氏のご案内で、建立されたばかりの阿部野神社境内の故堀口塊人さんの句碑参拝に出かけた。

四国産のグリーン石のこじんまりした碑石の、蒼い水流さながらの肌に影られている

来年へ流れる水を見てゐたり 塊人

の句碑を拝み、よりかきその肌もなでた。

在りし日の塊人さんの、飄々とした面影が昨日のように甦り、熱いものが胸中にこみあげ、素然無量の一刻であった。

塊人さん晩年の頃は、三日に一度私へ句入りハガキが、あたたかい毛筆で届いた。

天 春有情いのちキラキラして遊ぶ 森 子
軸 軸 軸 完 司
（清記―高須賀金太）

隻手音声貧僧一人除夜の鐘 塊人

が数十通の最後の袂別の一句となった。
（56年1月年賀状）

日川協設立に東奔西走する中で、創立する日川協の運営に夢を托した数通の古文書を、時に目を通してみると、案に相違した現日川協の在り方に、素然たる感慨をいつも覚える小生である。

冷たい青い真新しい塊人句碑にふれて、改めてそのことに思い及ぶと、もはや言葉もないのである。それだけにひとしお、この句碑の句のころこそ千万無量であった。

塊人がこよなく信頼した故大井正夫も、今はすでに明石の句碑に変わっている今、このご両所の追憶には、もはやすべてが雲遠万里である。

この句碑建立に、故人の位牌を持たれて参加された富未亡人の姿も想い重ねて、ただ黙然たる思い、それは墓前の風のように思われた。この意味で、今回の上阪、塊人句碑詣りは深い意味を持った。

ご案内の労をとられたお三方に、心からなる謝意を表したい。

本社 二月句会

二月六日(月)午後五時半

メンブファツションセンター

阪神大震災から三週間が過ぎた六日、七十二名というやや少ない参加ではあったが、二月句会が開催された。同人・誌友の中には被災者もあり、受付に義援金箱が置かれ、川柳仲間の助け合いの気持がここに集められた。おはなしは、河内天笑氏。初代川柳塔わかやまを主宰された垂井葵水さんの句の鑑賞がテーマ。酒好きで俳句・川柳・音楽に多才な葵水さんが、清水白柳師のすすめで川柳わかやまを創始されたこと、柳歴七年で五千句の入選を果たされたこと、五十二歳で交通事故故死される少し前に一緒にしご酒を飲んだ思い出など、プリントされた五十句の紹介とともに話され、八月の三百号記念大会川柳塔わかやまをよろしくと締めくくられた。

初出席は伊集院良氏。

月間賞は板尾岳人氏(堺市)に輝く。

(司会)天笑(記名)ダン吉・月子

(受付)欣史子・シマ子・一風

席題「震災」 天正千梢選

震災後不安がよぎる失語症
被災地に温もり運ぶにぎりめし
国境を越えて愛の手飛んでくる
激震は神の怒りと受け止める
生き地獄瓦礫の下に聞く悲鳴
大震災余波はいつまで続くやら
震災地やはり若さが物を言う
震度7手抜き工事ばれている
人類へ警告 神が地を揺する
震災の夜から子猫おびえる
海越しに見える被災の火が悲し
被災地へボランティアの髭が伸び
この際だへそくりはたき義援金
震災の後の解説なら出来る
満月に廃虚の街が悲しすぎ
震災後九官鳥は無口なり
余震にもなれて喉元過ぎてゆく
ガンバレと握手と手話で両陛下
震災で人の無力を知っただけ
震災の地で美しい助け合い
人情が集まる被災地のドラマ
震災のその後びくびくして暮す
気がつけば枕しかり抱いていた
チャリティーへ貧者の一灯雪しきり
人情の温みを知った震度7
予告ない震災だから恐ろしい
一杯の水に生かされてたのだな

親路 狸村 朱夏 楓云児 勝美 正坊 千秀 文秋 稚代 洞庵 小路 完司 美智子 岳人 隆 良 射月芳 美代子 射月芳 希久子 千歩 吐来 紫香 ダン吉

義援金でできる幸せありがとう
ご近所と付き合い出した震災後
あれ以来リユック置いてる枕もと
瓦礫の下もつすぐ春の花が咲く
震災へハイテク弱さ曝けだし
佳
現実のまさか阪神大震災
震災に負けるな関西と根性
震災が政治の無力ささらけ出す
震災地にも朝日が昇り陽も沈む
激震に耐えた女の細い腕
人
五時四十六分 境に神戸笑わない
北風よ被災地よけて吹いてくれ
天
震災で家族のきずな深めさせ
軸
震災後ほんとの力もり上がり
兼題「越える」 新家完司選
震度7越えては逃げる術も無い
温かい援助が時差を越えて来る
古希の坂元気に越える初詣
ハードルを越える青竹踏んでいる
金儲けは師匠越えたが芸伸びず
背も顔も親をはるかに越えている
国境を越えると戦やっていた
年齢だけは亡父越えました影法師

鬼遊 保州 かつみ 公子 美津留 笛生 柳宏子 楓 欣史子 鹿太 度 小路 千梢 二南 恭昌 笛生 隆 文秋 欣史子 金太 吐来

死線越えた母が宝になつてきた
ビザもなく雲国境を越えてゆく
弟に先を越される祝い酒

水河期を越えて象の目澄んでいる

まけいくさ何度も越えてきた度胸

とび越せる筈だったのにドブに落ち

艱難を越えて見事な夕焼けだ

幾山河越えて日の丸美しい

修羅越えてやつと仏に近くなる

追い越しがあの世へ続くとも知らず

助かつた生命で苦難越えてゆく

竹とんぼ親父の屋根を今越える

乗り越えて見ると冬山手をひろげ

三年越さねばならぬ山がある

定年越しにあなたの返事待っている

垣根越し隣の犬と仲良しに

堀越えた猫の勇気をほめてやる

もう一つ越える山見て昼にする

苦しみを幾つ越えようと蝶になる

どうしても越えたい山が一つあり

父越えて井戸の深さがわかり出す

悪書一冊読んで少年期を越えた

何をやっても追い越せぬ奴ひとり居る

二人ならなんとか越えて行けそう

住

境界を越える痛み感じない

運悪く覆面バトを追い越した

テレビゲームなら父ちゃんを越えている

幾山河越えても風と雲ばかり

艶子
稚代
めぐみ

澄子

月子

度

稚代

恭昌

ルイ子

良

英子

親路

頂留子

度

保州

美智子

絹子

紫香

保州

文子

楓楽

朱夏

三男

天笑

房子

柳宏子

萬的

諷云児

むらさきの蝶ふところに冬を越す
人
信号を三つ越えたら君の街

地

友達も猫もふわりと私越え

天

平熱を越えたと眠り姫になる

軸

振り向くなわたしを越えて行く人よ

兼題「詳しい」

桜井千愁選

桃色の噂に詳しく群雀

詳しくはあとで魂胆覗かせる

お隣がよく知っている夫婦仲

家計簿に詳しい妻の手に飼われ

板挟み 詳しい訳がしゃべれない

詳しくはあとでと会議切り抜ける

詳しくは知らなくて知事はすむらしい

仏さまには詳しく言うて詫びてます

詳しいことは秘書に聞けよううまく逃げ

詳しいこと言えずじめ耐えた遺書

詳細に調べ作戦練り直す

氏素姓詳しく訊ね疎まれる

ざんげ録詳しくのろけられている

詳しくは触れてくれない父の過去

講師より詳しい人が前に居る

結論は父 詳しいことは母に訊く

詳しくすぎる弁解墓穴掘っている

井戸端会議詳しい人が一人居る

薫
希久子

親路

朱夏

完司

公子

歌子

鬼遊

度

満津子

美房

グン吉

一風

吸江

寿美

三男

久峰

天笑

萬的

射月芳

吐来

恭昌

絹子

詳細な地図持たされていて音痴
ビタミンに詳しくなつて病んでいる
こだわりの味は詳しく聞き出せぬ

坊さんが詳しい事を知っていた

酔い醒めて妻にこまごま聞かされる

詳しいが言えは傷つく人がある

卑弥乎伝説詳しく聞いたパスツァー

夫婦別姓詳しく事情聞いてない

詳しく書いてあるが分からぬ六法書

家系図に詳しい叔母でこうるさい

詳細が過ぎて要点掴めない

詳しくすぎて余計わからぬ説明書

詳しくいうに言うたら採めることになり

詳しくて疑いばかりそうになる

佳

無記名にすると詳しく書いてくる

法律を詳しく知って悪企み

詳しくはないのが話かき回す

漢方に詳しい祖母の蕎麦枕

詳しいが地震学者も結果論

人

詳しくは企業秘密という些

地

檀山の詳しい地図がうちにある

天

下戸らしく流石詳しい京銘菓

軸

医師よりも患者詳しい治療法

小路
緑良
英子

生

月子

庸佑

勇太

英子

文子

美代子

勝美

保州

月子

笛生

照

勝美

庸佑

かすみ

憲太郎

章久

絹子

小路

千秀

兼題「紹介」

川島 諷云児選

紹介の前に表情確かめる
訥弁の紹介だけと味がある
ふる里を紹介しよう安来節
難病に効くと紹介してくれる
本当の味方を紹介する酒場
紹介をしただけやのに請求書
季の移り風を紹介してくれる
紹介の前にネクタイ締め直す
新人紹介またライバルが増えました
身に余る紹介をされ身がすくむ
癌だろうか医者紹介状を書くと言う
政治家の紹介だからことわろう
長所さがして紹介をしてくれる
一見は入りにくそな店構え
紹介できぬお方とすっぱん鍋つつく
紹介はされたが名前出てこない
目と小指だけで紹介済む仲間
しっかりと値踏みされてる紹介者
保険屋を紹介されて困ります
先輩が姉を紹介せよと言う
紹介状ないがまじめさ買ってくれ
紹介の余白へ添える花言葉
ブランドを紹介されてから迷う
良い医師を教えてくれた見舞客
大切なひとを紹介しないことにする
紹介します僕は無職で妻は主婦
紹介が効いて相手の低い腰

艶子 正子 文子 緑良 章久 公子 二南 三男 ルイ子 シマ子 昭子 美代子 照子 楓子 房路 小路 ダン吉 鬼遊 正坊 月子 鹿太 森子 勇太 親路 一風

大層に紹介されるのも困り
金持ちの美女を紹介して下さい
紹介をしたけど決めるのはあなた
紹介の中で阿吽の呼吸読む
紹介状持って裏口から入る
友人の友人ですと言われても
確かなる手こたえ握る紹介状
揺り鉢の深さ紹介しておこう
紹介されたその日結婚決めました
春風に紹介されてからウフフ
御先祖の皆様これが息子です
地人
紹介状はんと病名書いてある
天
紹介状一枚街へ行ったきり
軸
紹介状書くのが好きなボールペン
兼題「こまごま」 高杉 鬼遊選

天笑 金太 金太 美房 射月芳 保生 笛生 歌子 希久子 森子 完司 絹子 希久子 諷云児 満津子 花梢 正子 豊太 頂留子 隆 しげお 金太

ひよつこの世話こまごまとやくおかめ
こまごまと娘に聞いて叱られる
土器のかけらに命を賭ける考古学
こまごまとした忠告がいやなんだ
脱税の仕方くいち伝授され
こまごまと氣遣う友といひ疲れ
年上の女こまごま念を押す
こまごまの思い被災の地に置いて
案の定こまごま言うてまずい酒
こまごまと言われたくなし花を買う
いらんことこまごま言うて叱られる
こまごまと氣の付く妻で瘦せてます
そないまでこまごま僕に言わんでも
こまごまと聞くだけ聞いて不採用
里帰りこまごま母に持たされる
こまごまと氣のつく鬼がいて困る
母さんがとかくこまごま言いすぎる
こまごまと弁解 汗を流している
よう氣のつく人で敬遠されている
垣根越しこまごま聞かぬ人いい
こまごまといろはの順にならべ替え
落とし物届けこまごま書かされる
こまごまと溜めて金目のものがない
非常用こまごま詰めた荷が重い
佳

楓子 金太 天笑 千秀 澄子 月子 岳人 柳宏子 小路 ダン吉 美房 シマ子 諷云児 正坊 歌子 天笑 稚代 寿子 保州 公子 シマ子 美房 森子 楓子 勇太

こまごまと話せば長いながい橋

人

ジグソーパズルの一片さがす冬の坂

地

靴下の穴からこぼれ出す小言

天

生きている恥こまごまと身に纏う

軸

アルミ貨を用意してます消費税

兼題「差」

橋高薫風選

被災者に差があり天を仰ぐのみ

運不運ぬくぬくニューステレビ見る

差をつけて育てた覚えのない姉妹

棒グラフの差は心臓の強さかも

差がついているとライバルやさしくて

頑張っているのに差別つけられる

ひとふんばりすれば越えられそうな差で

敗者復活 酒の肴に差をつける

隣より芝生の青さ勝っている

感動の差もこまごもの雪まつり

才能の差を近づけるのは努力

一歩ずつ心育てて差を埋める

イチローと息子比べるのはよそつ

ベアルック歳の差なんか気にしない

ちよっとした誤差も娘で赦されず

可愛さに差はないけれど花言葉

男女差に神の息吹を感じさせ

美智子 朱夏 森子 蕉 鬼遊 美房 鬼遊 英子 満津子 照 文子 君子 しげお さち子 柳伸 射月芳 ルイ子 保州 美智子 小路 かすみ たもつ 希久子

たかが十年されど十年貧富の差

グリーン車でなくとも同じ駅に着く

最後まで差をつけあの世へ行きはった

差引きは0と閻魔の前で言う

仏さんの顔にもあった時代の差

仏壇と神棚差別せぬように

鼻の差で兄の面目とり戻す

歳の差が包んでくれるわがままも

金でなく人格にある貧富の差

大学を出ているだけの差は認め

昇給の差額は僕のへそくりだ

偏差値に頭脳のサイズはかられる

偏差値を弾く無情なコンピュータ

恋をしている姉に落差のきつい日々

佳 温度差がある候補者と有権者

よこしまな心が少し宿った差

差がついて握り返して来ぬ握手

悟られぬようにじわりと差を詰める

独学の差をちぢめたり蔵書印

生まれついた優しさだからかなわない

四分六をひっくり返す策がある

天 地 父と母 川の長さに差がありぬ

軸 二代目の差がいつまでも残りそう

天 岳人

父と母 川の長さに差がありぬ

軸 二代目の差がいつまでも残りそう

隆

美代子

澄子

高栄

萬的

完司

絹子

照

欣史子

笛生

美智子

絹子

鬼遊

天笑

保州

英壬子

めぐみ

完司

正坊

ルイ子

庸佑

天 地 父と母 川の長さに差がありぬ

軸 二代目の差がいつまでも残りそう

天 岳人

父と母 川の長さに差がありぬ

軸 二代目の差がいつまでも残りそう

高橋千万子追悼句会

とき 3月3日(金)午後1時開会

ところ 堺総合福祉会館

課題と選者(各題2句)

「高い」 河内天笑選

「橋」 中田たつお選

「千」 河内月子選

「絵」 梶川雄次郎選

「皿」 橋高薫風選

◎出句締切午後2時半

会費 10000円

大阪川柳の会

とき 4月4日(火)午後5時開場

ところ サンケイビル本館3階322号

お話 産経新聞社 塚本 修三氏

宿題と選者(各題2句・午後6時半締切)

「天使」 (選者当日発表)

「舞う」 上野多重子選

「棒」 田中正坊選

「四月」(連記) 磯野いさむ選

会費 500円(各題秀句に呈賞)

◎欠席投句は3月30日着便まで

震災にあわれました

会員の皆様に

心から御見舞申し上げます

川柳塔みちのく

会
員
一
同

第13回

ひなまつり句会

と き 3月12日(日)午後1時開場

ところ 大阪府私学教育文化会館講堂
(京阪・地下鉄「天満橋」または京阪・
JR「京橋」から徒歩10分)

☎ (06) 352-3751

宿題と選者(共選・各題2句)

「おみくじ」 桑田砂輝守・板倉あおい

「プラン」 松村 隆・瀬川 幸子

「魚」 稲垣 馨・杉本さわ子

「彼女」 住田英比古・友田茶の子

「輝く」 河内 天笑・藪内千代子

◎席題なし 出句締切午後2時

会 費 1000円

主 催 番傘いざよい会

阪神大震災の

お見舞を申し上げます

い
ず
も
川
柳
会

柳界展望

町の文芸愛好者による湘南文芸交流会「川柳大会」が3月12日、藤沢市役所で開かれ、橘高薫風本社主幹が講演を行う。

★赤川菊野さん（高知県）

★ふあうすと川柳社は、去来川巨城氏が会長を退き、顧問に就任したのに伴う新役員体制を決定した。

会長代行・主幹に藤本静

港子氏、副主幹に泉比呂史

・赤井花城・中川一・伊佐

次無成・奥田秋穂の5氏。

★平成6年度の岡山県芸術祭賞等の各賞が決まった。

芸術祭賞

背を伸ばし母のしている方を見る 寺尾 俊平

紋土賞

輪の外でいつも聞き耳たてている 小林 勝子

弓削川柳社賞

風に身をまかせて逢うも別れるも 光岡 妙蓮

★藤沢市・茅ヶ崎市・寒川

正確な時計ときどきもてあます

▽出版△

■川柳句集『泰山木』（北

川絢一朗著・A5判210

頁・2月1日発行・定価2

500円（〒340円）

川柳新京都社主幹の著者が

同社発足の昭和53年以降の

三千句から年代順に五百余

句を収録。

粥十日泰山木のひかる窓

▽計報△

■西尾青一路氏（元川柳塔

社同人）平成6年12月30日

死去、92歳。昭和初期の阪

大川柳会で西尾葉名誉主幹

らと活躍、薫風・満秋・善風らに川柳作句のきっかけをつくった。

筈は竹になるとは知らな

▽芳志△

■松井かなめさん（同人・

有田市）から亡夫供養とし

て金一封を拝受しました。

■高橋千万子さんのご遺族

から供養として金一封を拝

受いたしました。

▼訂正▲

■2月号P4（川柳塔）

上段10行目の句「背のびを

すれば見えそうな三十年」

↓「……二千年」▽P10

1中段11行目「宙さんに似

て……」↓「寅さんに……」

▽P77下段19行目「拝ま

れて困る何でもない善意」

の作者は田辺亥六の誤り。

▽削除△

■2月号『川柳塔欄・玉置

当代さんの「今ごろになっ

て好きだと言われても」は

新同人紹介

奥田良子

薫風・慶子推薦

金崎峰子

薫風・みのる推薦

本人の申し出により削除

3 月 各 地 旬 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	3日(金)午後1時から 高橋千万子追悼旬会	堺市総合福祉会館 本文P103参照 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	阪神大震災のため未定	〈連絡先〉 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
京 都 塔 の 会	10日(金)午後1時から 略・摘む・切符	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽
八尾市民 川 柳 会	10日(金)午後6時から 理 解・芽・治す・句	八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 まつえ	11日(土)午後1時半から 本・約 束・身内	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	12日(日)午後1時から 風 船・橋・浅い	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	阪神大震災のため中止	〈連絡先〉 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
ほ たる 川 柳 同 好 会	14日(火)午後1時から トラブル・合・かなり	豊中市立釜池公民館 阪急釜池駅西へ150米 〒560 豊中市釜池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卵 の 花	16日(木)午後1時から 余る・野暮・曲り角・自由吟	高槻市立城内公民館 阪急高槻駅徒歩10分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島凜云児
南 大 阪 川 柳 会	17日(金)午後6時から 横柄・こける・操作・当分	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸 和 田 川 柳 会	18日(土)午後1時半から 久しい・吹く・別途・帽子	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	19日(日) 正 午 か ら 期待・舌・えくぼ・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から 姿・信じる・特に・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
富 柳 会	23日(木)午後1時から 芽・救う・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
東大阪市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後6時から ぜいたく・乙姫・聞く・悪	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	26日(日)午後1時から 爪・モーニング・ぴったり・誇る	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、田中正坊(06-336-3395)へご連絡ください。

編集後記

★「震災は油断見澄ますように来る」―部屋全体が地すべりするような震動で目がさめた。タンスが倒れて覆いかぶさってきた。羽毛ぶとんのせいか、ほとんど衝撃は感じなかった。チャンチャンコを羽織って起き出し、懐中電灯を点けるとリビングには食器類が散乱し、本箱は傾いて本が飛び出し、足の踏み場もない。

★兵庫県南部に隣接しているものの、震源地から離れているが、マンションの八階なので実際の震度はかなりのものだったと思う。幸い電気・水道・ガスはすぐに復旧し、通常の生活に戻ったから被害の大きい神戸や西宮などの比ではない。

お見舞いの便りや電話に対し、誌上を借りて心からお

礼を申し上げたい。

★阪神はこれまで二度にわたる風水害を経験しているが、地震は大丈夫という確信に近いものがあつた。それが今回、もうくも崩れたわけで、市民も行政も地震に対しては全くの無防備で電話・道路・水道・電気・鉄道・ガスという都市としての基本的機能がマヒしてしまつた。後の祭りとなるが、今後の戒めとしたい。

★「広辞苑段位認定試験」の結果が発表された。全問正解を確信していたが、三十四問中、難易度から見れば最も易しい一問を誤つたため、十段を逸して九段に認定された。これも一人勝手の確信を自戒したい。

★「戦後五十年と私」をテーマとするエッセーの応募が予想を上回つた。力作ぞろいであり、五月号から順次、発表したい。(正)

☆カーンと物凄いい力で突き上げられ、思わず布団をかぶつた。何が起つたか分からず手探りで布団から出ようとするが、固い大きな物が幾つも邪魔をしている。外れている襖から隣の部屋へ出て一息ついた。夜が明けて枕許に倒れている大きな衣裳タンス・本棚、足許に三つに分かれて転がっている和ダンスを見てよく無事だったと改めて感謝した。

☆グラグラと揺れるのが地震と思つていたが、直下型地震は揺れるのではなく、一瞬にして叩きつけられる怖さである。マンションで倒壊は免れたものの、同じような中層マンションでも一階がつぶれたり、五階から一階まで縦に裂けたり、昔からの立派な日本家屋もお寺も全壊で目を覆うばかりである。ただ、付近に火災が発生しなかったのが何

よりの救いと思われる。

☆震災後、多くの方々からのお見舞い・励ましの言葉は本当に有難く、力づけられた。幸い、阪神間で連絡のとれた範囲内では怪我人もないようでホッとした。ただ、句会場が避難所に当てられ、句会を休まざるを得ないのが残念である。

☆近隣の絆の大切さ、有難さを痛感した。「震度七 蠟梅の香は変りなし」(み)

○少しずつ兆してきた春が阪神大震災の被災者の方々の立ち直りを、助けてくれればと祈るばかりである。

○以前、寝たまま読書―寝読(ねどく)を楽しんでいると書いたが、やめざるを得なくなつた。いくら近視でも視力の老化は止み難く、そんな姿勢では目が疲れてつらくなつてきた。仕方なくベッドに座って読むと、椅子とちがつてしばらくすると腰にこたえてくる。

○昔から不眠症のけがあるので、寝読がだめとなると大変つらい。そこである深夜、古いラジオを出し、イヤホンで聴いてみた。どうせ受験生対象のDJだろうと思つていたら、落着いた年配のアナウンサーの声がとび込んできた。「NHKラジオニッポン、ただ今東京では午前〇時です」

○それから、すっかりその深夜放送の虜になつて、音楽・ドラマ、落語・文芸談などを誰にも邪魔されずに楽しんでいる。

○と言えば、博学になつてしかるべきだがそうはゆかない。ふつと眠つて中途が抜けたり、半ばで本格的に眠り込んだり、朝になるとはほとんど記憶していない。考えてみれば、寝たまま勉強(寝勉)も、どだい厚かまし過ぎるようだ。(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（5月号）」

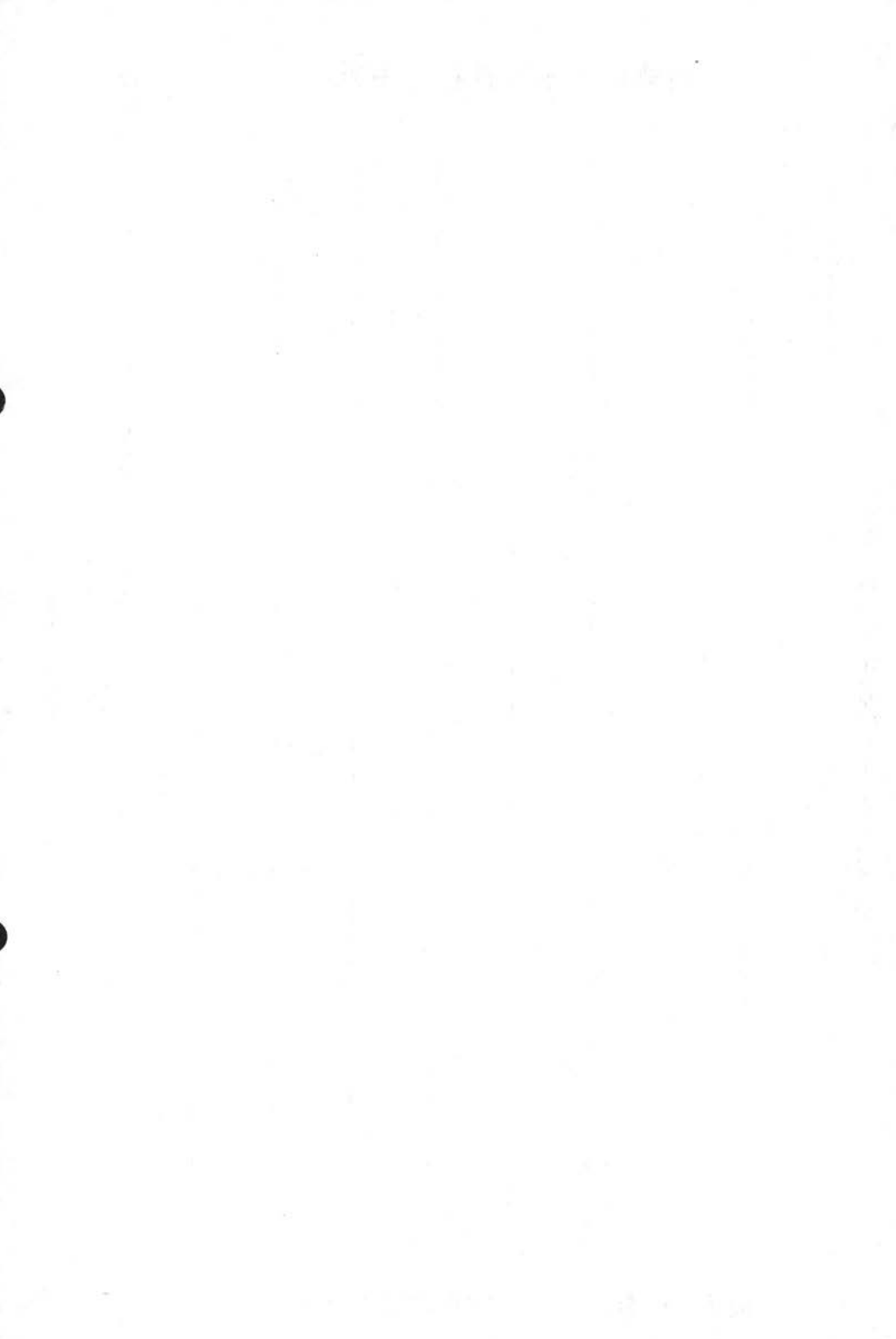
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確にお書きください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

5月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (8句) 橘 高 薫 風 選
水煙抄 (8句) 高 杉 鬼 遊 選
澎湖抄 (3句) 小 出 智 子 選
茴香の花 (3句) 西 出 楓 楽 選
課題吟 「馬」 美 田 旋 風 選
「とどろく」 中 島 志 洋 選
「女々しい」 都 倉 求 芽 選
初歩教室 「花」 (3句) 吉岡美房担当

川柳塔欄への投句は同人、澎湖抄欄は誌友 (誌代半年分前納者) 茴香の花欄は女性に限ります。

6月号 課題吟 「町」「突然」「望む」
初歩教室 「捨てる」

本社3月句会

とき 3月7日 (火) 午後5時半
ところ メンズファッションセンター3F
中央区内本町1-11 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車 (3番出口) 交差点南西角
おはなし 安 藤 寿 美 子
「呼ぶ」 門 谷 た ず 子 選
「僅か」 宮 西 弥 生 選
「経緯」 河 内 月 楓 選
「ずばり」 西 出 楓 楽 選
「家族」 西 尾 栞 選
兼題 各題2句以内
席題 当日発表
会費 500円
投句料 400円 (80円切手5枚) 同封のこと

本社4月句会 7日 (金) 予定

兼題 「妬く」「惜しい」「立場」
「ふんざり」「亀裂」

夜市川柳募集

第10回「美人」 中尾 藻介選
ハガキに3句 3月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺 川 柳 会

4月の常任理事会は4月1日 (土)

NHK川柳作品募集

課題 「軽い」 森中恵美子 選
ハガキに3句 3月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 3月25日 (土) 午前11時5分から
ラジオ第1放送 (予定)

西日本文字放送作品募集

課題 「色」 橘高 薫風 選
ハガキに3句 3月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

定価 六百元 (送料84円)
半年分 四千元 (送料共)
一年分 七千九百元 (同)
平成七年三月一日発行
編集兼 橘 高 薫
発行人 藤 原 童 心 社
印刷所 ウエムラ第2ビル202号室
大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
発行所 川 柳 塔 社
電話 (06) 元一六九一四番
振替 〇〇九八〇一五二三三八番

小学館

家族をテーマにした

「川柳」の真髄と妙味



いすこもおなじ

山田良行 監修

平成家族川柳

川柳の歴史から作り方、
全国の投句先まで網羅。
新創作の句を加えた、
楽しくって味わい深い川柳入門書。



●好評発売中!! 定価1,000円(税込)四六判/258頁



■主な内容／川柳って一体なんだ
／川柳の三つの味／川柳を作るた
めの道具／題詠と雑詠の区別／五
七五のリズム／ノートは絶対必要
／出句するには／新聞柳壇は
登竜門／三号雑誌では
なくなかった柳詠
／柳界で使われる
用語／選句の
TPO／披講と
いうのも大事
／大会、句会
／競吟の場
／日川協という
組織／柳界の東と
西の違い／柳界には
先生なんていない／雅号で
呼ぶと仲良しになる／平成の奇揚
句／色紙、短冊の書き方／ポスト
・ザ・センリユウ名句集／出版社
から出版するには／川柳の句碑は
似合わない／ほか

